

MIARAIZAWA SITE
身 洗 沢 遺 跡
ITTYOGOTAN SITE
一 町 五 反 遺 跡

県道石橋・石和線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1990. 3.

山梨県教育委員会

身 洗 沢 遺 跡

序

本報告書は、県道石橋・石和線建設事業に伴う事前の発掘調査の結果をまとめたもので、調査対象の遺跡は山梨県東八代郡八代町身洗沢遺跡、同町一町五反遺跡であります。

両遺跡の所在する八代町は、甲府盆地の南縁にあって、扇状地の発達した地域であります。八代町を北流する浅川によって形成された扇状地の沖積地上には縄文時代から近世に至るまで多くの遺跡が知られております。両遺跡の周辺には岡銚子塚古墳や狐塚古墳、団栗塚古墳など多数の古墳が点在するほか、甲斐と駿河を結ぶ古道のひとつ若彦路があり、古代から重要な地域であったことが窺われます。

身洗沢遺跡は、扇状地の扇端部に立地する弥生時代から古墳時代にかけての低湿地性の遺跡であり、そのため農具などの多くの木製品や種子などの植物遺体が発見されました。とくに今回注目されるのは、山梨県下で初めて該期の水田址が3層にわたって検出されたことで、甲府盆地の水田開発を考えるうえで重要な発見となりました。また微高地上より住居址やピット群が検出され、集落と生産活動の場との関係や地形利用、さらには植物利用といった当時の生活を復元するための多くの成果を得ることができました。

次に一町五反遺跡は、弥生時代終末の遺跡で掘立柱建物址などが検出されました。身洗沢遺跡と近い位置にあり、また立地も似ており、両遺跡の関係を考えるうえで重要な遺跡と思われま

す。こうした調査の成果は、甲府盆地における歴史研究、さらには弥生時代の生業や生活を考えるうえで重要な資料となるものと信じます。本報告書が多くのの方々の研究にご活用いただければ幸甚です。

なお、本報告書が刊行されるまでに多くの方々からご支援、ご協力を賜りました。関係機関各位、貴重な調査結果をお寄せ頂いた諸先生方、並びに直接調査に当たられた皆様方には、末筆ながら改めて厚く御礼申し上げます。

1990年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例 言

1. 本報告書は、平成元年度の県道石橋・石和線建設事業に伴って発掘調査された山梨県東八代郡八代町身洗沢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 道路改良事業区域の発掘調査は土木部より委託され山梨県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査、整理作業および報告書の作成は、山梨県埋蔵文化財センターが行い、同機関文化財主事中山誠二、非常勤嘱託今福利恵が担当した。
4. 本報告書の執筆は、試掘調査に係わる第Ⅰ章第2節を森和敏が、本調査に係わる第Ⅰ章から第Ⅴ章を中山・今福が行なった(第Ⅱ章第3節は高橋学氏による)。第Ⅶ章には、名古屋大学文学部教授渡辺誠、立命館大学講師高橋学、財団法人帝京大学山梨文化財研究所古植物地理室長外山秀一、同地質火山灰室長河西学の先生方にご執筆を戴いた。
5. 写真撮影は、遺構を中山および今福が行い、遺物を丸山哲也、吉岡弘樹が行った。
6. 本報告書にかかる出土品ならびに記録図面、写真等は、一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
7. 出土品整理参加者
望月和佳子、斉藤多喜子、斉藤常子、江川勝子、小林敬子、石原はつ子、長田くみ子、
弦間千鶴、塩島富美子
8. 発掘調査および本報告書の作成にあたり、下記の方々のご教示・ご協力を得た。記して謝意を表する次第である。

笠原安夫(前岡山大学農業生物研究所教授)

都出比呂志(大阪大学文学部教授)

渡辺 誠(名古屋大学文学部教授)

松谷 暁子(東京大学総合研究資料館)

工 楽 善 通(奈良国立文化財研究所)

高 橋 学(立命館大学講師)

外 山 秀 一((財)帝京大学山梨文化財研究所)

鈴 木 稔((財)帝京大学山梨文化財研究所)

河 西 学((財)帝京大学山梨文化財研究所)

千 野 裕 道(東京都埋蔵文化財センター)

斉 藤 修 二(八代町教育委員会)

目 次

序

例言

第Ⅰ章 調査状況	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 試掘の経過	1
第3節 調査組織	2
第Ⅱ章 遺跡概況	3
第1節 遺跡の位置と周辺環境	3
第2節 調査区域の設定と調査方法	5
第3節 身洗沢遺跡の基本層序	5
第Ⅲ章 縄文時代の遺物	8
第Ⅳ章 弥生時代から古墳時代の遺構と遺物	9
第1節 基本層序と地形	10
第2節 住居址と出土遺物	10
第3節 水田址と出土遺物	17
第4節 竪穴状遺構と出土遺物	36
第5節 溝状遺構と出土遺物	36
第6節 ピット群と出土遺物	42
第Ⅴ章 近世の遺構と遺物	60
第1節 溜池状遺構と出土遺物	60
第2節 水田址	60
第3節 包含層出土遺物と自然遺物	62
第Ⅵ章 各 節	63
第1節 植物遺体	63
第2節 身洗沢遺跡におけるプラント・オパール分析	70
第3節 身洗沢遺跡のテフラ	78
第4節 年代測定結果	79
第5節 身洗沢遺跡の地形環境	80

挿 図 目 次

第1図 身洗沢遺跡トレンチ設定図……………	1	第33図 4区溝状遺構出土土器(2)……………	40
第2図 主な周辺の遺跡……………	2	第34図 4区溝状遺構出土土器(3)……………	41
第3図 身洗沢遺跡調査範囲……………	4	第35図 4区溝状遺構出土土器(4)……………	42
第4図 身洗沢遺跡の基本層序……………	6	第36図 3区ピット群配置図……………	43
第5図 調査区および遺構配置図……………	7	第37図 第1ピット群……………	44
第6図 縄文時代遺物……………	9	第38図 第2ピット群……………	45
第7図 1～2区住居址および水田位置図		第39図 第3ピット群(1)……………	46
(第2ステージ)……………	10	第40図 第3ピット群(2)……………	47
第8図 1号住居址……………	12	第41図 遺物出土ピット……………	48
第9図 1号住居址柱穴・炉		第42図 ピット内出土土器……………	49
および2号住居址……………	13	第43図 ピット内出土木材(1)……………	50
第10図 1号住居址・竪穴状遺構出土土器	14	第44図 ピット内出土木材(2)……………	51
第11図 遺構内出土土器……………	15	第45図 3区遺構外出土土器……………	52
第12図 住居址出土柱材……………	16	第46図 4区遺構外出土土器(1)……………	53
第13図 第1ステージ……………	19	第47図 4区遺構外出土土器(2)……………	54
第14図 第2～第3ステージおよび足跡面	20	第48図 4区遺構外出土土器(3)……………	55
第15図 第4～第5ステージ……………	21	第49図 4区遺構外出土土器(4)……………	56
第16図 1区谷部出土土器(1)……………	22	第50図 3・4区遺構外出土土器……………	57
第17図 1区谷部出土土器(2)……………	23	第51図 土製品・石製品・金属製品・	
第18図 1区谷部出土土器(3)……………	24	木製品……………	58
第19図 1区谷部出土土器(4)……………	25	第52図 4区出土木器……………	59
第20図 1区谷部出土土器(5)……………	26	第53図 溜池状遺構……………	61
第21図 1区谷部出土土器(6)……………	27	第54図 溜池状遺構・水利施設……………	62
第22図 2区出土土器(1)……………	28	第55図 溜池状遺構出土木器……………	62
第23図 2区出土土器(2)……………	29	第56図 桃核の大きさ比較……………	64
第24図 1区谷部出土木器(1)……………	30	第57図 プラント・オパール分析結果…	73～74
第25図 1区谷部出土木器(2)……………	31	第58図 スコリアを含む堆積物の	
第26図 1区谷部出土木器(3)……………	32	重鉱物組成……………	78
第27図 1区谷部出土木器(4)……………	33	第59図 1区東壁セクションと	
第28図 1区谷部出土木器(5)……………	34	サンプル地点……………	79
第29図 1区谷部出土木器(6)……………	35	第60図 笛吹川右岸地域の等高線図……………	81
第30図 竪穴状遺構……………	37	第61図 笛吹川右岸地域土地利用図	
第31図 4区溝状遺構……………	38	(明治20年代)……………	82
第32図 4区溝状遺構出土土器(1)……………	39	第62図 身洗沢遺跡周辺微地形図……………	83

表 目 次

第1表	桃核数量表	65	第3表	木器観察表	87
第2表	桃核計測値一覧表	67	第4表	身洗沢出土土器観察表	88

図 版 目 次

図版1	1号住居址 2号住居址 竪穴状遺構 第1ピット群 第2ピット群 第3ピット群	103	図版3	1号住ピット4内柱痕 ピット65 木材出土状況 1区水田剣形木製 品出土状況 1区水田又クワ出土 状況 2号住柱痕 1区水田クワ 柄出土状況 1区水田組み合せク ワ出土状況	105
図版2	1区作業風景 1区第2ステージ 水田面・畦畔 1区第2ステージ 水田面遺物出土状況 1区第3ステージ水田面足跡 4区溜池状遺構 4号溝と竪穴状遺構	104	図版4	出土遺物(土器・石器・土製品・ 金属製品)	106
			図版5	出土土器	107
			図版6	出土木製品	108

写 真 目 次

写真1	身洗沢遺跡出土植物遺体	66	写真3	プラント・オパール	77
写真2	プラント・オパール	76			

第 I 章 調査状況

第 1 節 調査に至る経緯

昭和63年 6 月 6 日～16日	試掘調査の実施。本調査区範囲の設定。
平成元年 6 月 3 日	文化庁に発掘通知を提出する。
平成元年 6 月 13日	発掘調査を開始する。
平成元年 11月 18日	発掘調査を終了する。
平成元年 12月 4 日	石和警察署に遺物の発見通知を提出する。

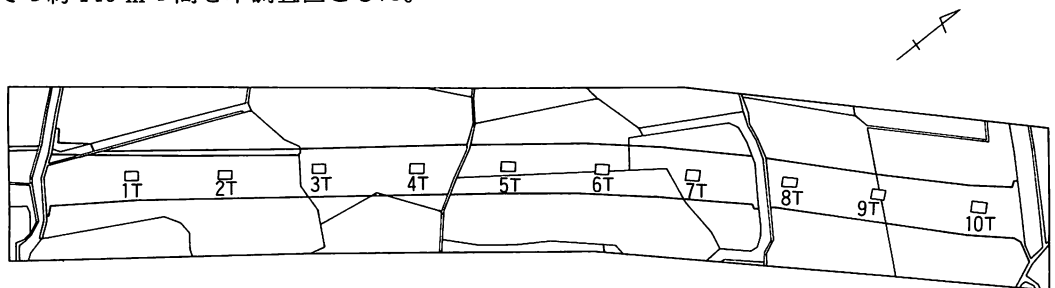
第 2 節 試掘の経過

昭和63年 6 月 6 日より16日にかけて、身洗沢遺跡の道路建設予定地内を試掘調査を行なった。試掘調査範囲は、長さ 250 m、幅12mの約 3,000 m²で、この間に 2 × 3 mのトレンチを10カ所設定し、調査を実施した。(第 1 図)。

1 号トレンチでは地表下40～50cmの黒褐色腐食土層に掘り込みが検出され、この覆土から古墳時代初頭の土器片と木片が出土した。2 号トレンチでは、地表下35cmで掘り込みが2カ所検出された。3・4号トレンチでは出土遺物はなく、表土下が砂礫層となる。5号トレンチからは地表下85～100cmの黒色細砂層(第V層)で掘り込みが検出され、覆土から弥生時代末の土器片が集中して多量に出土し、周囲には礫や木片が包含されていた。また、この5号トレンチの各層位の土壌を採取しプラント・オパール分析を行なった結果、地表下約1mから上層にかけてイネのプラント・オパールが検出され、水田址存在の可能性が強まった。

第6号トレンチと10号トレンチからは遺物遺構の検出はされず、表土より下1m50cmまでは砂層、円礫を含む砂礫層やシルト層が薄い黒色腐食土層をはさみながら互層となり、第7号・9号トレンチではさらにその下部まで砂礫層がつづく。地層は全般的に北に傾斜し、北になるほど礫を多く含む層が厚くなる。

以上の試掘結果を踏まえて調査区を1号トレンチから、5号トレンチと6号トレンチの間までの約140mの間を本調査区とした。

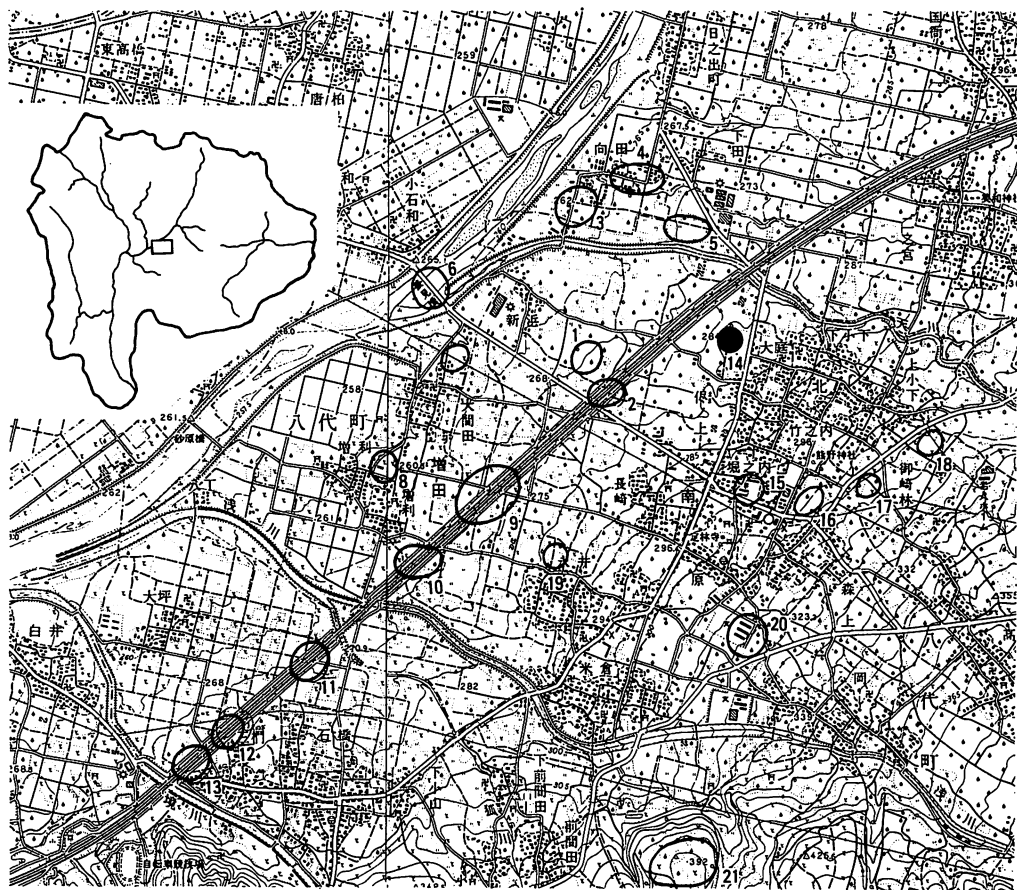


第 1 図 身洗沢遺跡トレンチ設定図

0 50M

第3節 調査組織

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	中山誠二（文化財主事） 今福利恵（非常勤嘱託）
調査員	高橋 学（立命館大学地理学研究室）
作業員	望月和佳子、三枝光子、石部一雄、篠原知子、岸本美苗、倉田勝子、小宮通子、渡辺百合子、長田くみ子、若林初美、芦沢志保、古屋典子、梶原美香、矢崎ます子、矢崎米子、山口高正、佐藤洋司、香川福有、手賀聡、塚田俊樹、望月裕司、石原はつ子、小林よ志子、中込よしミ、出月満寿江、小林美智子、丹沢貴子、依田小巻、上里洋、金井京子、塩島富美子、河西拓也、岩崎きみ子、内田奈美、中沢美智子、斉藤百代、斉藤多喜子、小林敬子、雨宮照子、金子美枝、飯島きく子、土屋ふじ子、米山とくの、中沢典子、米山八重子、江川勝子、斉藤常子



1. 身洗沢遺跡 2. 俵の下遺跡 3. 塚ノ越遺跡 4. 上堀遺跡 5. 向田遺跡 6. 螢見橋下 7. 横田遺跡 8. 神の木遺跡
9. 宮田遺跡 10. 沢の木遺跡 11~13. 石橋条里、I~III 14. 狐塚古墳 15. 堀ノ内遺跡 16. 八王子遺跡 17. 金地蔵遺跡
18. 久保遺跡 19. 三口神遺跡 20. 馬見塚遺跡 21. 上の平遺跡

第2図 主な周辺の遺跡

第 II 章 遺 跡 概 況

第 1 節 遺跡の位置と周辺的环境

本遺跡は甲府盆地の南東部に位置する浅川扇状地の扇端部に立地し、標高は約 270 m を測る。甲府盆地の南側には御坂山地が西南西方向に連なり、北流する河川によって扇状地や丘陵が形成されている。遺跡の周辺には扇状地地形が発達し、浅川扇状地、金川扇状地、京戸川扇状地などがみられる。遺跡の立地する浅川扇状地は、御坂山地鳥坂峠周辺に源流をもつ浅川により、八代町門林を扇頂として約 70° の開きをもって、時代を異にして形成された二段の扇状地である。扇端部分は緩やかに傾斜し、笛吹川の氾濫原に接する。御坂山地は東側で隆起が著しいため、扇状地を流れる川は西側に片寄っており、このため遺跡の北側を西流している天川は浅川扇状地と東に隣接する金川扇状地のほぼ境を流れ、浅川は南西方向約 2 km に位置している。

遺跡の立地する場所は浅川扇状地扇端部のため地下水位が高く、地表面下約 50cm 程で水が浸透し、また周辺には多くの湧泉がみられる。地形的には複数の微高地とその後背湿地により複雑に構成され、地質は砂礫質堆積物によって構成されるもののほか、シルト・粘土質堆積物によるものもみられることより、河道変遷のくりかえしによる不安定な場所であったことが窺える。

この笛吹川の南側では扇状地扇端部の低位面においても数多くの遺跡が知られている。縄文時代の遺跡は、扇央部付近のほか横田遺跡や堤下町遺跡など笛吹川沿岸近くにもみられる。弥生時代以降の遺跡については、身洗沢遺跡の周辺で神の木遺跡、蛭見橋下遺跡、俣ノ下遺跡などの多くの低湿地性遺跡が存在する。神の木遺跡は微高地上に立地し、弥生時代後期の土器が出土している。蛭見橋下遺跡は、橋梁工事の際地表面下約 8 m 付近より古墳時代初頭の土器が発見され、甲府盆地の低地開発を考える上でその立地とともに重要な遺跡である。また身洗沢遺跡の南側約 100 m に俣ノ下遺跡が存在し、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての住居址や建物址が調査されている。この遺跡は身洗沢遺跡と同じ微高地上にあり、同一集落の一部である可能性が高い。さらに向田遺跡、屋敷内遺跡、沢の木遺跡などの弥生時代の遺跡や塚ノ越遺跡、堤南遺跡、堤下町遺跡、宮田遺跡などの弥生時代から平安時代にかけての遺跡が存在する。

身洗沢遺跡の南側の扇央部には狐塚古墳、団栗塚古墳などの前期古墳が存在し、石室の形態、埴輪などからいずれも五世紀後半の年代が与えられている。浅川左岸の丘陵上には岡銚子塚古墳、盃塚古墳などの四世紀後半から五世紀初頭の前期古墳が見られ、また扇央部から扇頂部にかけても後期古墳が多く点在する。身洗沢遺跡の近くには、古くから甲斐と駿河を結ぶ若彦路が存在している。この古道は平安時代末期の「吾妻鏡」を初見とし、以後軍事的に重要視されているが、考古学的にみてそれ以前にも存在していたのは確かであり、遺跡の分布からも重要な役割を担っていたことが窺える。

笛吹川北側の沖積地には現在のところ遺跡は発見されていない。笛吹川は多くの洪水により

土砂を著しく厚く堆積させている。そのため遺跡がまったく存在しないのではなく、多くの遺跡が蛸見橋下遺跡のように厚い土砂に覆われているものと考えられ、将来的に発見される可能性がある。

浅川扇状地の扇端部という地下水位の高い低湿地性の遺跡は従来発掘調査がほとんど行われておらず、以上のような歴史的環境の中に位置する本遺跡は甲府盆地低部における開発を考えるうえできわめて重要である。

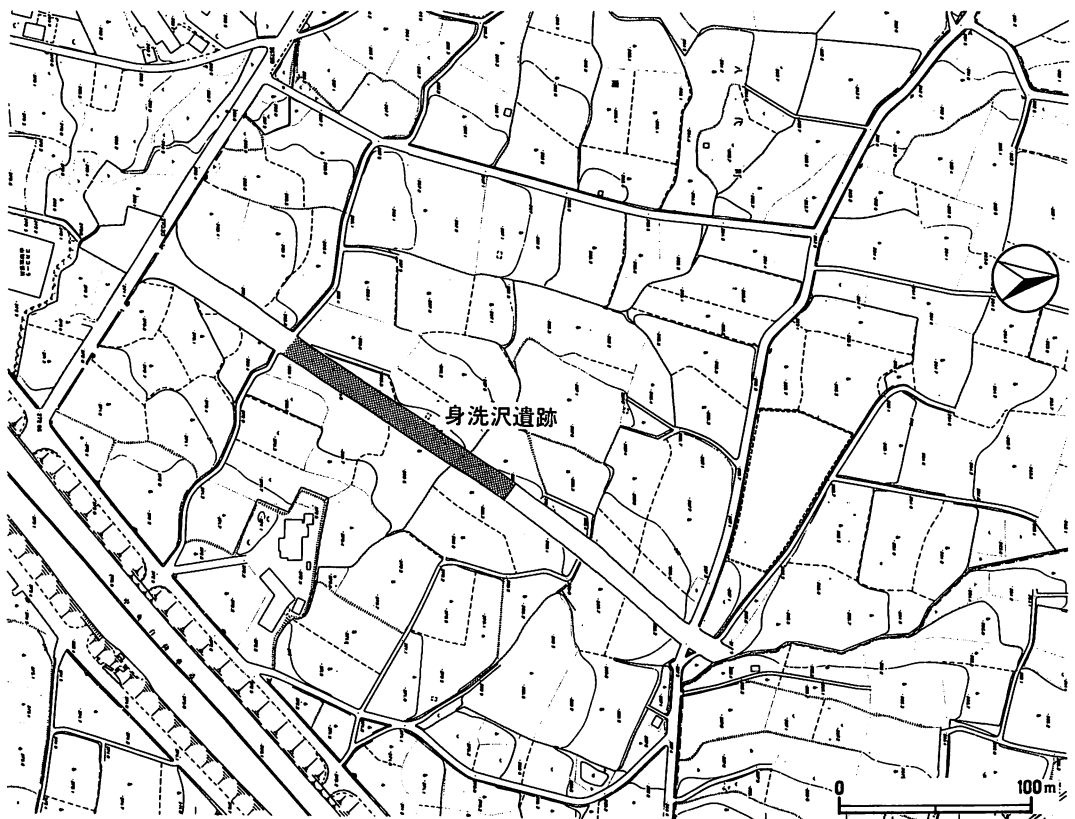
参考文献

山梨県地質図編纂委員会(1970)『山梨県地質誌』

八代町誌編纂室(1975)『八代町誌』

山梨県教育委員会(1984)『石橋条里制遺構・蔵福遺跡・俣ノ下遺跡』

石和町誌編纂委員会(1987)『石和町誌 第一巻自然編 歴史編』



第3図 身洗沢遺跡調査範囲

第2節 調査区域の設定と調査方法

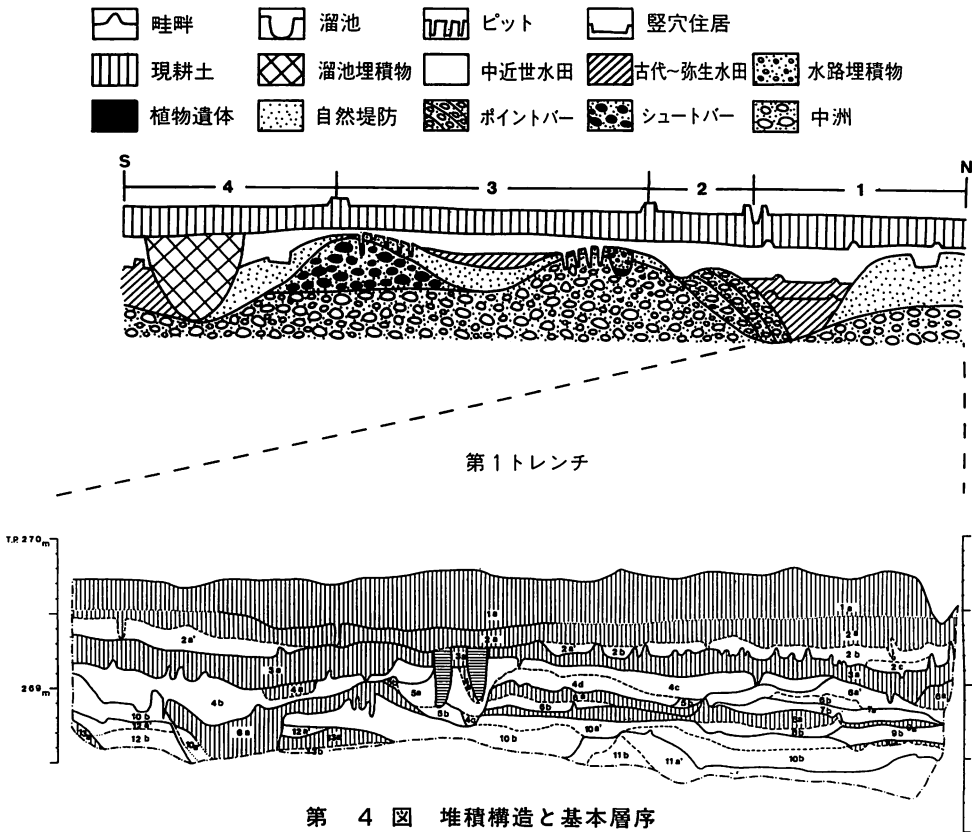
本遺跡は、昭和63年の試掘調査により、遺跡の存在が確認されていたので、グリット方式で全面調査を行うこととした。調査範囲は、県道の建設予定地で、幅約10m、長さ約140mに及ぶ。そのため生活道路により調査区域が分断される場所があり、その地点で便宜的に区分けを行い、北から1区、2区、3区、4区とした。調査区の設定は、5m四方のグリットを設定し、グリットの番号は、南東端を起点に調査区域の延びる方向に沿って1から27までの算用数字を、調査区の幅に対しAからCのアルファベットを付した。

遺跡は低湿地性で地下水位が高く、試掘段階でも複雑な層序関係が確認されたため、本調査時に土層確認と水抜きのためのトレンチを設定した。調査区域へ浸透する地下水は、地表面下約30cmから50cmで浸透しはじめ、電動ポンプにより24時間にわたり排水を行った。また、試掘時の土壌分析によってイネのプラント・オパールが検出されており、水田址の存在が予想されたため、このトレンチによってその層位の検出を図った。その後、遺物包含層及び水田址を土層断面において確認し、表土を削除して遺構・水田址の検出に努めた。遺構確認の精査にとともに、調査区の周囲に沿って幅約30cm程の溝を掘り、確認面の層序に先行させて土層を把握し、また調査面への水の浸透を防いだ。調査区域の北側においては、とくに地下水の浸透が著しくしかもシルト質と砂質の互層で地盤が軟弱のため、長さ5mのシートパイルを調査区の両側に沿って打ち込むこととした。以上の方法により、全面調査を行った。

第3節 身洗沢遺跡の基本層序

地層の観察にあたっては、人間を含めた生物の影響で土壌化した層、すなわち旧表土（旧地表面）とその母材となった地層を認識するように努めた。ここでは前者をa層、後者をb層と呼ぶことにしたい。なお、地表面であった時間が短いなどの理由で、土壌化が十分に進行していない地層をa'層とする。また、b層のうち構成物の粒度組成や堆積構造の違うものについては、c層、d層……と細分した。これは、それぞれの地層の間には、a層が存在したけれども、侵食され欠損してしまった場合、あるいはa層が形成されるほど堆積に時間間隙がなかった場合などに生ずる現象である。洪水や火山噴出物などが堆積したばかりの段階ではすべてb層……であるが、次に堆積が生ずるまでの間に時間間隙があると生物の影響の下に、攪乱や有機物の混入などが行われ、a層が生成されると考えられるのである。そこで、a層とb層をセットと考え、形成時間が新しいものからナンバリングした。たとえば、5a層とは上から数えて5枚めの地表を指すことになる。一般にa層からは土地利用に関する情報などを、b層からは地形環境の変化や災害に関する情報などを読み取ることができる。従来、発掘調査に際し、遺構の検出はここで言うb層の上面で実施されることが多かったため、竪穴住居址や溝といった地表面に掘り込まれた遺構を検出することは比較的容易であったが、水田の畦畔や方形周溝墓など旧地表面に盛り上げられた遺構の検出は難しかったのである。また、遺物包含層と呼ばれる地層の多くは、a層のことであると考えられる。

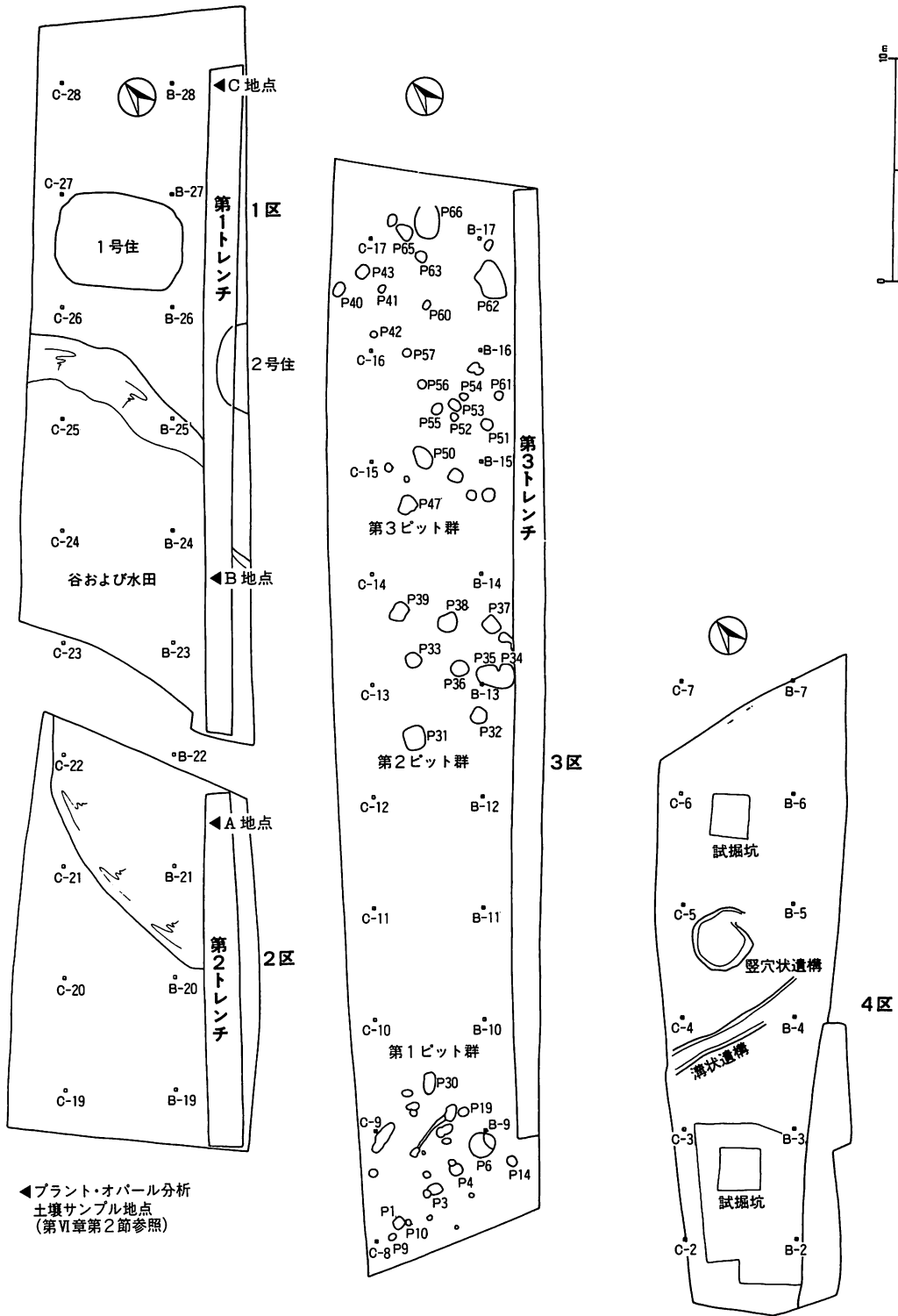
今回報告する身洗沢遺跡の調査は、道路建設に先立つ発掘であったため、幅12m、長さ140mというトレンチ状の平面形をしている。この調査区は、浅川の形成した扇状地帯を横断する方向に長辺を持つため、扇状地帯を構成するさまざまな微地形の層相を観察することができた。第4図に示したように、調査区の北端にあたる1区は、自然堤防と呼ばれる微高地とその形成に関わり、機能を失ってからは後背湿地化した河川（旧河道）が確認された。2区ではポイントバー、3区は自然堤防に被覆された中洲とシュートバーが主要な微地形である。そして、南端の4区ではシュートバーの一部とそれを形成した旧河道が後背湿地化した状態で検出されたのである。この地域は、過去において河川の直接的影響を強く受けており、その結果、地表面の起伏が大きく、構成物も粗粒であった。この地表面の起伏は、発掘調査で明らかにされた過去の土地利用と良く対応している。すなわち、微高地部分は住居址、谷部分は溜池状遺構や水田として利用されていたと考えられるのである。



第 4 図 堆積構造と基本層序

第 4 図 基本層序

- | | | |
|--------------------------|----------------------------------|------------------------|
| 1a シルト質細砂 10YR3/2 黒褐 | 2a シルト質極細砂 10YR1.7/1 黒 | 2a' シルト質極細砂 10YR3/1 黒褐 |
| 2b 極粗砂-細砂 10YR7/4 にぶい黄橙 | 2c 粗砂-細砂 5YR7/1 明褐 | 3a シルト 10YR7/1 灰白 |
| 4a シルト質中砂 2.5Y5/1 黄灰 | 4b 粗砂-細砂 10YR7/1 灰白 | 4c 細砂-極細砂 2.5Y7/3 浅黄 |
| 4d 粗砂-中砂 5Y7/3 浅黄 | 5a シルト質中砂 10YR7/3 にぶい黄橙 | 5b シルト質細砂 10YR6/1 褐灰 |
| 6a シルト質細砂 10YR5/1 褐灰 | 6a' シルト質中砂 10YR7/4 にぶい黄橙 | 6b 粗砂 10YR7/1 灰白 |
| 7a 粗砂 10YR3/1 黒褐 | 7b 中礫(亜円-マトリックス粗砂) 10YR7/4 にぶい黄橙 | 8a シルト 10YR1.7/1 黒 |
| 8b 粗砂-中砂 2.5Y7/4 浅黄 | 9a シルト質中砂 10YR1.7/1 黒 | 9b 中砂 2.5Y7/1 灰白 |
| 10a シルト質細砂 10YR5/1 褐灰 | 10a' シルト質細砂 10YR5/2 灰黄褐 | 10b シルト質細砂 5Y7/1 灰白 |
| 11a' シルト質極細砂 10YR5/2 灰黄褐 | 11b シルト質極細砂 5Y7/2 灰白 | 12a シルト質細砂 2.5Y6/2 灰黄 |
| 12b 粗砂-中砂 7.5Y7/1 灰白 | 13a シルト質細砂-シルト質中砂 5Y4/1 灰 | 13b 粗砂-中砂 5Y6/1 灰 |



第5図 調査区および遺構配置図

第 III 章 縄文時代の遺物

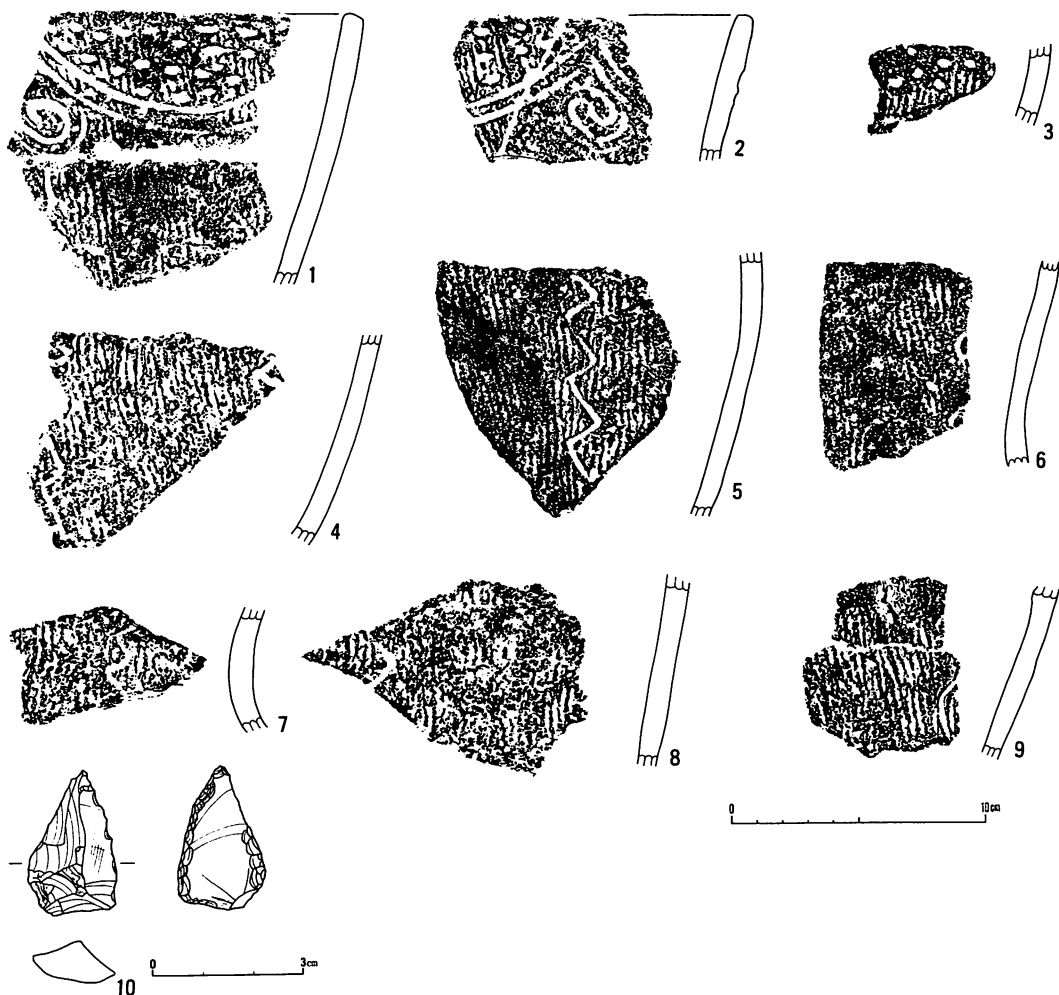
縄文時代の遺物は、包含層中より土器片、石鏃（第 6 図）が若干出土しているのみで、遺構はみられない。

土器片は、B-10グリッドにおいてまとまって出土している。すべて同一個体とおもわれるが、復元するまでにはいたらない。文様施文は、地文にはR Lの縄文が斜方向に施され、その後文様モチーフを沈線によって描出している。器形は、胴部でくびれ、口縁部はわずかに内反しながら開いていくものとおもわれる。胎土には白色砂粒が多く含まれ、金雲母が少量混ざっており、色調は明褐色を呈する。全体的に摩耗が著しい。

1～3は口縁部の破片である。縄文を地文とし、棒状の工具によりそれぞれ弧線を2本単位で連続して描出している。また弧線の内側には右斜め横からの刺突文によって充填され、弧線接続部に小渦巻文が描出される。4～9は胴部破片で、縄文を地文とし、棒状工具による鋸歯状あるいは波状（6、9）の懸垂文が一本単位でみられる。口縁部との文様モチーフの区画はみられない。

本資料は類例が少なく不明瞭な点があるが、中期後半の連弧文土器の一群と思われる。まとまったものとしては釈迦堂遺跡群三口神平地区や大月遺跡、神奈川県上坂東遺跡などに類例がみられる。地文には撚糸文と縄文のものがみられ、弧線接続部の渦巻の下にV字形のモチーフが描出されるものが多い。それぞれで伴出した土器群から曾利Ⅱ式に位置付けることができる。連弧文土器の文様のモチーフにおいて、二本単位の弧線でその弧線接続部に小渦巻が描出される例は少なく、器形は異なるが東海地方西部の中富式に類似する。また弧線の上部を刺突文で充填する手法は、曾利Ⅱ式からⅢ式にかけてみられるものの、曾利式土器の手法はほとんどが斜め下あるいは縦位の方向に施され、横方向からの刺突によるものはほとんどみられない。さらに弧線は隆線によって描出される点などに違いがある。曾利Ⅲ式に同様の文様構成をとるものがみられるが、多くは地文が縄文あるいは条線であり、本資料はこれらに先行する一群であると思われる。その文様の系譜については、長野県伊那地方にみることができず、この方面より東海地方西部の影響が強いように思われるが、より多くの検討を要しよう。

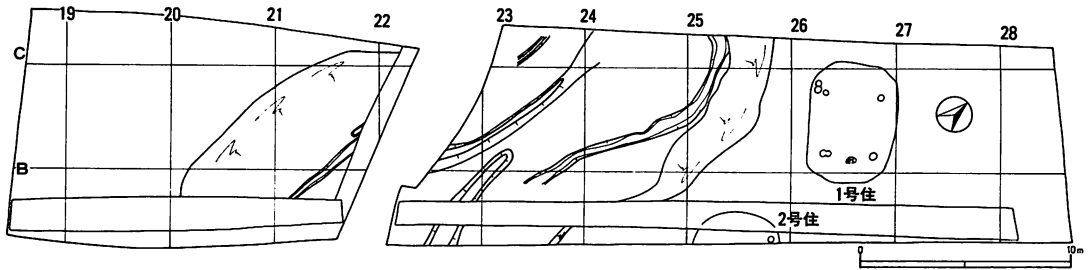
石器は、2区のA-21グリッドから出土した石鏃が一点のみである（第6図10）。石材は黒曜石で、えぐりはみられない。長さ1.9cm、幅1.2cm、厚さ0.5cmを測り、重さ0.8gを計る。主要剥離面側の縁辺部に調整がみられるので、全体的にやや厚く未製品とおもわれる。



第 6 図 縄文時代遺物

第 IV 章 弥生時代から古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、弥生時代後期の住居址 2 軒、水田址 3 層、古墳時代初頭の竪穴状遺構 1 軒、溝状遺構 1 基、ピット 67 基が発見されている。水田址は部分的ではあるが層位的に検出することができ、これをもとに時期をステージとして分けた。しかし、水田址は洪水によるきわめて短期間の埋没とおもわれ、遺物の分離には至らなかった。また最上層の水田址は弥生時代の遺物に混ざって多くの古墳時代の遺物が検出されたものの、層位的な分離は明確にできなかった。そのため弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて遺構の時期差を水田址に基いて区切ったが、遺物について分離が困難な部分があるため弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてをこの章でまとめて述べることにする。



第7図 1～2区住居址および水田位置図(第2ステージ)

第1節 基本層序と地形

身洗沢遺跡の調査区は浅川扇状地の扇端部を横切るかたちとなり、地形的には微高地とその後背湿地の繰り返しとなる。1区の24から28グリッドにかけてシルト質の土層からなる微高地となり、1区から2区の20から24グリッドで微高地が削られ旧河道となる。2区の18、19グリッドではその旧河道の南側を埋めるように礫が堆積し、自然堤防を形成している。弥生時代の遺構はこの1区、2区でみつかっている。住居址は1区のシルト質からなる微高地上に立地し、水田址は旧河道を利用して営まれている。礫の堆積した自然堤防からは何ら痕跡はみつからない。3区、4区の5から17グリッドにかけては砂質、シルト質土が砂礫層を覆う微高地となり、10～12グリッド付近で狭い後背湿地を形成する。この微高地は4区の5グリッド付近より土層が下へ落ち始め、3グリッド付近から1グリッドまで腐植質土の厚い堆積となる。古墳時代の遺構は3区と4区にみられる。ピット群は3区の微高地上にみられるが、10～12グリッド付近の後背湿地にはみられず、ここには遺物の包含層が形成されている。また2区の20、21グリッドの水田址に古墳時代の遺物が弥生時代の遺物に混ざってみられる。竪穴状遺構と溝状遺構は4区の3、4グリッドの土層が落ちていく肩の部分に立地している。以上のように、本遺跡の地形は微高地とその後背湿地、旧河道の繰り返しとなり、遺構はこの微高地上にみられ、旧河道や湿地化した凹地は水田としての土地利用が窺える。

第2節 住居址と出土遺物

住居址は2軒みつかっており、いずれも弥生時代後期に属する。

●1号住居址 (第8図～第9図)

1区B-26グリッドに位置する。プランは隅丸方形を呈し、長軸5.9m、短軸4.3mを測り、北西方向に主軸をとる。確認面ですでに床面が一部検出され、掘り込みは浅いとおもわれる。床面は部分的に良く踏み固められているものの全体的には軟弱である。掘り方は5～10cm程である。覆土は浅いため明確ではないが、多くの焼土、炭化材が部分的に認められ、焼失住居とおもわれる。貯蔵穴は住居址西側隅の壁ぎわに2基並んで検出された。形態はほぼ円形でいずれも径40～45cmを測る。北側の貯蔵穴は深さ10cmを測り底面はほぼ平坦であるが、南側の貯蔵穴の底面は二段となり深さ27cmを測る。凸堤はみられない。炉は住居址中央東側で壁から1.2mに位置し、石囲い埋甕炉である。上下を欠損した甕の胴部を埋設し、長さ30cm程の礫で囲

むようにコの字状に配している。埋甕の中にはフタをするよう甕の破片が入れられており、焼土や炭化材も埋甕の覆土中にみられる。炉の掘り方は径43cmの円形で、深さ10cmを測る。入口施設に伴うピットは検出されなかったが、入口は炉の位置から西側に位置するものと考えられる。支柱穴は四隅内側に4本みられ、いずれも深さ30～40cmを測る。柱穴はそれぞれ隣接して2カ所の掘り込みがみられ、住居の建て直しがなされたとおもわれる。うちピット4には柱材が検出されたものの、ほかの柱穴にはみられなかった。遺物はほとんどが覆土中で、貯蔵穴やピット内からは検出されなかった。

土 器（第10・11、図版4）

出土土器のうち拓本、実測可能な資料は少なく、11、12、18～26の11点である。

11は、埋甕炉として使用されていた個体で、住居址の使用時期の指標となる。この個体は、甕の胴中央部で、上下は欠損するが炉体部分は全周する。胴部中央のやや下部で最大径部をもち、屈折する。外面調整は、まず6～7本単位のハケが施され、その上部よりヘラ削り調整がなされる。胴上半には、器面調整の後、さらに櫛描波状文が施文されている。色調は暗褐色。胎土中に1mm以下の石英、長石、雲母などが含まれる。12は、小型の甕底部破片で、胴下半部にハケ調整の痕跡が認められる。18～20は、甕の口縁部破片で、右さがりのハケ目調整痕が認められる。21および23～26は、櫛描波状文を特徴とした甕の口縁部および頸部の破片である。22は、壺の肩部破片で、頸部にクシ状工具による簾状文が施されている。これらの資料はいずれも弥生時代後期中葉～後葉の特徴を有し、施文手法は長野県北部から東部の箱清水土器のそれと極めて類似する。

柱 材（第12図1）

上半部は腐蝕している。現存部で、長さ25.1cm、径6cm、根本の部分で径8.8cmを測る。木取りは丸木である。柱根部は、材を削ることによって一回り大きく作り出している。先端部は周囲より横方向から削り、鈍く杭状に尖らせている。身部には工具痕が残っているが、腐蝕が著しい。柱根部には枝を切った節がみられ、ほぼ原木の太さであるとおもわれる。

● 2号住居址（第9図）

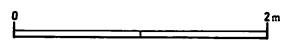
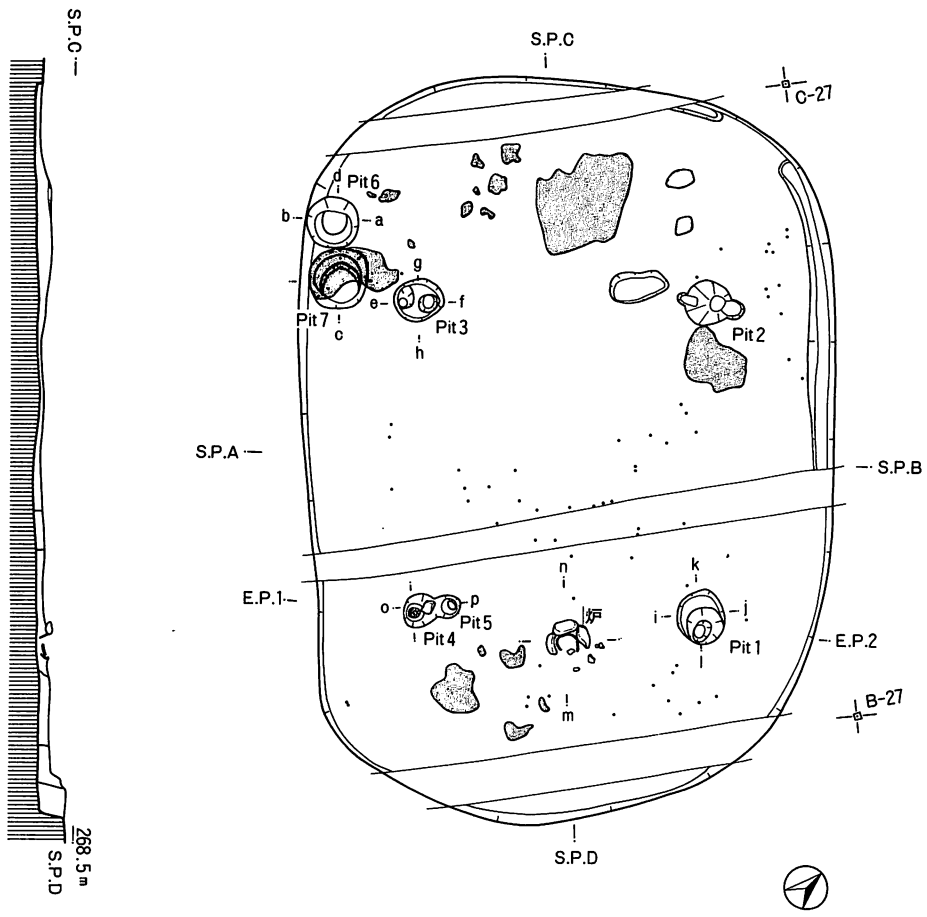
A-25グリッドに位置する。土層確認のためのトレンチによって破壊されており、その断面によって確認された。半分以上は調査区域外であり、また残存部分がわずかのため、規模・形状等は不明である。壁高は15cm程で、床は軟弱である。覆土中に多くの炭化材や焼土が検出され、焼失住居とおもわれる。住居に伴う施設は、柱穴が一基検出されたのみである。柱穴は長径25cm、短径18cmの楕円形を呈し、深さ34cmを測り、柱材が残存している。柱材は板状に加工されたもので、柱穴底面より18cm下へ打ち込まれている。柱穴部分は腐蝕が著しいものの、打ちこまれている部分は残存状況が良い。遺物はほとんど覆土中より検出されたが、少ない。

出 土 遺 物

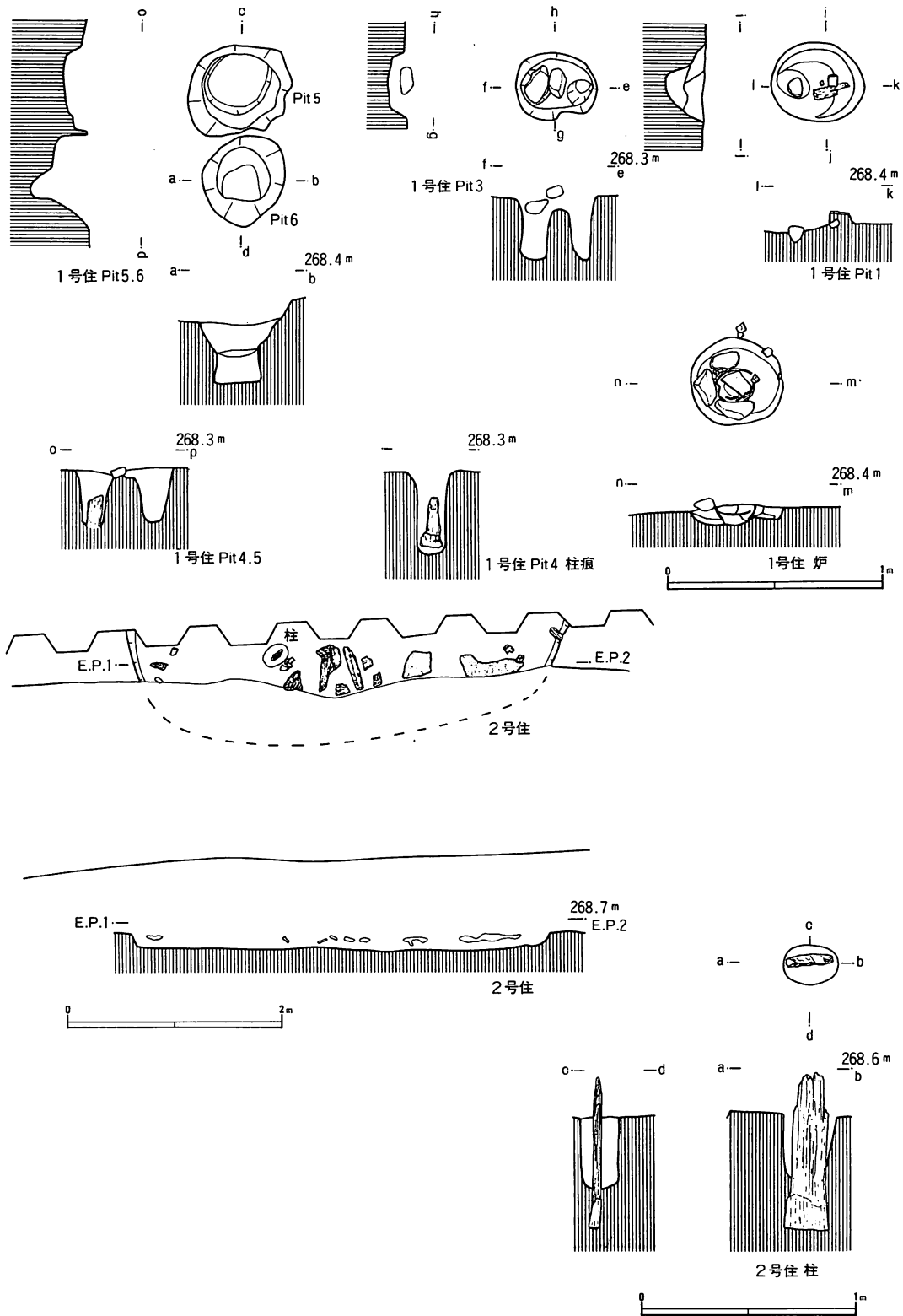
土 器（第11図）

出土土器は極めて少なく、器形や時期が判定されるものはわずかに2点である。

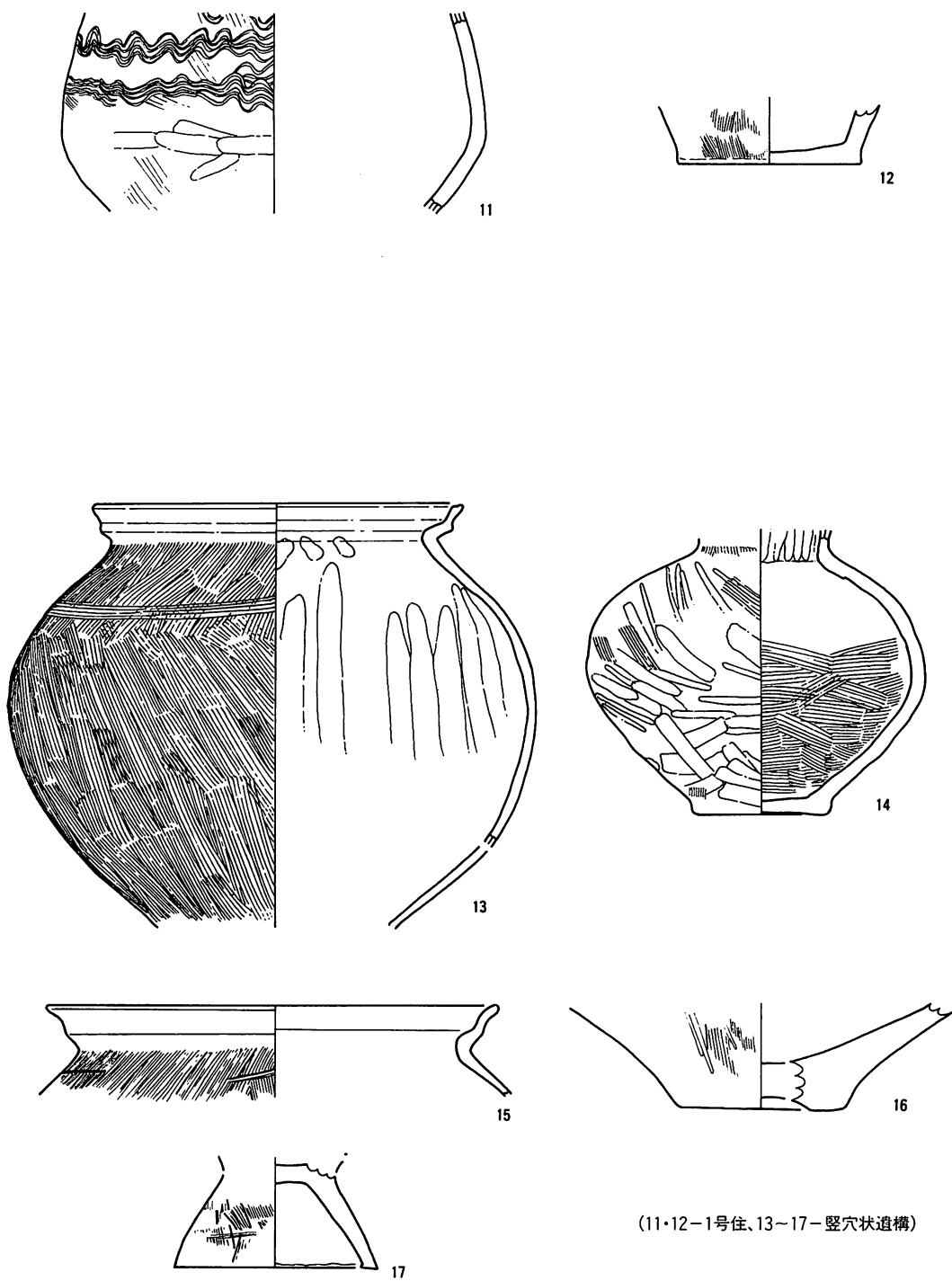
27は口縁端部に刻みをもつ甕で、口縁下には粗いハケ目が施される。28は、甕の頸部で器面



第 8 图 1号住居址

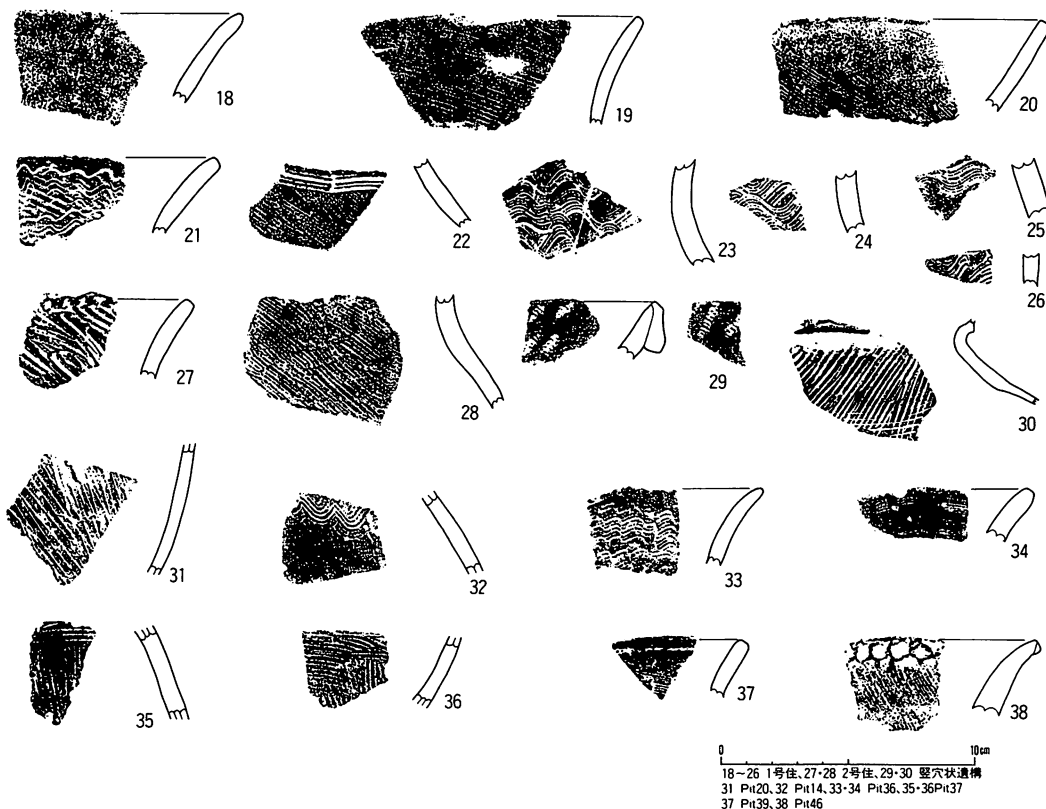


第 9 図 1号住居址 柱穴・炉 および2号住居址



(11·12-1号住、13~17-竖穴状遺構)

第10图 1号住居址・竖穴状遺構出土土器

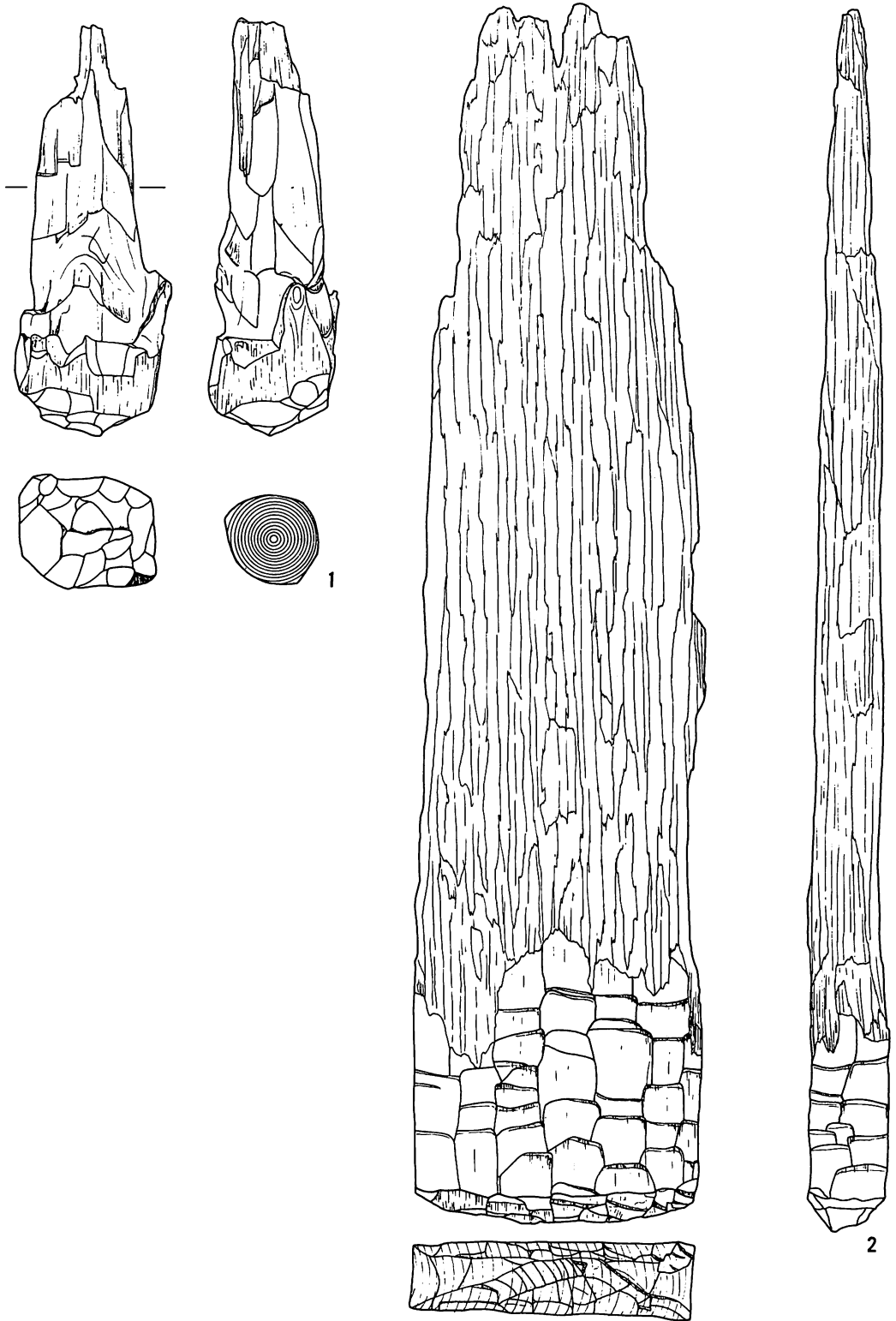


第11図 遺構内出土土器

にはハケ目調整が認められる。

柱材（第12図2）

上半部は腐蝕している。現存部で長さ73.6 cm、幅17.5 cm、厚さ4.7 cmを測る。板状の柱材で、木取りは柂目である。先端部は残りがよく、全面にはつりが残る。工具は幅約3.7 cmの刃部をもち、柱のすえからもとに向って削り進み、刃の方向はもとからすえに向っている。表面の工具痕は、はつりがおよそ6列に並んで直線的に削り進んでいる。側面は2列のはつりがみられる。柱材の先端部は、四方より削り断面V字形に尖らせている。



第12图 住居址出土柱材

第3節 水田址と出土遺物

水田址は、旧河道によって形成された狭い谷部から検出され、出土遺物から弥生後代後期に属する。谷部は、1区、2区の20～25グリッドに位置し、調査区域を斜めに横切っている。幅約12m、深さ約1m程で、ほぼ南北方向に延びる。この谷部は順次埋没していき、少なくとも谷の形成から埋没まで5層の地表面が確認された。この地表面をステージとして捉え、谷の形成された最も古い面を第1ステージとし、最上面を第5ステージとした。水田址は、この谷部を利用して営まれており、第2ステージから第4ステージの3面にわたって検出されている。

以下第1ステージから順に述べていく。

●第1ステージ（第13図）

旧河道によって地表が削られて形成された面で、狭い谷部となる。底面にはさらに3本の細い流路がみられ、うち2本は調査区内北側で合流している。幅12m程で、削り込まれている旧地表から底面まで約1mの深さを測る。水田が営まれた形跡は無く、底面より多くの流木と3カ所に立木根が検出された。

●第2ステージ（第14図）

水田址がもっとも良好な状態で検出された。水田は谷を埋めるシルト質土層上に営まれており、その上を小礫混りの砂層が覆っている。畦畔は谷部の方向に沿うように3本、また谷部の両縁に沿うように溝が2本検出されている。これら畦畔と溝に区画されることによって少なくとも6枚の水田が予想される。畦畔の高さは1号畦畔で5cm、2号畦畔においては2号水田側で5cm、4号水田側で16cm、3号畦畔では5号水田側で8cm、6号水田側で14cmとなる。水田面は2号水田→4号水田→6号水田と西から東に向うに従って順次低くなっていく。このことより8号溝を取水路、9号溝を排水路として捉えることができる。8号溝は幅30～50cm、深さ約10cmを測り、ほぼ直線的に延びている。9号溝は幅40～60cm、深さ15cmを測り、谷部の中央からへりに沿っていく。溝の傾斜は南から北に向って低くなっていく。3号畦畔は2号畦畔に向って延びてくるが、2号畦畔と接しないで水口を形成している。水口の幅は約50cm程であるが、特別の施設はみられない。水田の広さについては、いずれも畦畔・溝が調査区外に延びていくため水田の面積は不明である。遺物は、水田床土、覆土などから土器のほか木器、種子類、流木などが一様に検出され、第3・第4ステージとの明確な分離はできなかった。また8号溝、9号溝の北側付近において木器や流木がまとまって検出されており、水路に溜ったものと考えられる。

●第3ステージ（第14図）

畦畔が1本検出され、南北方向にはほぼ直線的に延びている。幅約60cm、高さ約10cmを測り、暗茶褐色の植物遺体を多量に含む。土層断面には畦畔の西側に沿うように浅い溝がみられるが、平面的には検出できなかった。水田はこの畦畔によって2面みられ、床土は黒褐色粘質土となり、黄灰色砂層がその面を部分的に覆っている。この覆っている砂層は部分的なため、このステージでは明確に面として捉えることが困難で他に水田施設は検出できなかった。調査区北側

の畦畔の西側にこの砂層が堆積しており、この部分より水田面に人の足跡が確認された。足跡はほぼ南北方向に歩いており、足の大きさは22cm前後のものが多く、小さいもので16cm程で、踏み込んだ深さは3～6cm程、歩幅は大体30～40cm程である。また牛とおもわれる偶蹄目の動物の足跡もみられるが、明確でない。遺物は第2ステージと同様、全体にわたってみられるが、前後するステージとの区別は困難であった。

●第4ステージ（第15図）

第3ステージの畦畔とほぼ同じ位置に畦畔が確認されたのみである。ほぼ南北方向に延び、幅約1.1m程で南側で2m程となる。第3ステージの畦畔の西側半分を黄灰色粗砂によって盛り上げるように覆っている。土層断面によって第3ステージを埋める洪水砂でないことが明らかであり、またほぼ直線的な帯状に検出されたので、畦畔と判断した。第3ステージ直上にあるため、このステージでの水田施設はこれのみ確認できたにすぎず、また遺物の分離も不明確である。

●第5ステージ（第15図）

溝が2本確認されたが、水田址と判断するには至らなかった。7号溝はほぼ南北方向に延び、第4ステージの畦畔に沿っている。幅は50～60cm程で、深さは約5cm程度である。覆土は暗灰色中砂であり、多くの茶褐色植物遺体を含んでいる。第3ステージの畦畔に類似するが、土層断面により溝であることが確認できる。幅は50～60cm程で、深さは約5cm程度である。6号溝は、砂によって覆われている部分にのみ確認され、長さ4m60cmを測る。ほぼ南北方向に延びている。幅25～40cmで深さは5cm程であるが一定せず、実際はさらに延びていたと思われる。

出土遺物

水田址から多くの土器、木器、植物遺体等が検出されたが、この谷部の土層中より一様に出土したため、各ステージごとに捉えていくことは困難である。また遺物の時期差も明瞭でなく、きわめて短い時間幅の中で営まれたと思われる。そのため谷部出土の遺物について一括して捉えていくことにする。

土器

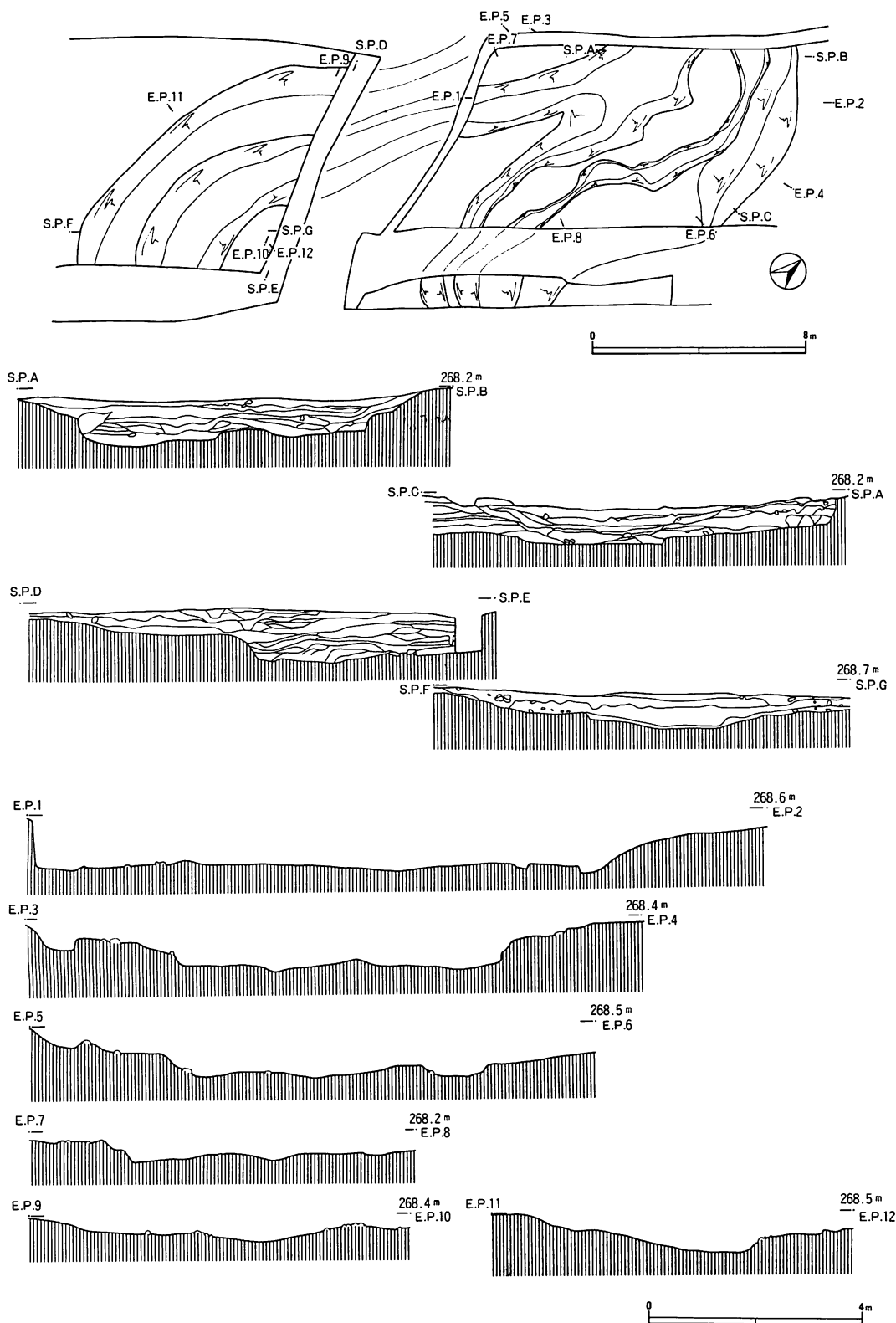
水田面を含む谷部から出土した土器の帰属時期は、大きく分けて弥生時代後期の土器群と古墳時代前期の古式土師器の一群に分離される。弥生時代後期の土器群は、1区第1ステージ上層から第5ステージに継続的に検出される。後者は、2区の谷部上層部の第5ステージに集中して出土することから、谷の埋没が進み凹地化した地点へ廃棄された土器と推定される。また、この地点からは漆塗りの櫛が出土している。

(1) 甕 (39～55・82～121・143～145・162～167・178～180)

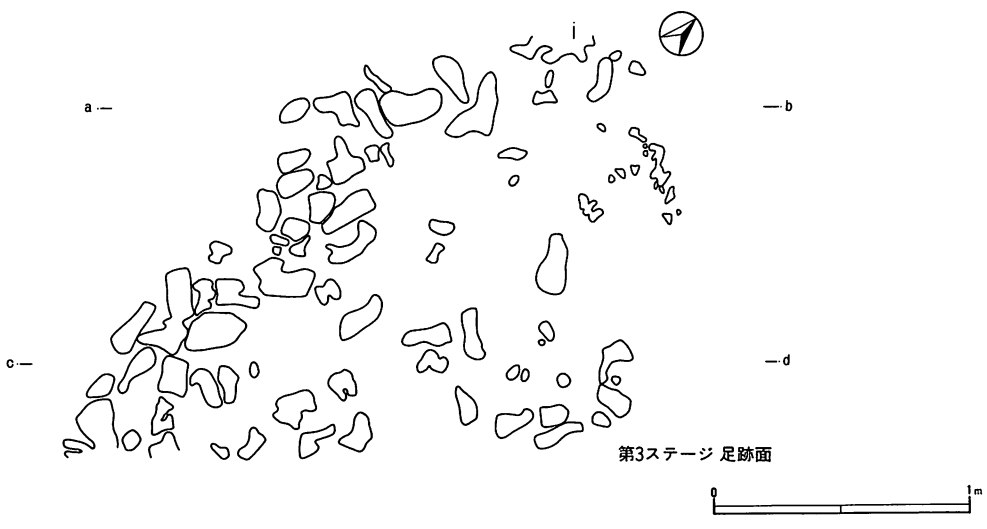
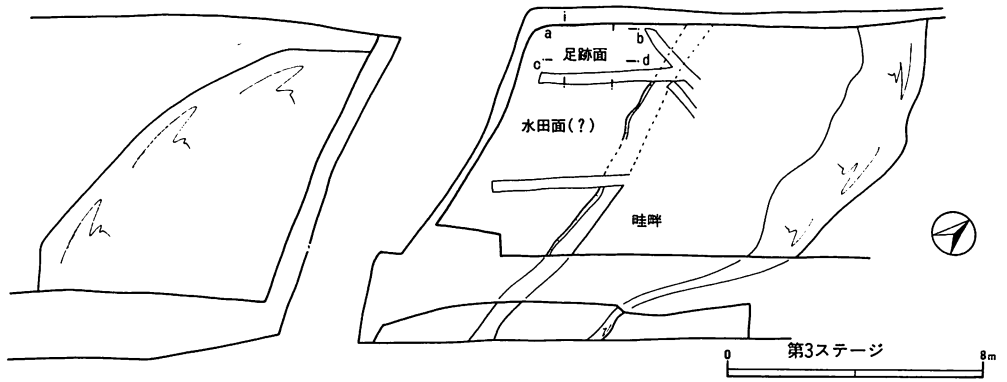
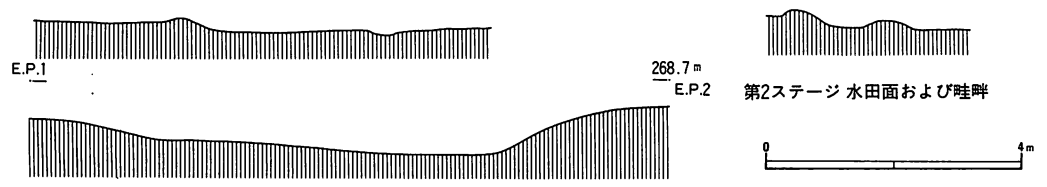
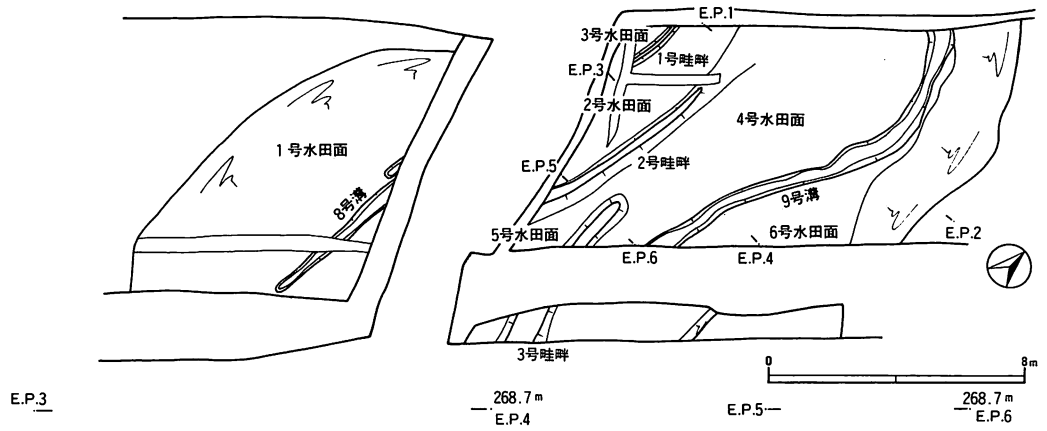
甕は口縁形態から単純口縁、有刻口縁、東海系のS字状口縁、北陸系の5の字状口縁甕などが見られるほか、櫛描波状文を特徴とする甕も存在する。弥生時代後期中葉～古墳時代前期に帰属する。

(2) 壺 (56～69・74・76・122～142・157～161)

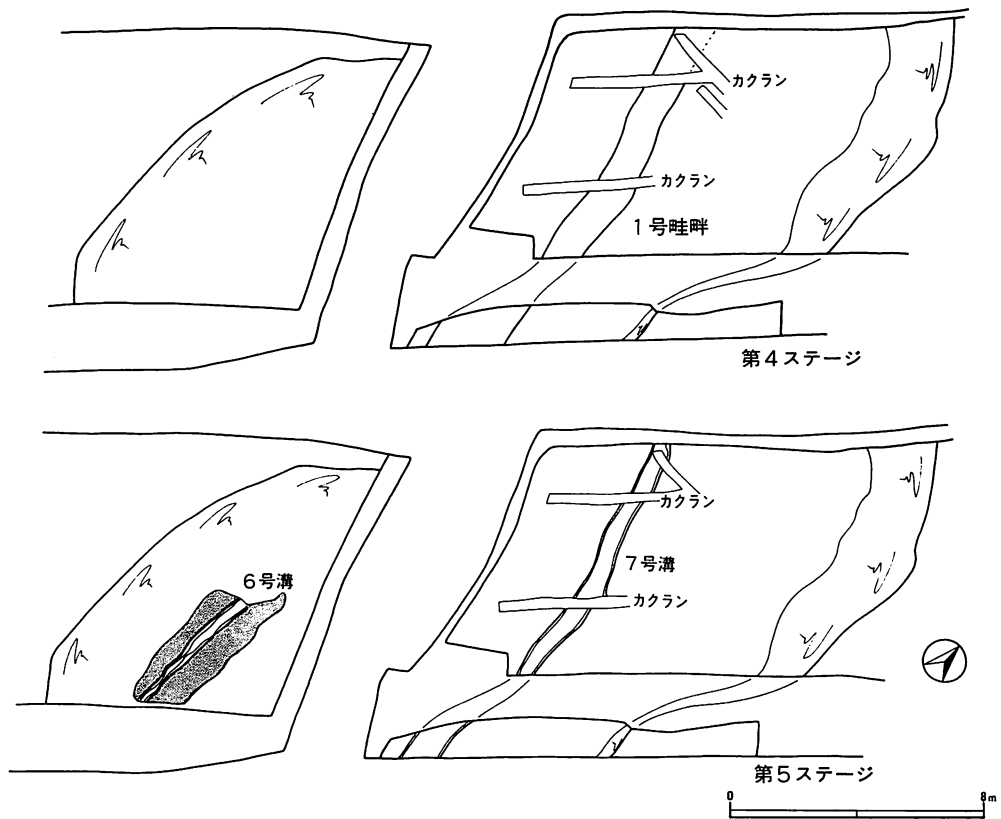
口縁部形態は、単純口縁、折り返し口縁、有段口縁等が見られる。有段口縁(61)は棒状浮



第13図 第1ステージ



第14図 第2～第3ステージおよび足跡面



第15図 第4～第5ステージ

文が施される。器面調整はハケ目調整の後ヘラ削りが一般的で、肩部文様帯に、羽状縄文や擬似羽状縄文、ボタン状貼付文を施す個体もある。

(3) 高坏 (72・73・79・81・168・169・171～174)

弥生時代後期に特徴的な内外面赤色塗彩を施すものと、古墳時代前期に属する脚部に有孔裝飾をもつものが存在する。

(4) 器台 (170)

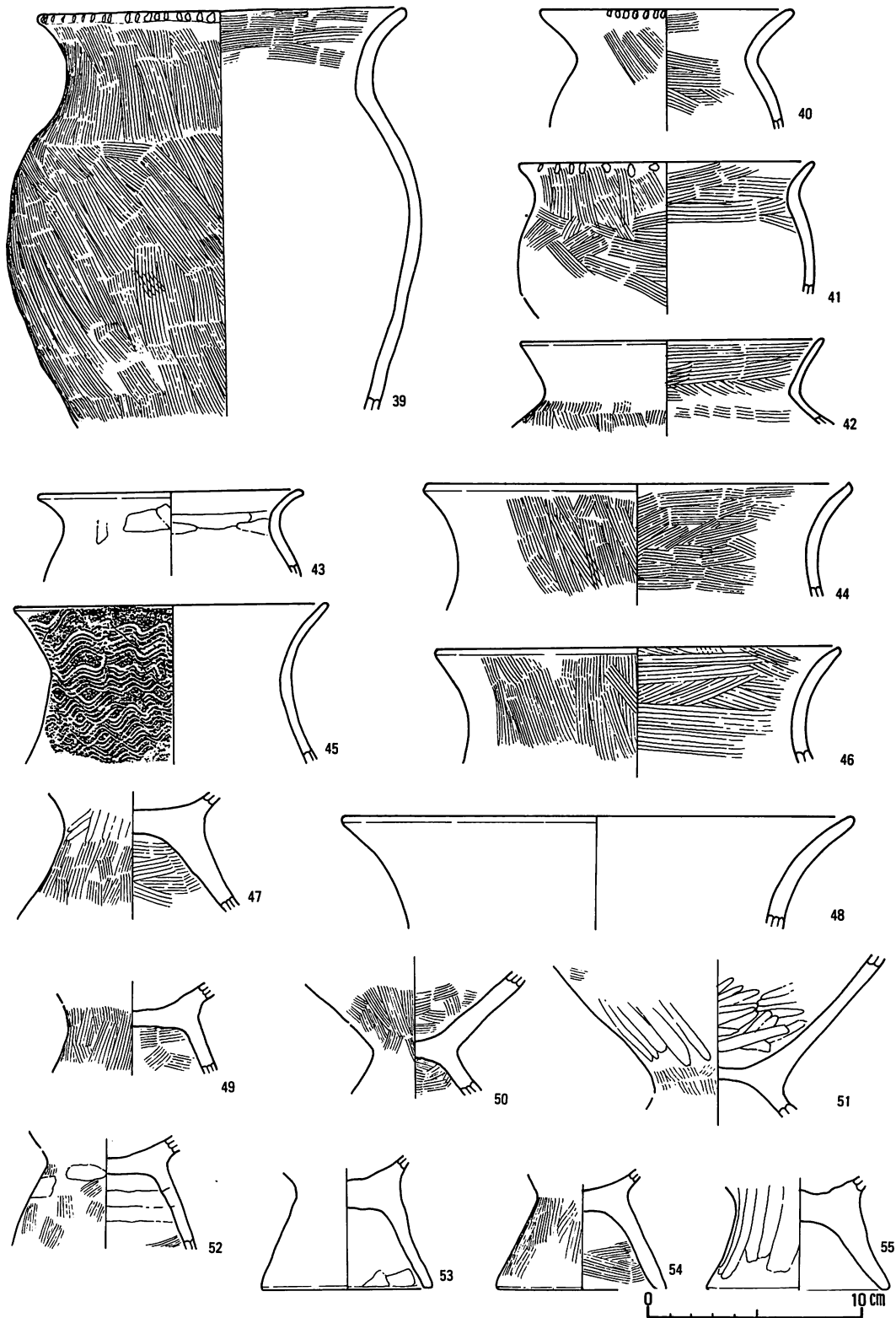
2区第5ステージより1点出土。

(5) 甑形土器 (75・76・181・182)

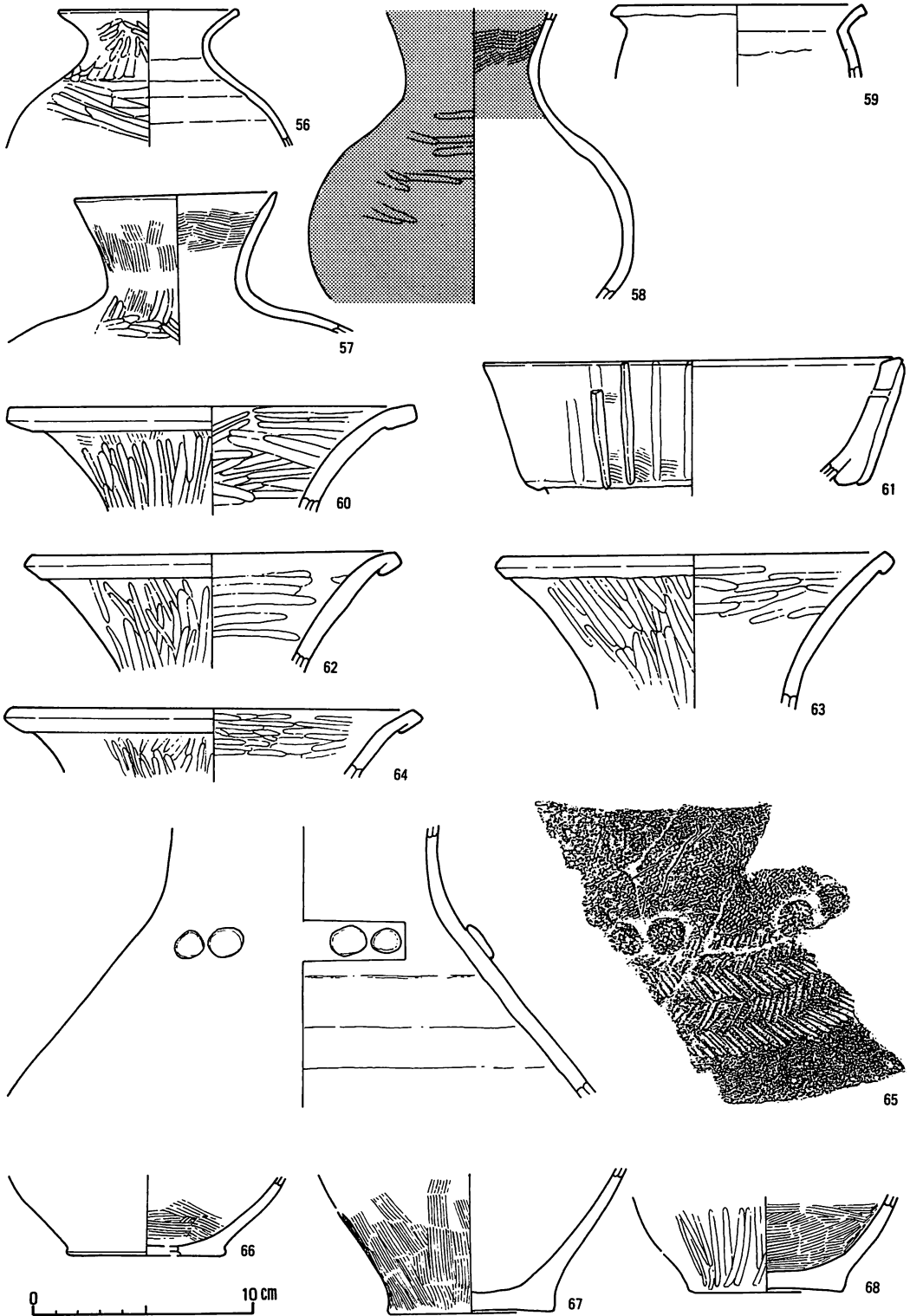
底部に1孔もつタイプと多孔のものが存在する。

(6) 蓋 (78)

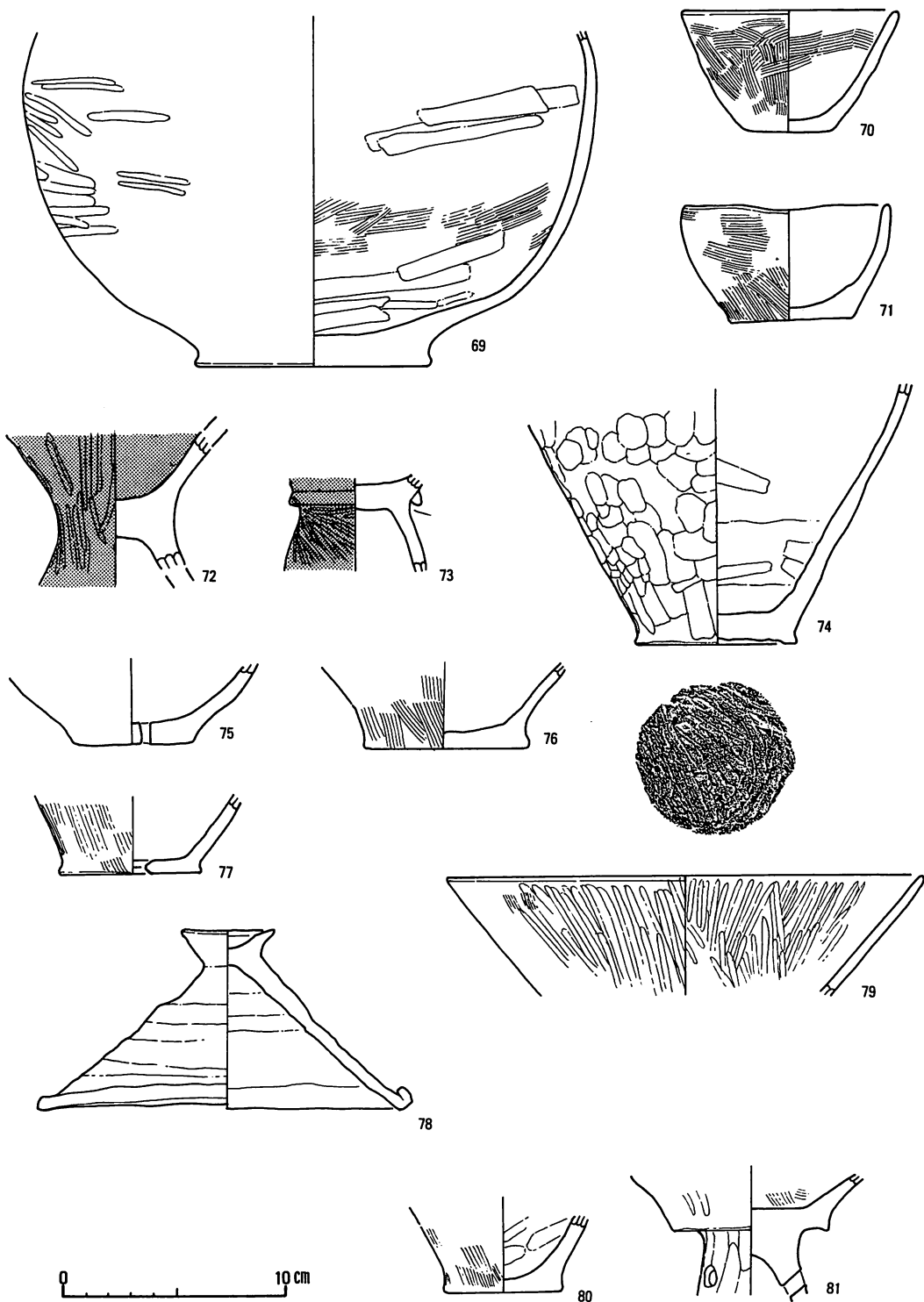
円錐形の体部の頂部に摘みをもつ蓋で、体部には輪積痕が認められる。内面に煤が付着する。



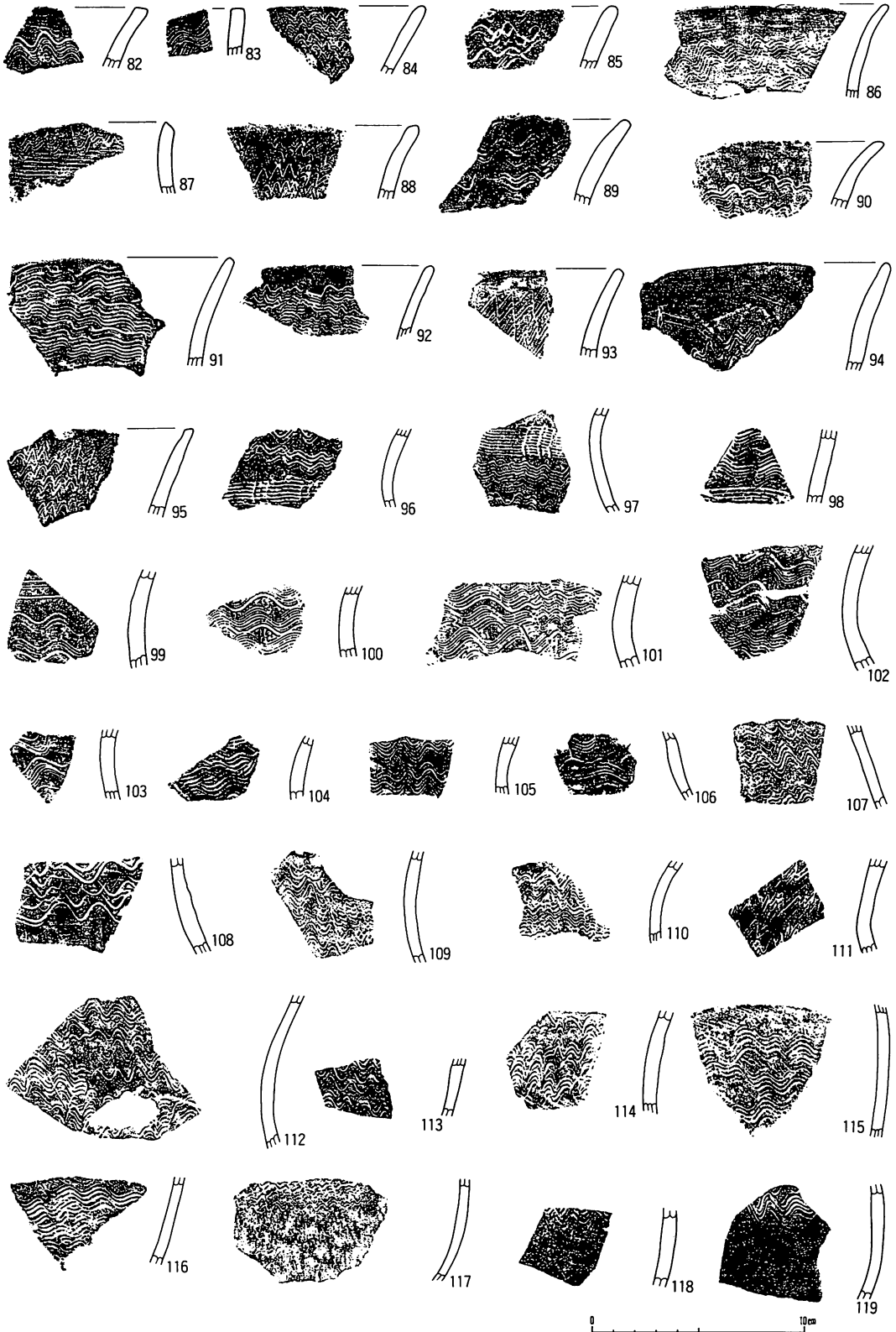
第16图 1区谷部出土土器(1)



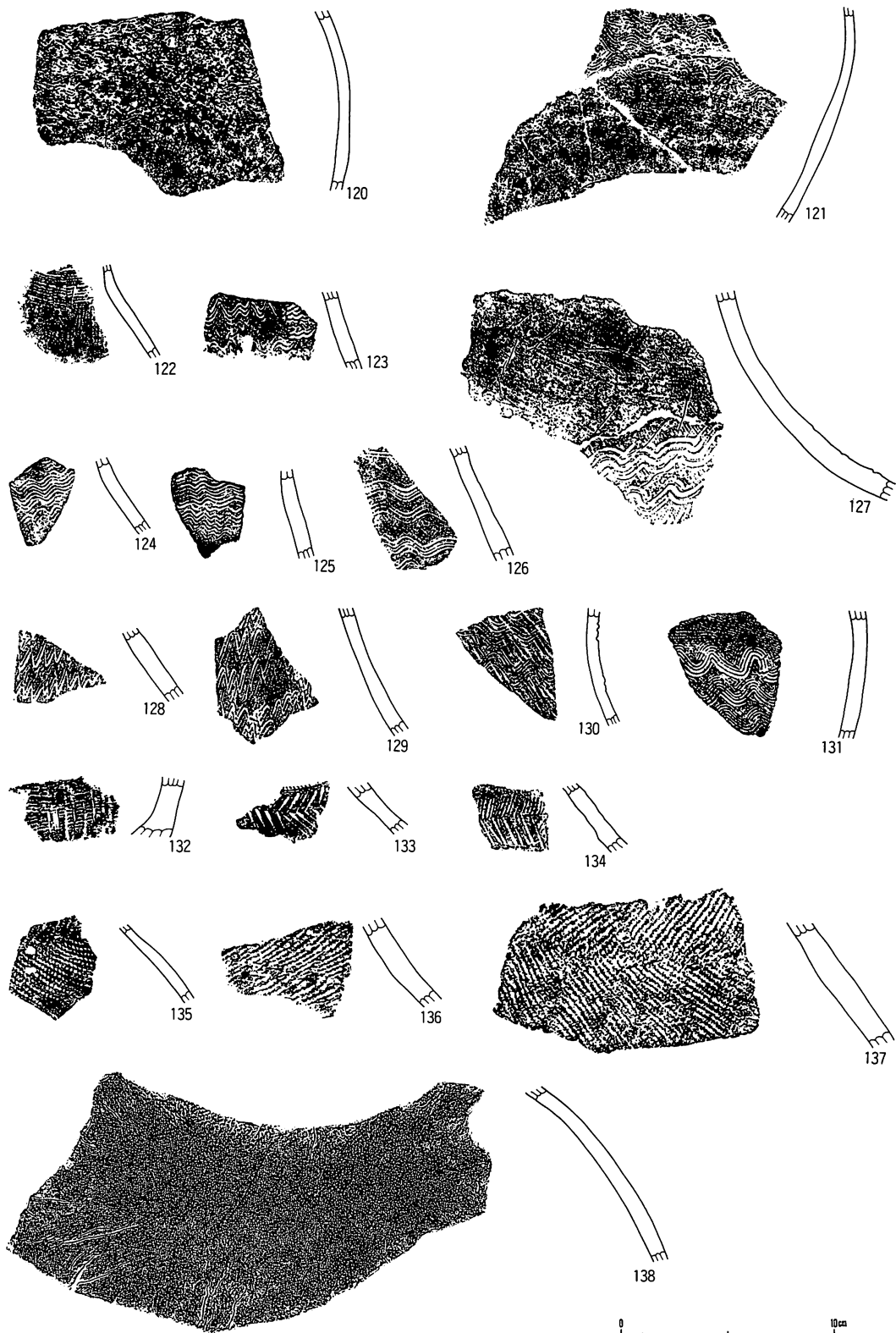
第17图 1区谷部出土土器(2)



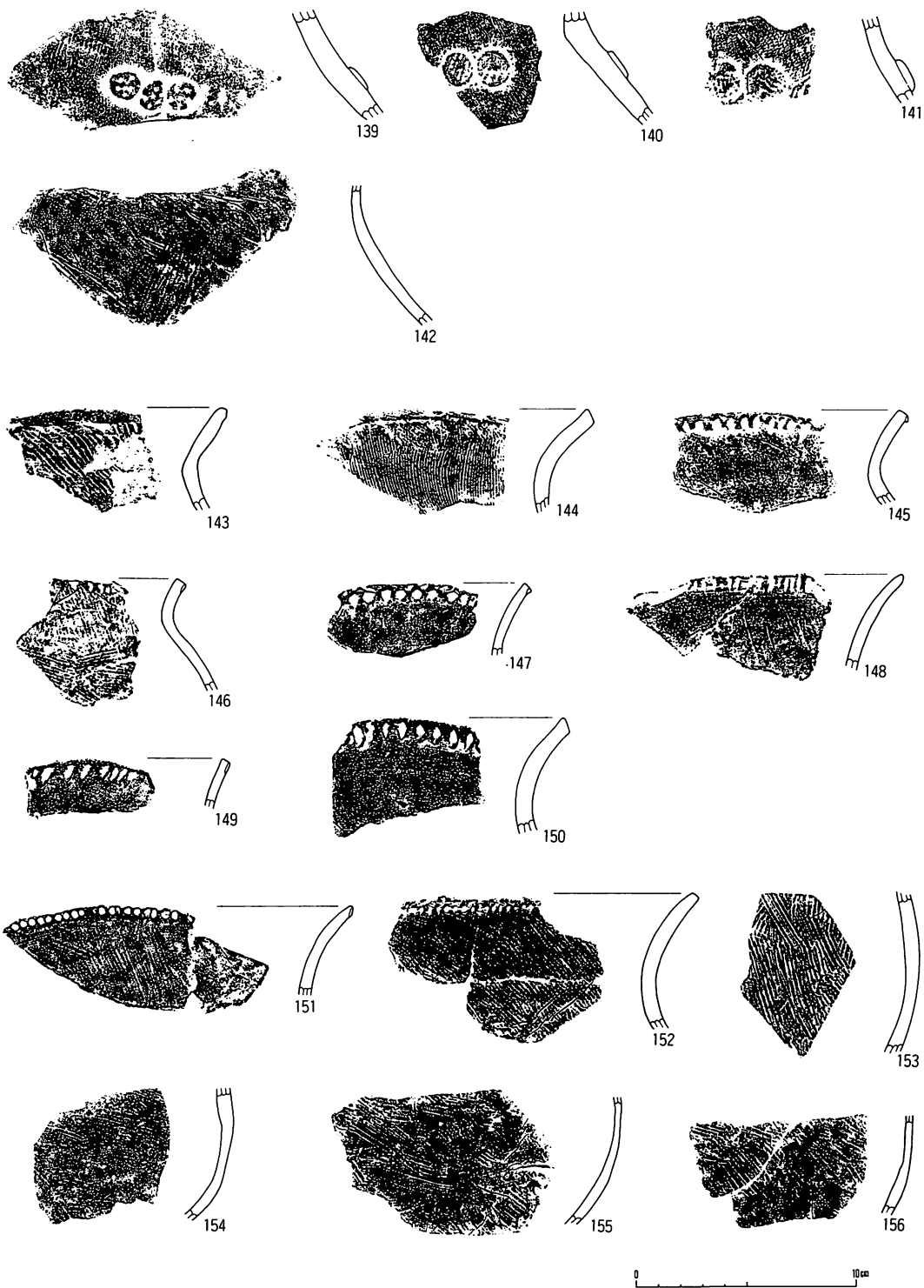
第18图 1区谷部出土土器(3)



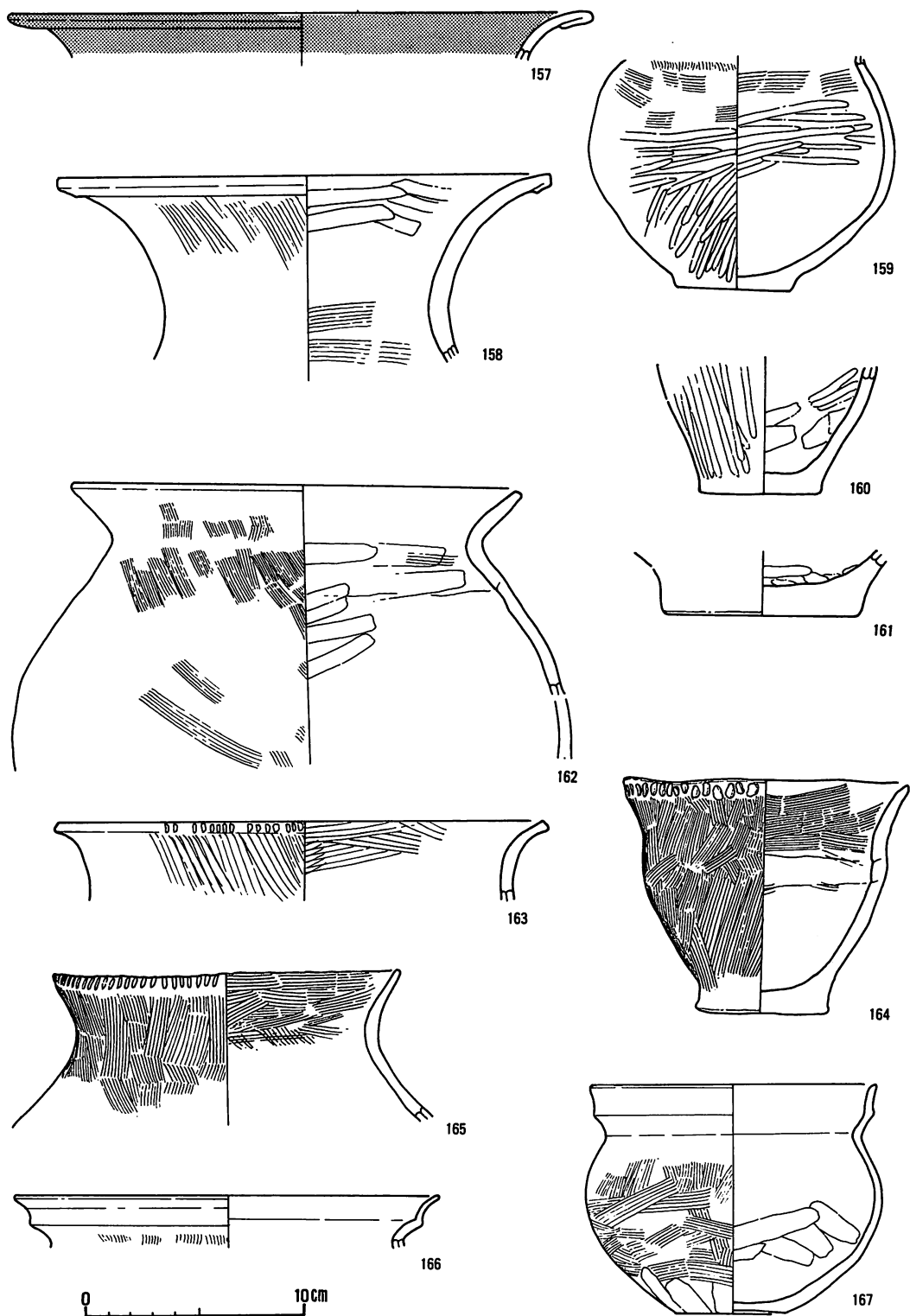
第19图 1区谷部出土土器(4)



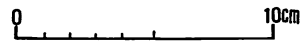
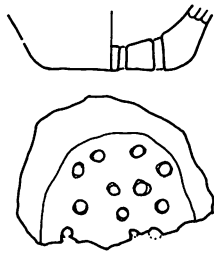
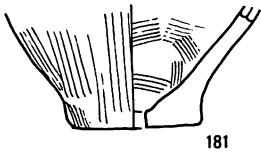
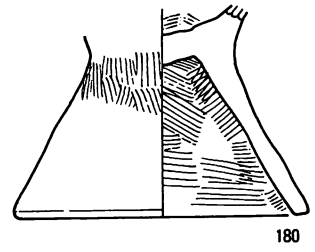
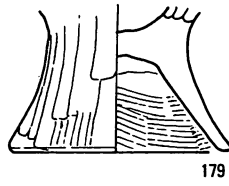
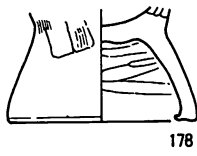
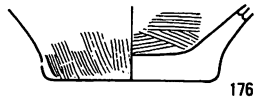
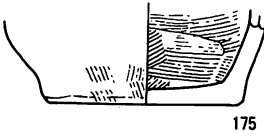
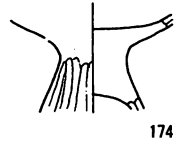
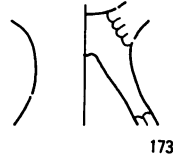
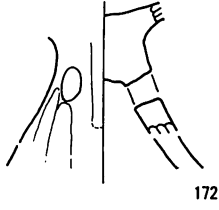
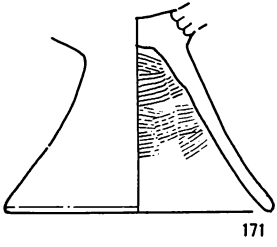
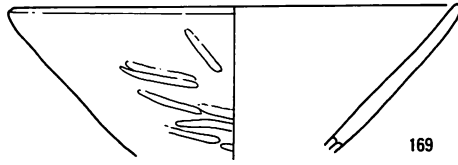
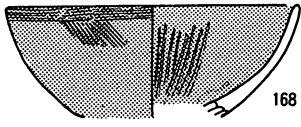
第20图 1区谷部出土土器 (5)



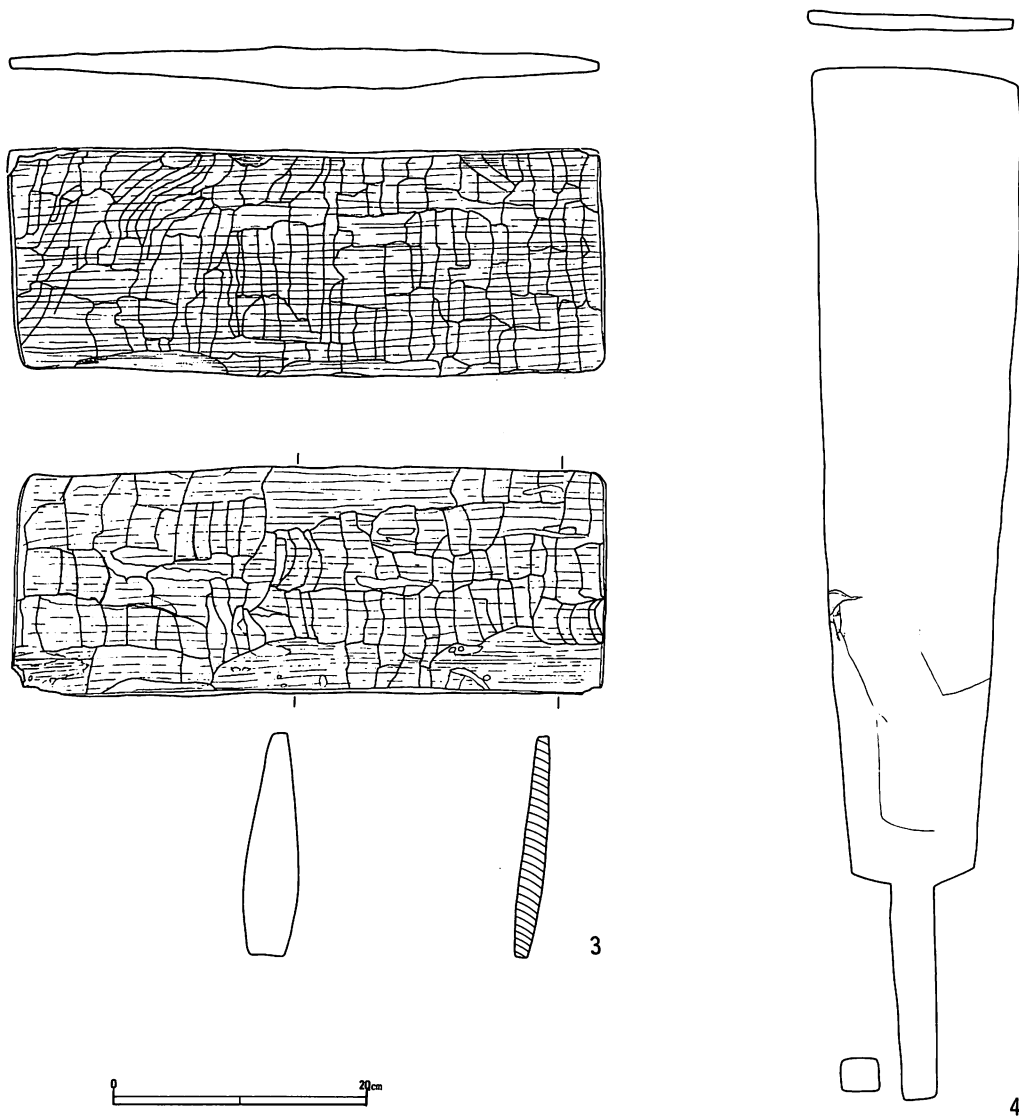
第21图 1区谷部出土土器(6)



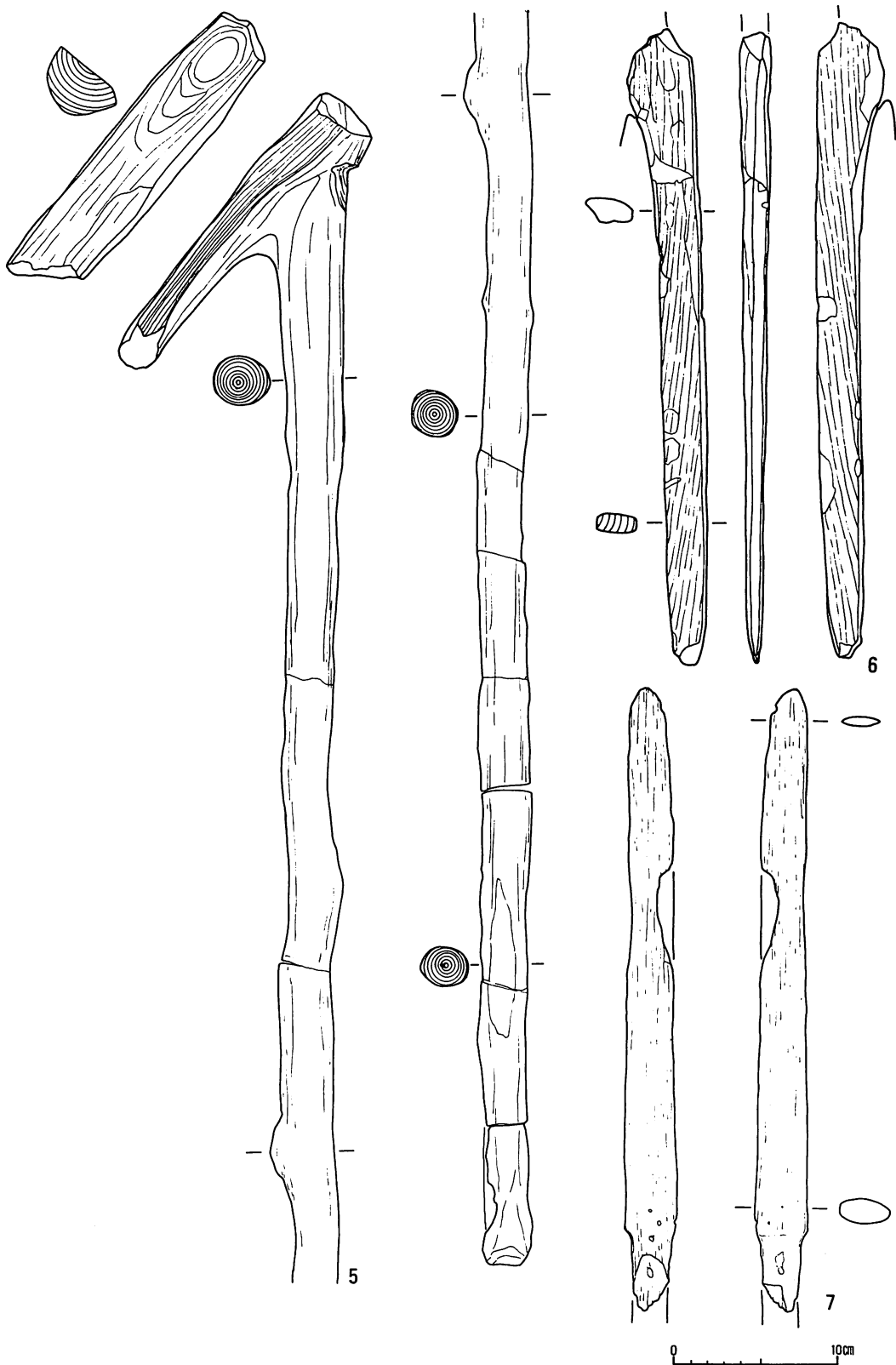
第22图 2区出土土器(1)



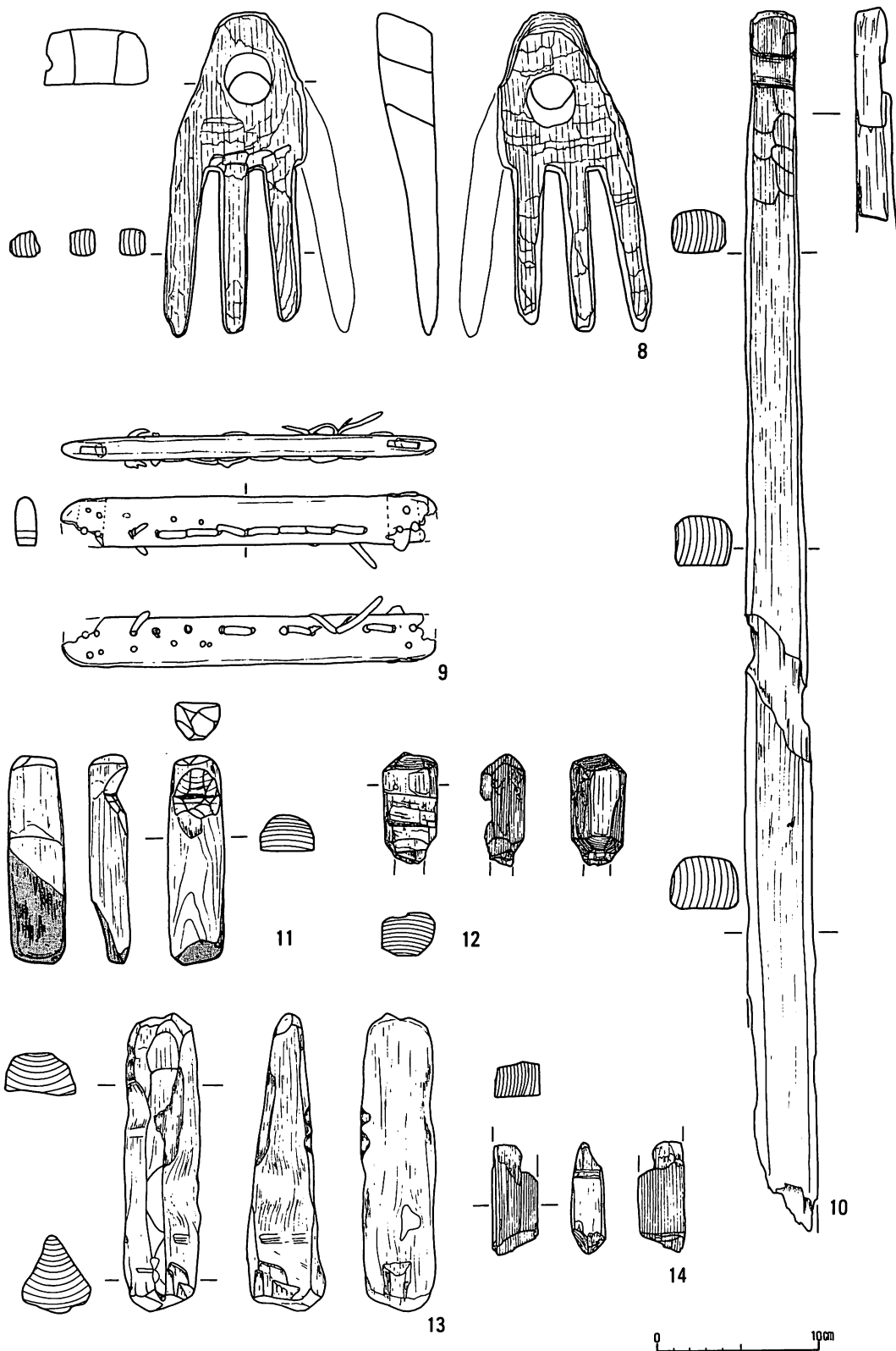
第23图 2区出土土器(2)



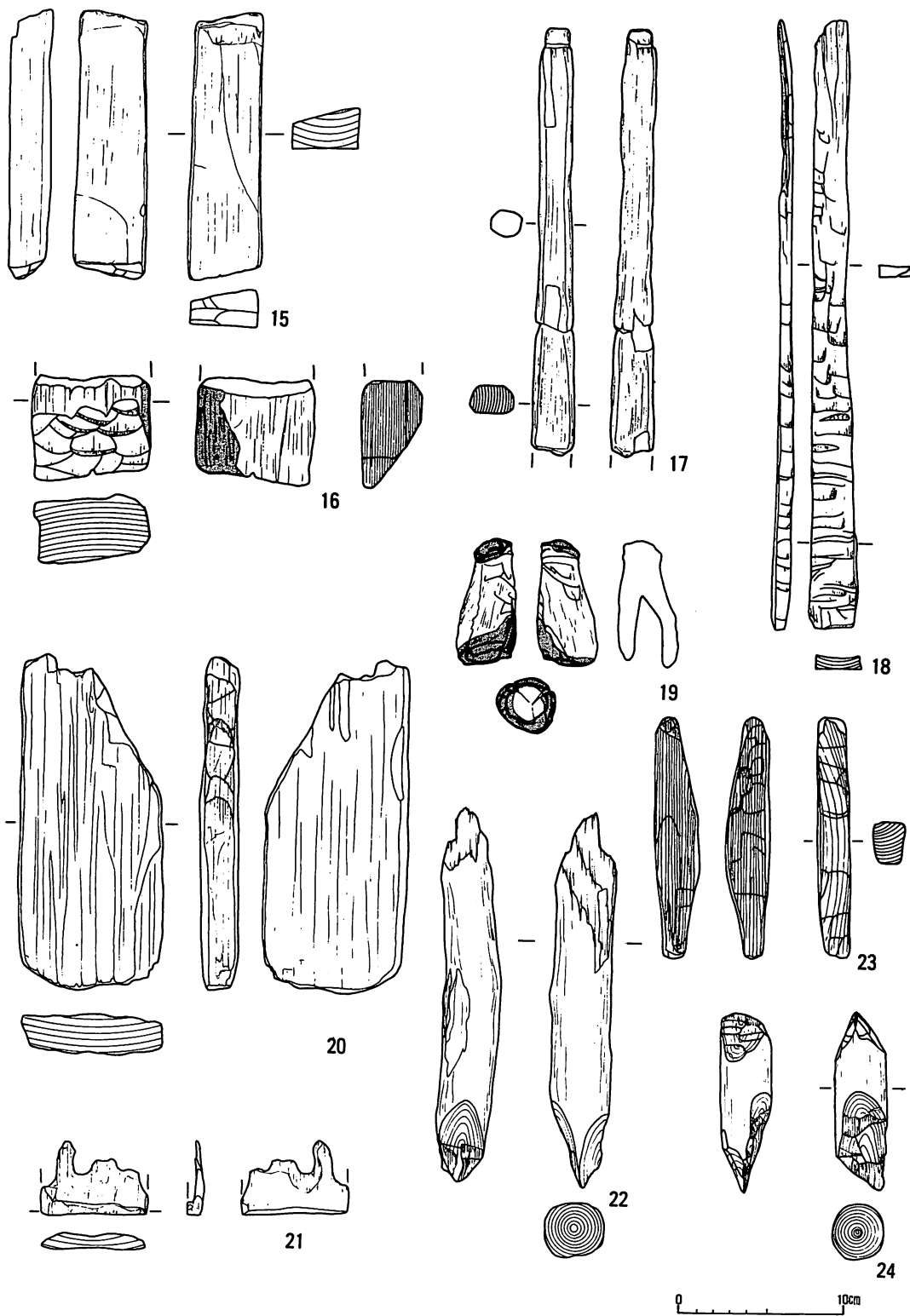
第24图 1区谷部出土木器(1)



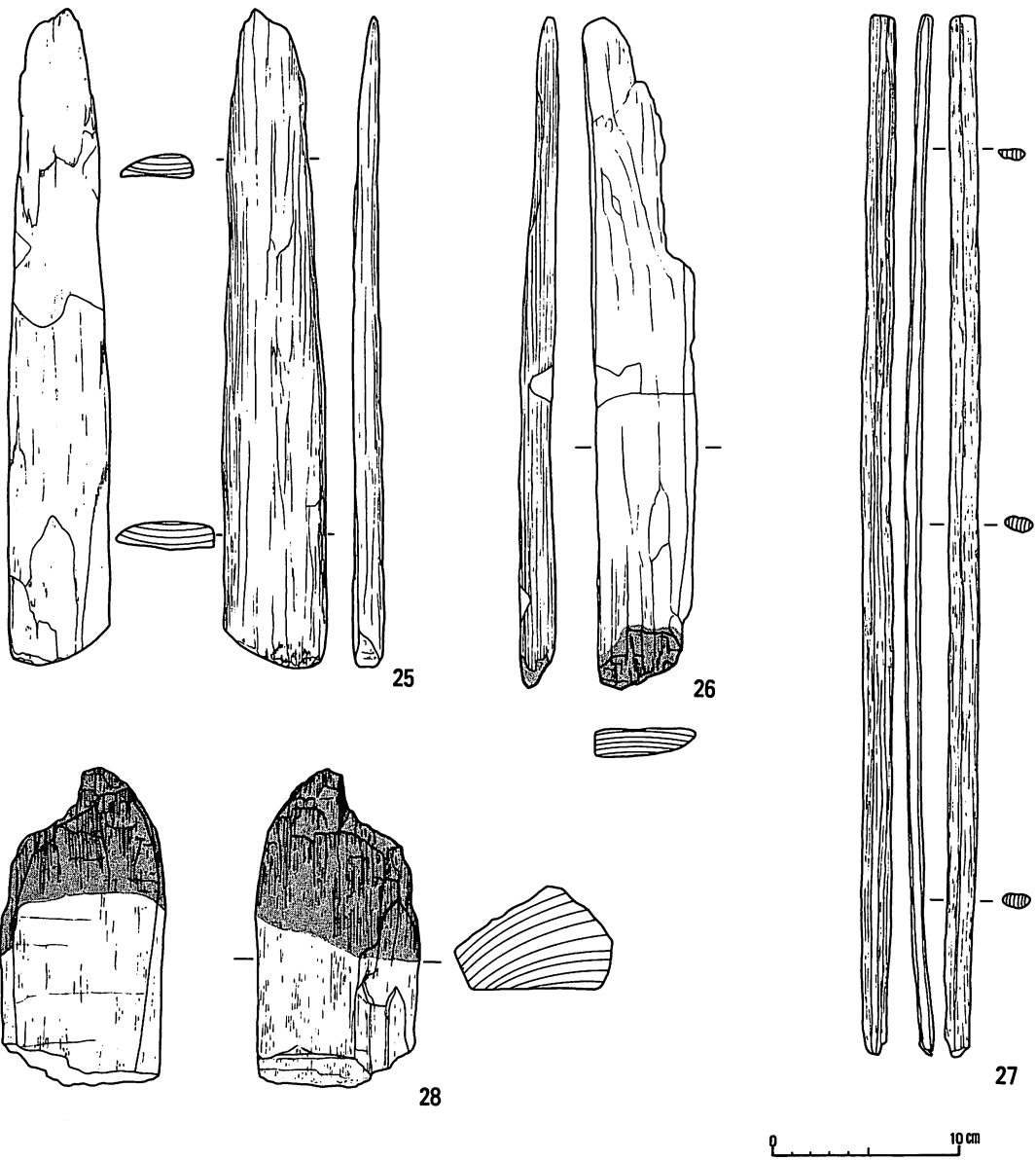
第25图 1区谷部出土木器(2)



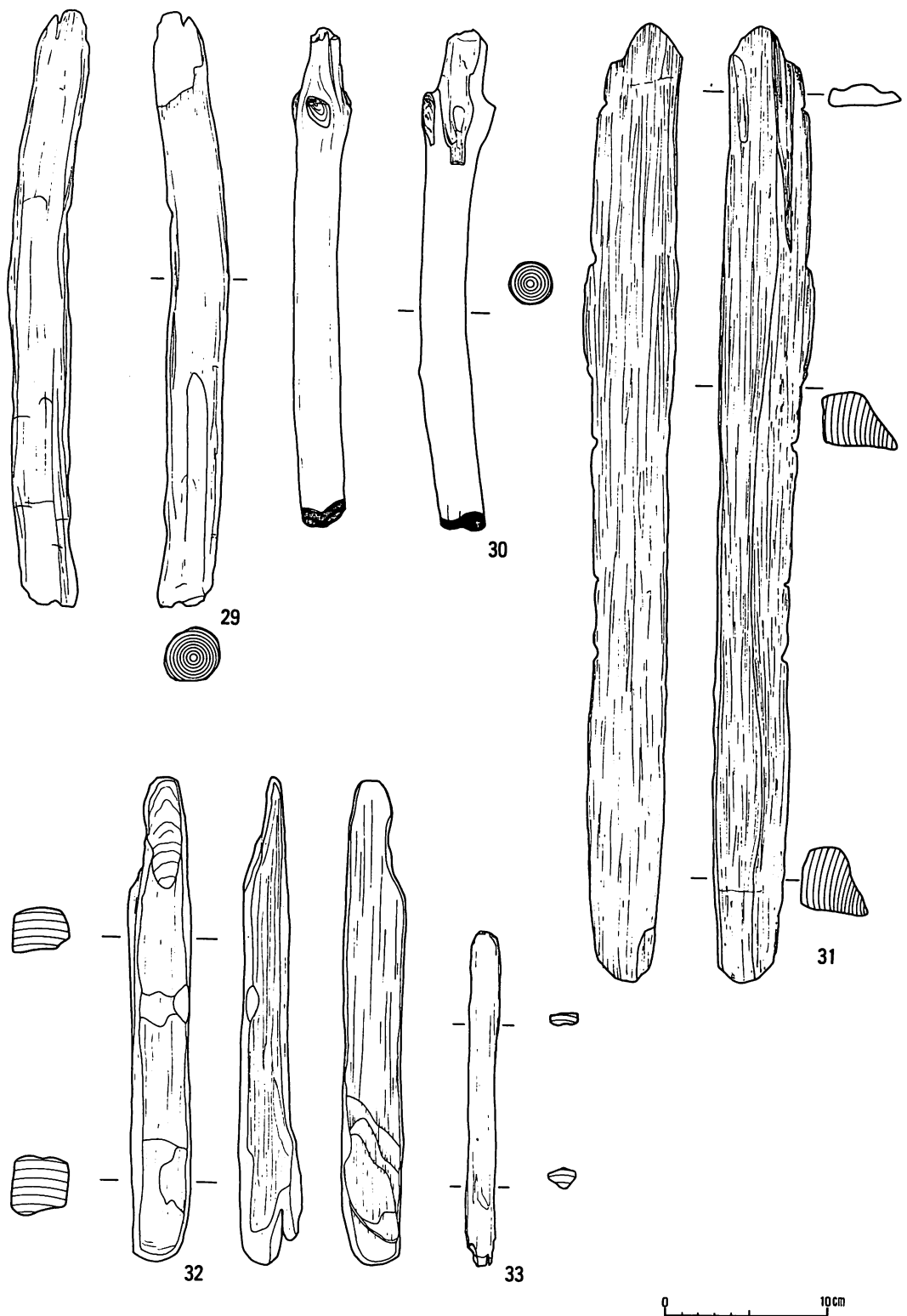
第26图 1区谷部出土木器(3)



第27图 1区谷部出土木器(4)



第28图 1区谷部出土木器(5)



第29图 1区谷部出土木器(6)

第4節 竪穴状遺構と出土遺物

4区B-4グリッドに位置する。プランは不整円形を呈し、東西方向にやや長い。(第29図) 東西で2.9m、南北で2.6mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、15~20cmの掘り込みとなる。床面はほぼ平坦であるが、貼床はみられず軟弱である。柱穴、炉、貯蔵穴等の施設はみられない。覆土は3層に分層でき、1層、2層中より多くの炭化材、焼土が検出され、いずれも床面より浮いた状態である。炭化材の残りは比較的良好で、構築材が焼け落ちた状態で、ほぼ直交するかたちで折り重なっている。材に加工痕はみられず、自然の丸木を使用している。材の太さは17~20cmのものがみられるほか10cm前後のものが多い。遺物は、底部を欠損する甕が床面直上より検出されたほか、口縁部を欠損する壺が炭化材とともに出土した。遺物は少なく、他小破片が覆土中より若干出土しているのみである。本遺構は遺物から古墳時代初頭に位置付けられる。

出土遺物(第10・11、図版4)

出土遺物のうち実測可能な個体は、S字状口縁を有する甕3点および壺2点である。また、拓本で壺および甕が各1点存在する。

甕のうち13は、口縁部の屈曲が鋭く、口唇内面が面をなし、肩部にハケ目が横走する。15は13と比べ口縁の屈曲がやや緩やかで、肩部に横走するハケ目がわずかに認められる。

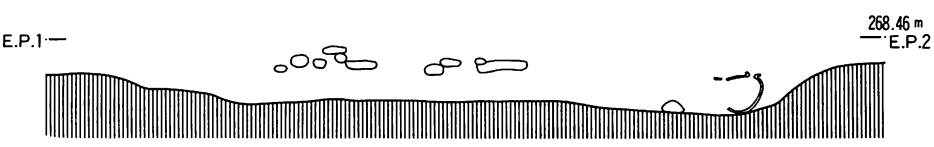
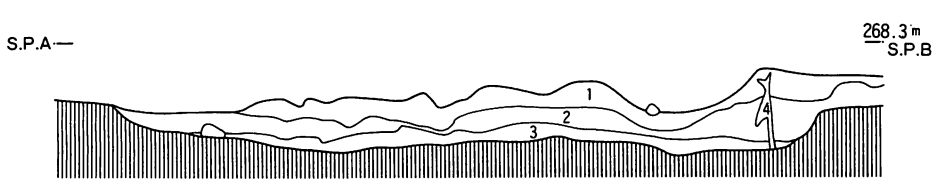
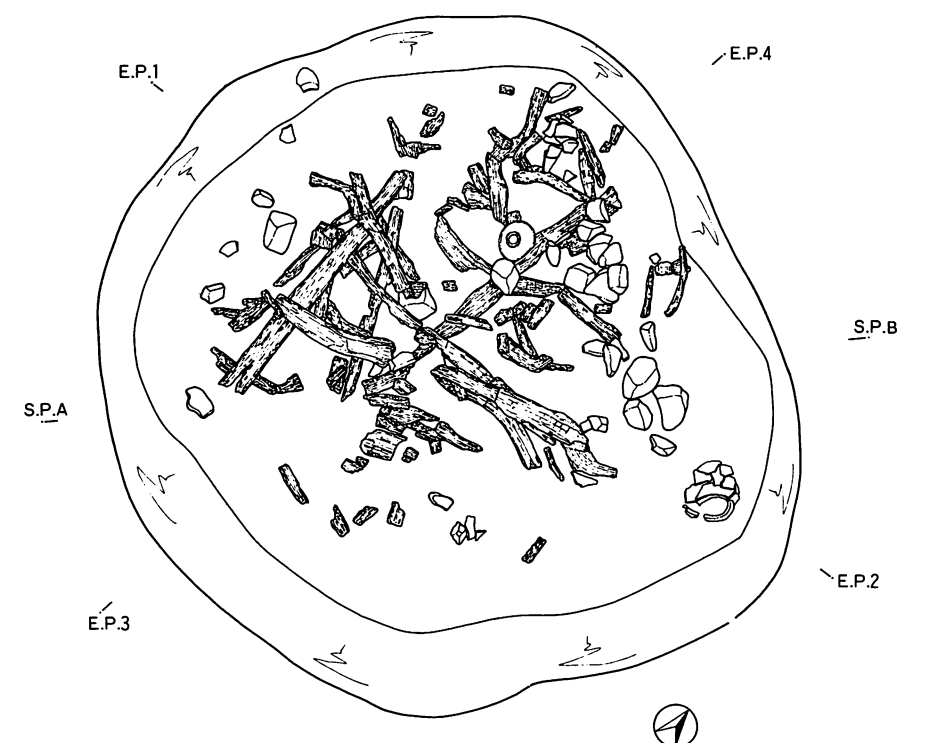
第5節 溝状遺構と出土遺物

4区B、C-3、4グリッドに位置する。ほぼ東西方向に延び、西側で調査区域外になり、東側で次第に浅くなっていく。調査区域内で長さ約6m50cm、幅90~110cm、深さ約5cmを測り、壁の立ち上がりは緩い。溝の中には大量の土器片が折り重なるよう敷き詰められ、盛り上がった状況を呈するが、東側では拡散していく傾向にある。遺物から古墳時代初頭に位置付けることができる。この遺構についてその性格付けは困難であるが、地形的にはこれより南側は下へ落ちていき、黒色粘質土が厚く堆積する埋没旧河道となるので足場を確保するための道のような施設であったのかもしれない。あるいは水田に伴う土器片を芯材として利用した畦畔であった可能性もあろう。しかし溝の周辺には拳大から20cm程の礫を敷き詰めた場所が4カ所みられ、いずれも旧河道の凹地へ落ちていく肩の部分に位置している。このことより溝状遺構も含めて湿地を通る道的な性格として捉えておきたい。

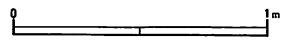
出土土器(第32図~第35図)

遺構内から出土した土器は、2,000点以上にのぼるが、すべて破損品で接合資料はきわめて少ない。

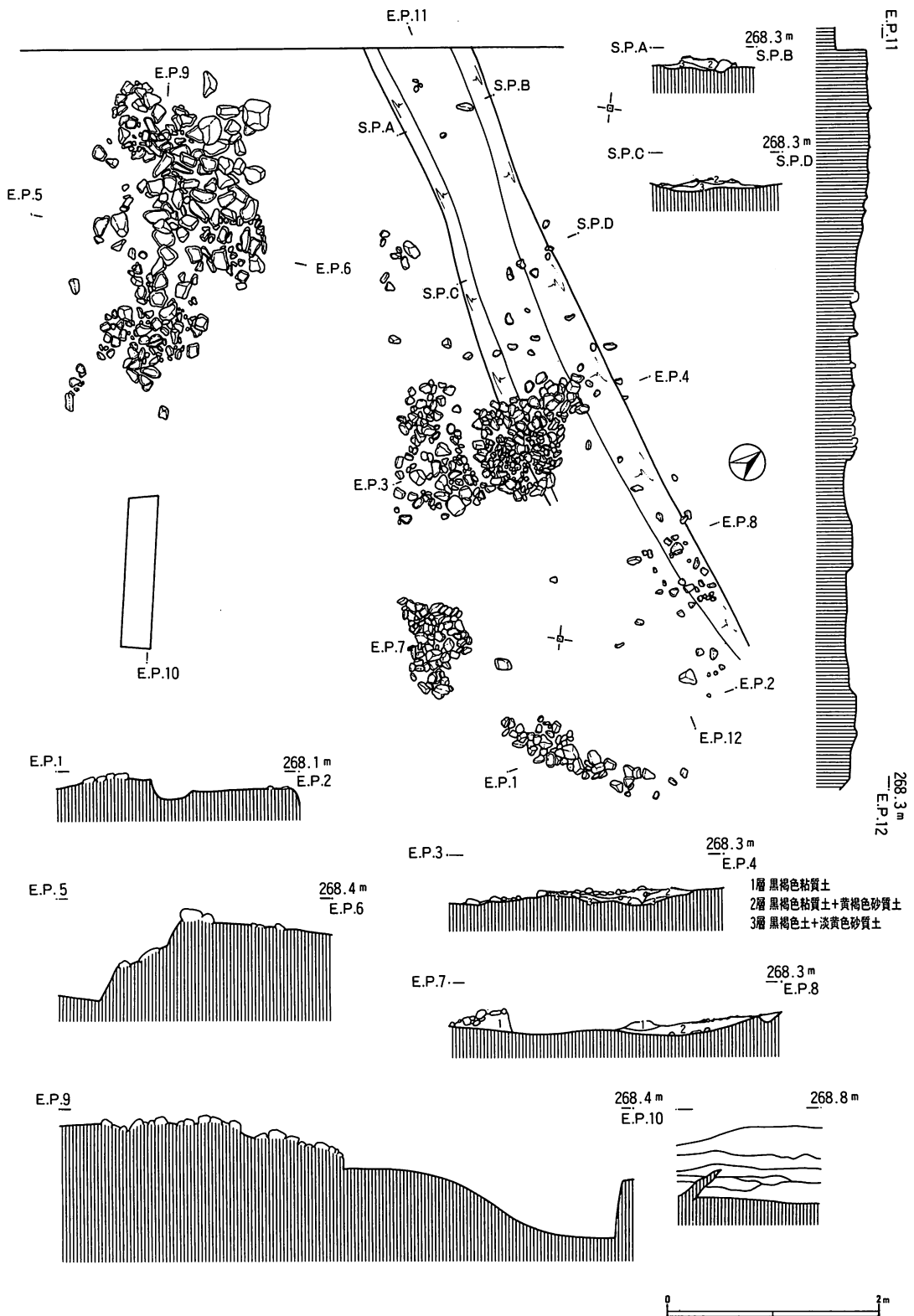
器種は、壺、甕、器台、埴、高坏、小型鉢等が存在する。甕は単純口縁を有するもの、S字状口縁、受け口状口縁を有するものに分類される。高坏、器台では赤彩されたものが相当数見られる。



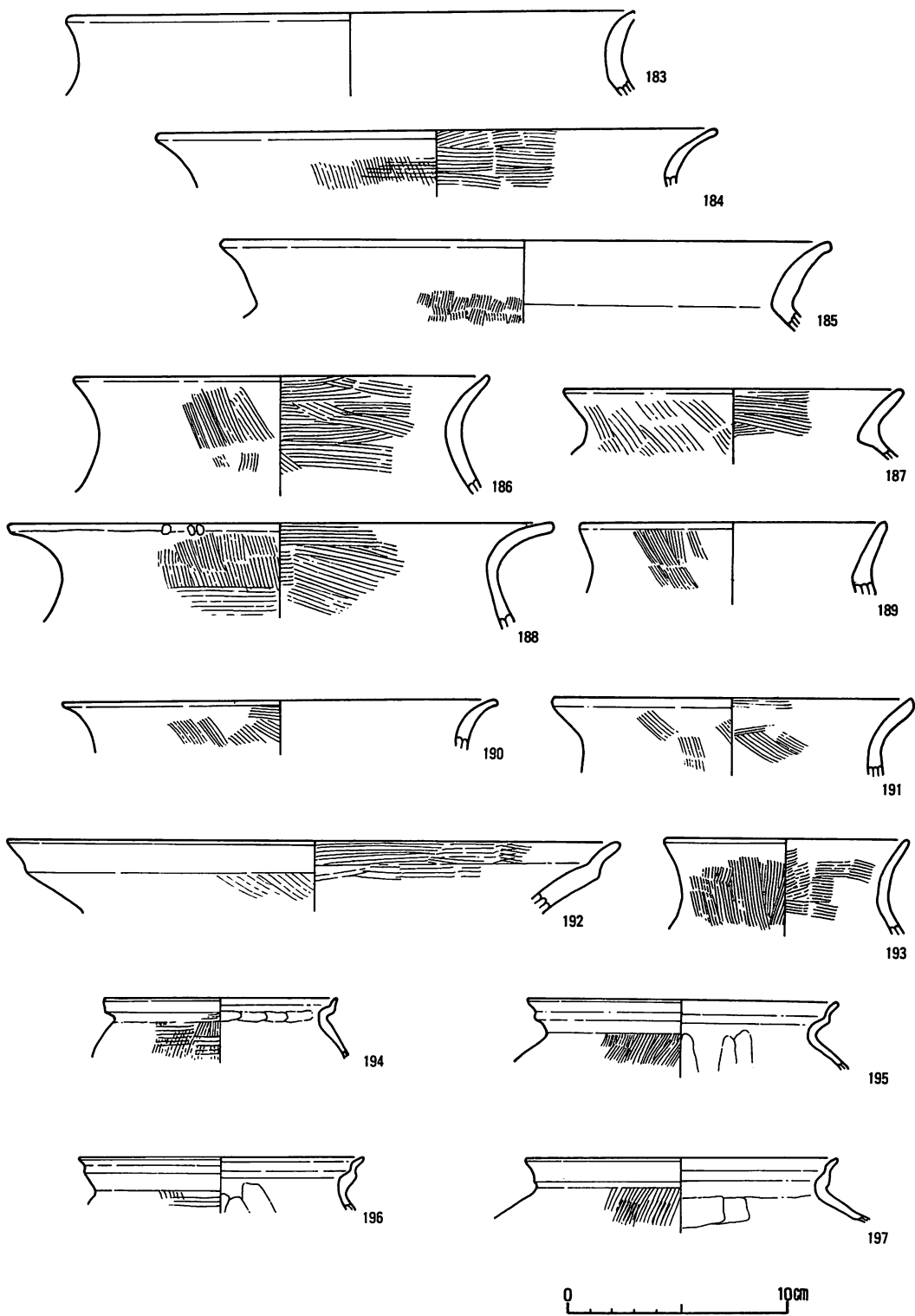
- 1層 暗褐色土 焼土粒白色砂粒炭化材を含む
- 2層 暗褐色土 淡黄色砂をブロック状に含む
- 3層 暗褐色土 青灰色砂を斑状に含む
- 4層 暗灰色粘質土



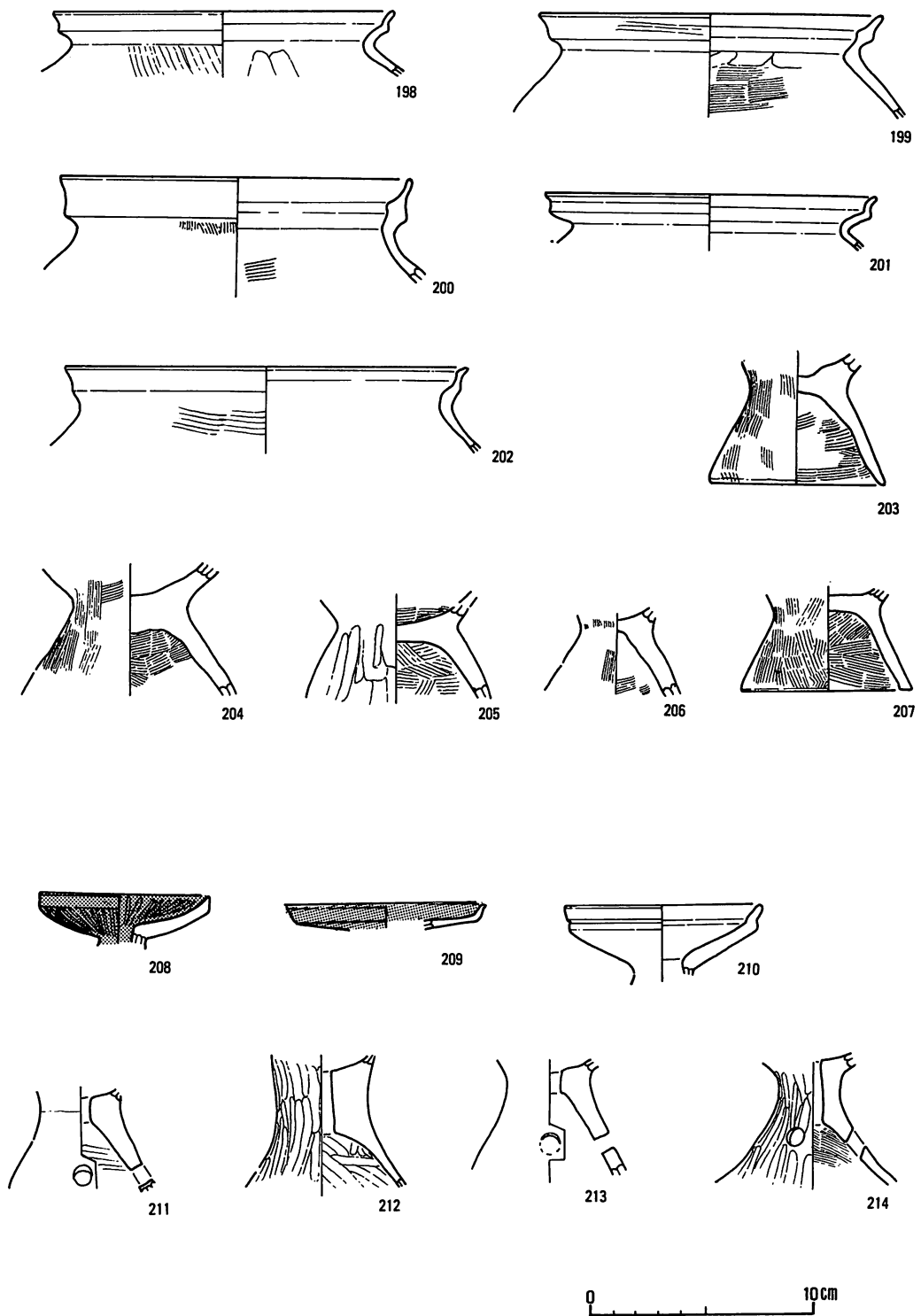
第30図 竪穴状遺構



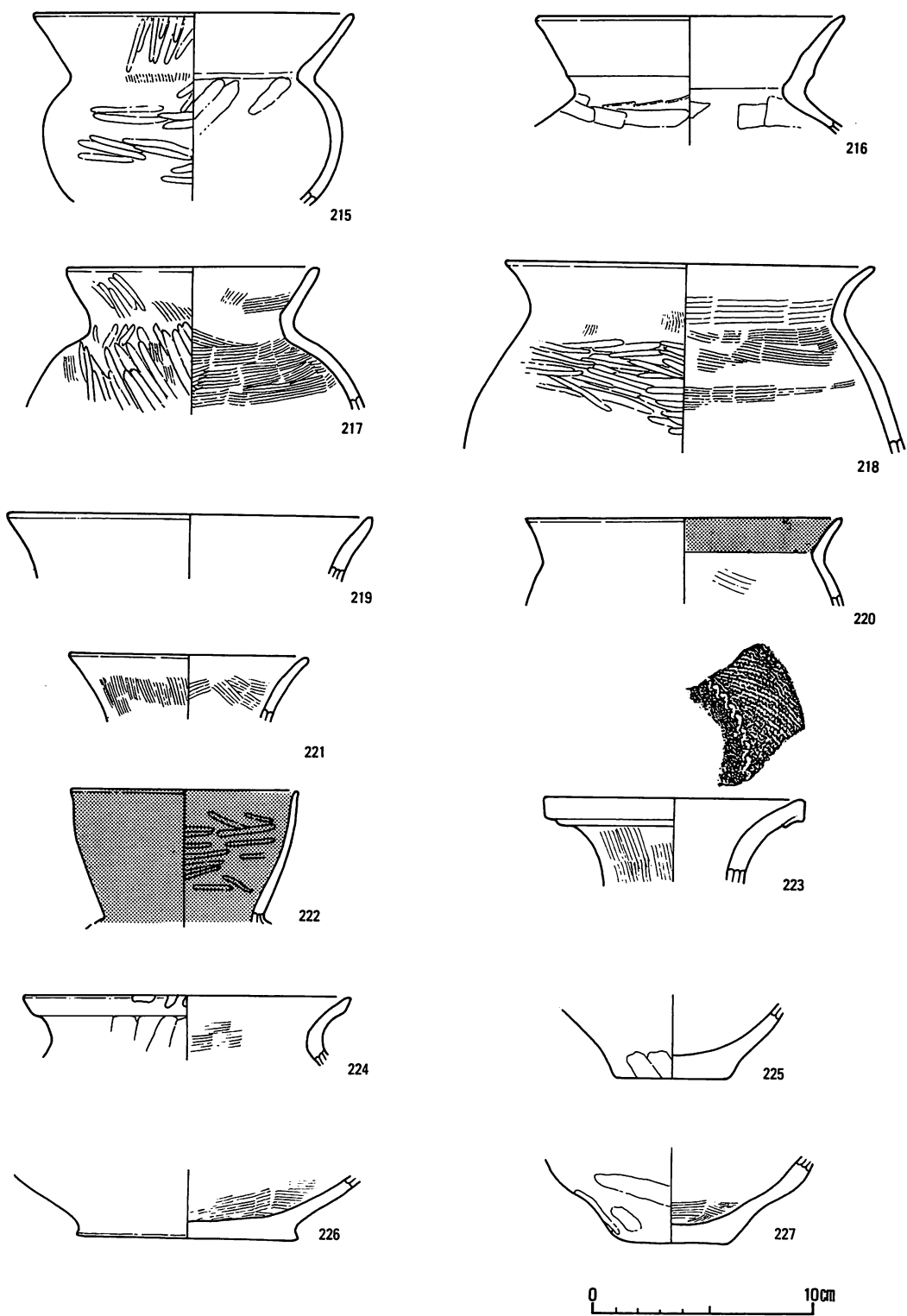
第31圖 4区溝状遺構



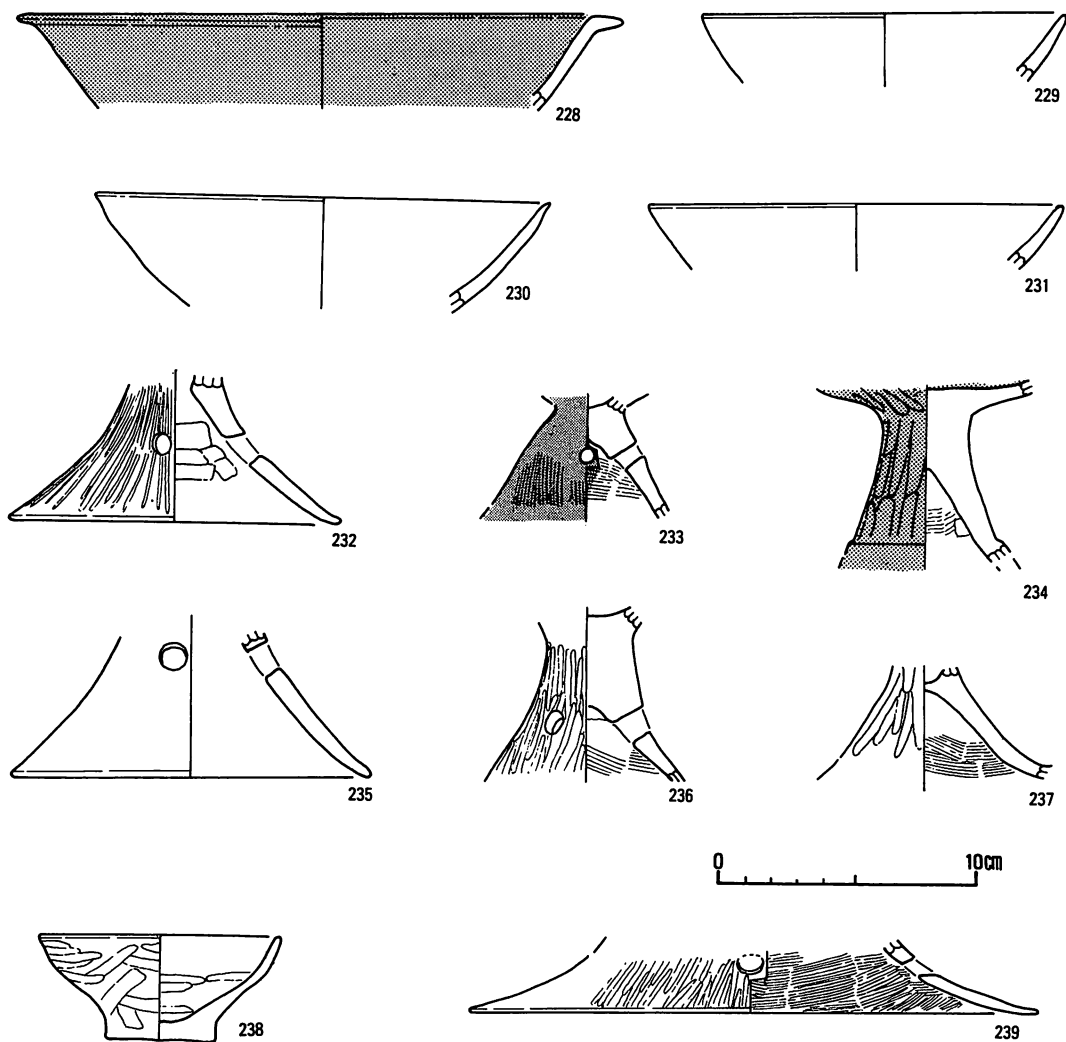
第32图 4区沟状遗構出土土器 (1)



第33图 4区沟状遗構出土土器 (2)



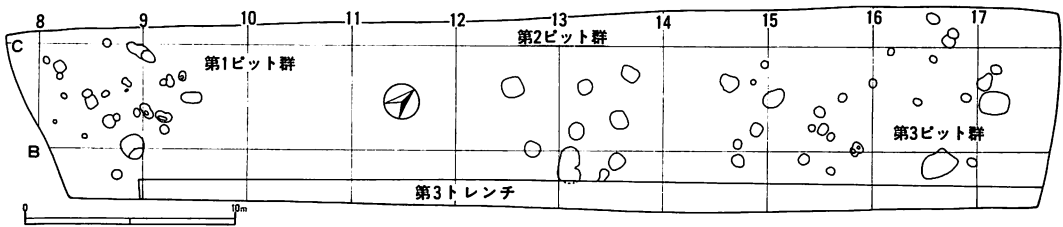
第34图 4区沟状遺構出土土器 (3)



第35図 4区溝状遺構出土土器 (4)

第6節 ピット群と出土遺物 (第35図～第43図)

3区に位置し、大きく三つの群に分かれ、南側から第1、第2、第3ピット群とする。第1ピット群(第37図)は3区A～C-8、9グリッドに位置する。30基のピットが比較的密に検出された。深さは20～40cmのものが多いが、並びは不規則で大きさもまちまちである。第2ピット群(第38図)は3区A、B-12、13に位置し、径80～100cmのピットが11基検出された。柱材が検出され柱穴と思われるが対応関係が不明瞭であり、建物址と判断するには至らなかった。第3ピット群(第39・40図)はA～C-14～17グリッドに位置する。径30～60cm程のものが多い。加工材がまとめて検出されたものや柱穴と思われるものもあるが、明確な対応関係がみられない。いずれも出土遺物から古墳時代初頭に属する。



第36図 3区ピット群配置図

●34、35号ピット（第41図）

第2ピット群A、B-12、13グリッドに位置する。径1m前後、深さ約30cmのピットが並ぶ。いずれも底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。35号ピットは底面より約14cm浮いた覆土中より割材が横たわった状態で検出された。

●33号ピット（第41図）

第2ピット群B-13グリッドに位置する。径70～75cmの円形を呈し、底面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さ25cmを測る。底面のほぼ中央に横たわって割材が検出された。

●40号ピット（第41図）

第3ピット群C-16グリッドに位置する。長径64cm、短径45cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は直線的に立ち上がるが、途中に狭いテラスがみられる。覆土中より柱あるいは杭と思われる材が斜めに横たわって検出された。

●43号ピット（第41図）

第3ピット群C-16グリッドに位置する。径60cmの円形を呈し、深さ約20cmを測る。底面は平坦で、中央寄りに径15cm、深さ5cm程のくぼみが2カ所みられる。この部分の直上の覆土中に材木片がまとまってみられたが、遺存状況が悪く取り上げはできなかった。

●63号ピット（第41図）

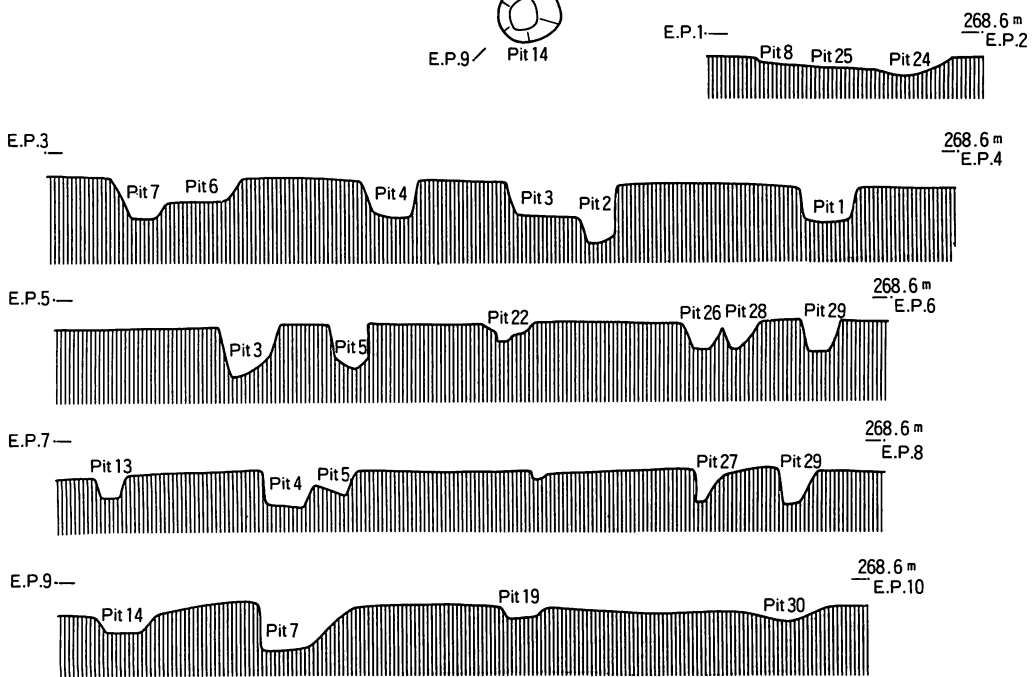
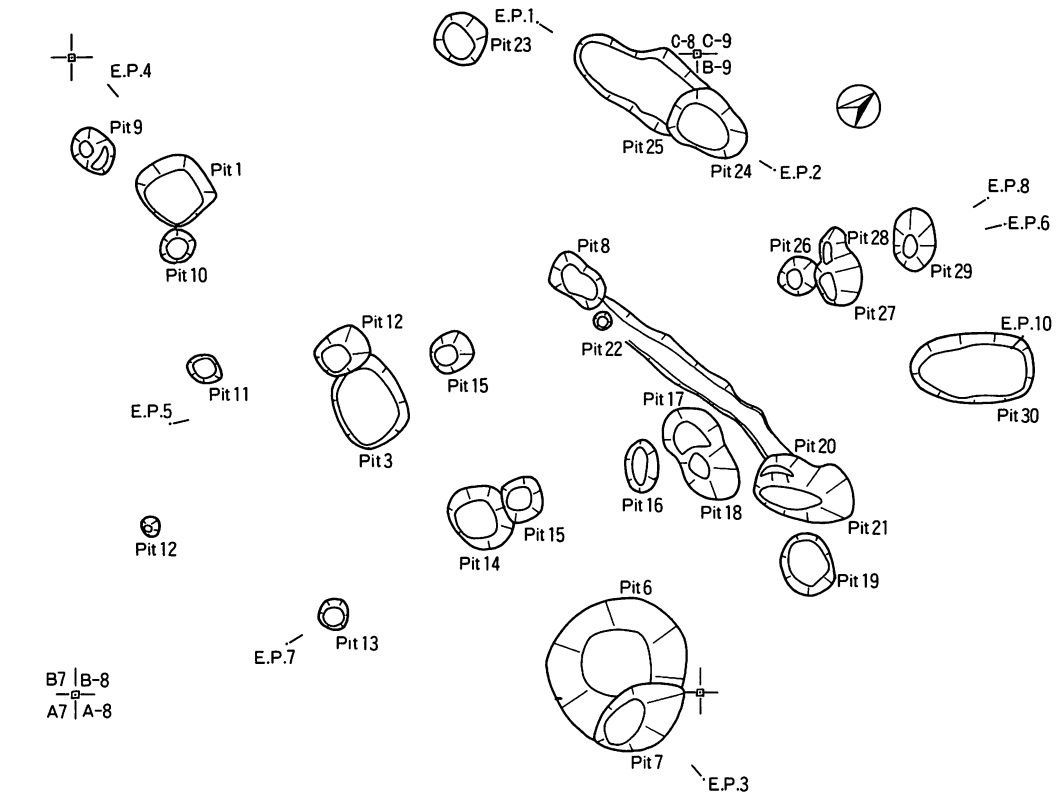
第3ピット群B-16グリッドに位置する。径40～50cmの円形を呈する。底面は皿状で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面直上より柱あるいは杭と思われる先端部を加工した材が横たわるように検出された。

●64号ピット（第41図）

第3ピット群A-16グリッドに位置する。長径60cm、短径38cmの不整円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、深さ約10cmを測る。ピットの西側で覆土上層中より小礫とともに土器の底部破片が検出された。

●65号ピット（第41図）

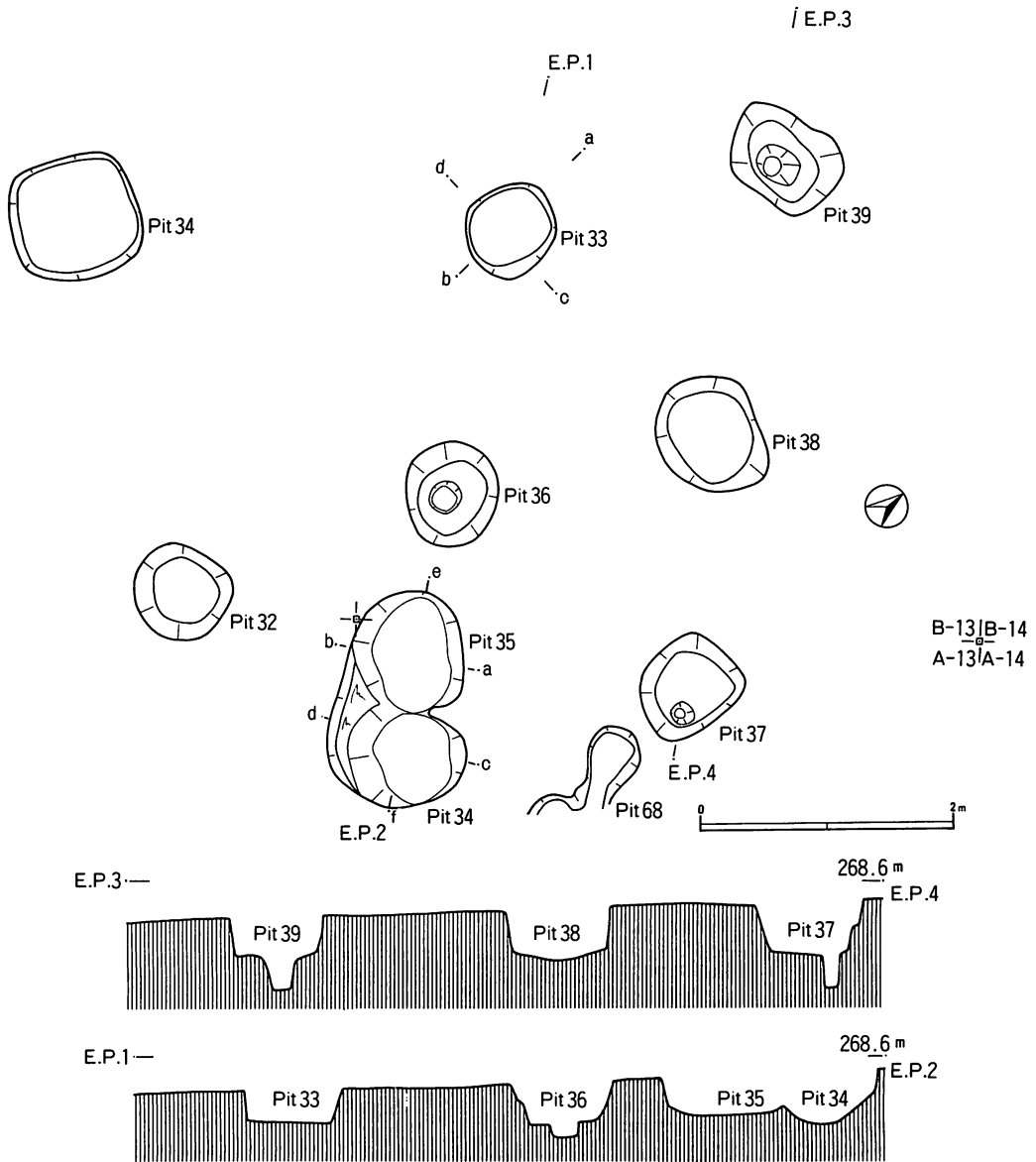
第3ピット群B-17グリッドに位置する。長径85cm、短径55cmの不整楕円形を呈する。底面は平坦で、深さ約66cmを測り、南側の立ち上がり中ほどに平坦なテラスをもつ。覆土上層よりミニチュア土器、甕などの土器片や板材・加工材・割材等の木器が多くまとまって出土した。



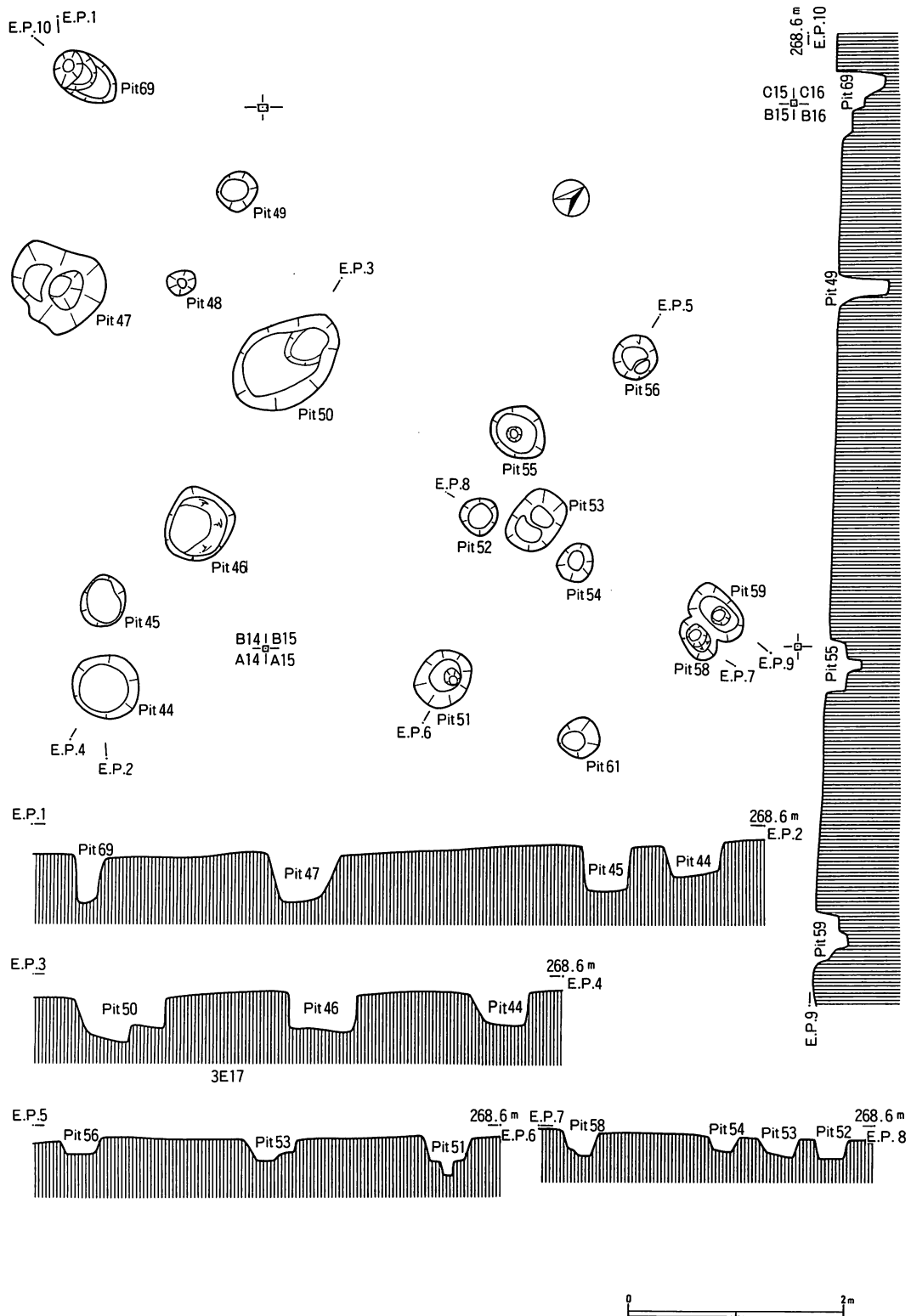
第37図 第1ピット群

●67号ピット (第40図)

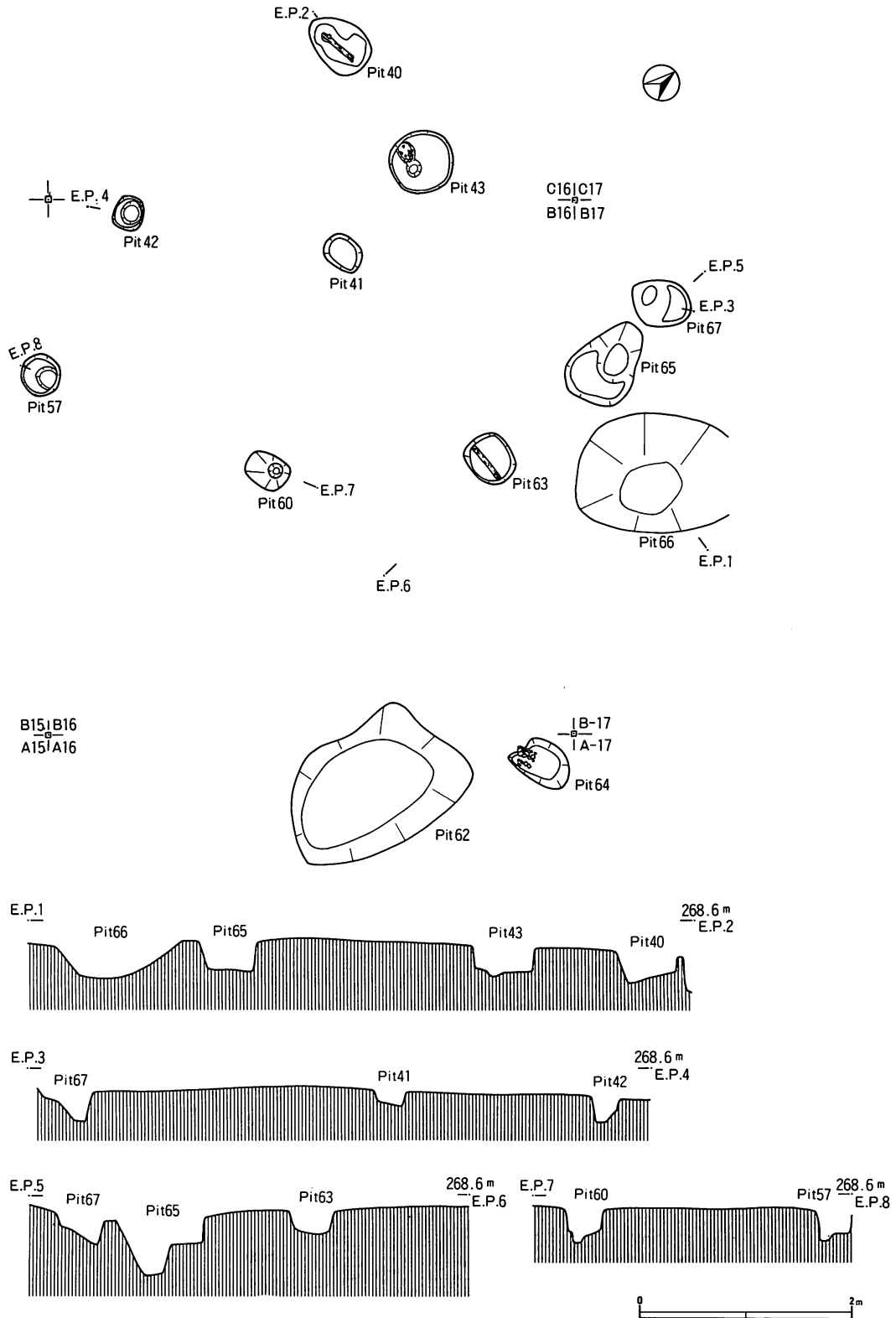
第3ピット群B-17グリッドに位置し、65号ピットに隣接する。長径55cm、短径40cmの不整楕円形を呈する。底面は狭く壁の立ち上がりもスリバチ状となる。覆土中より柱材と思われる材が斜めに立った状態で検出された。



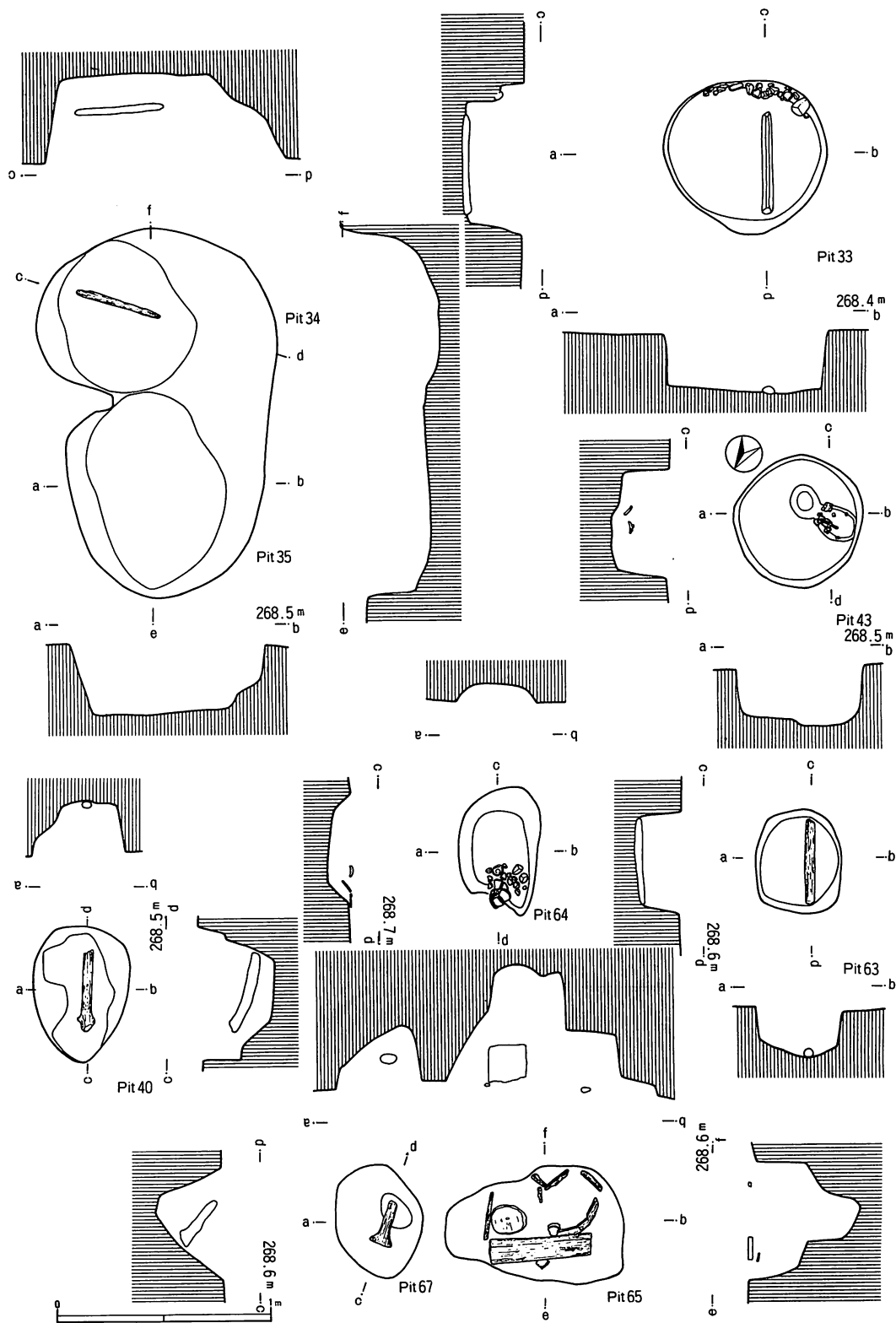
第38図 第2ピット群



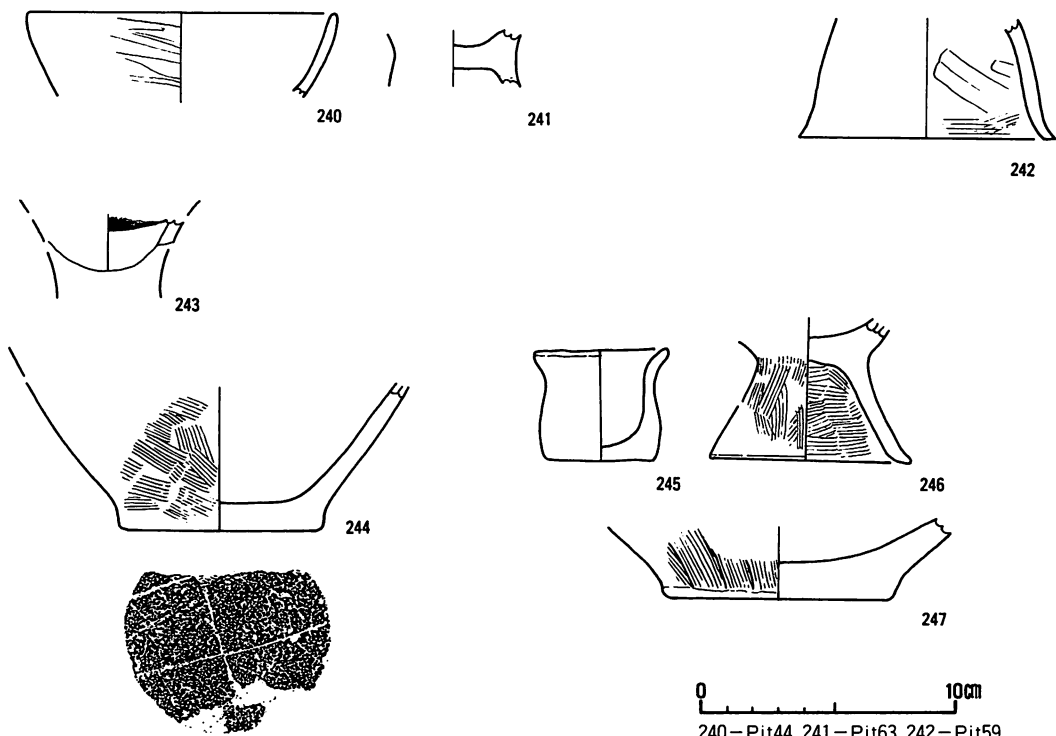
第39図 第3ピット群 (1)



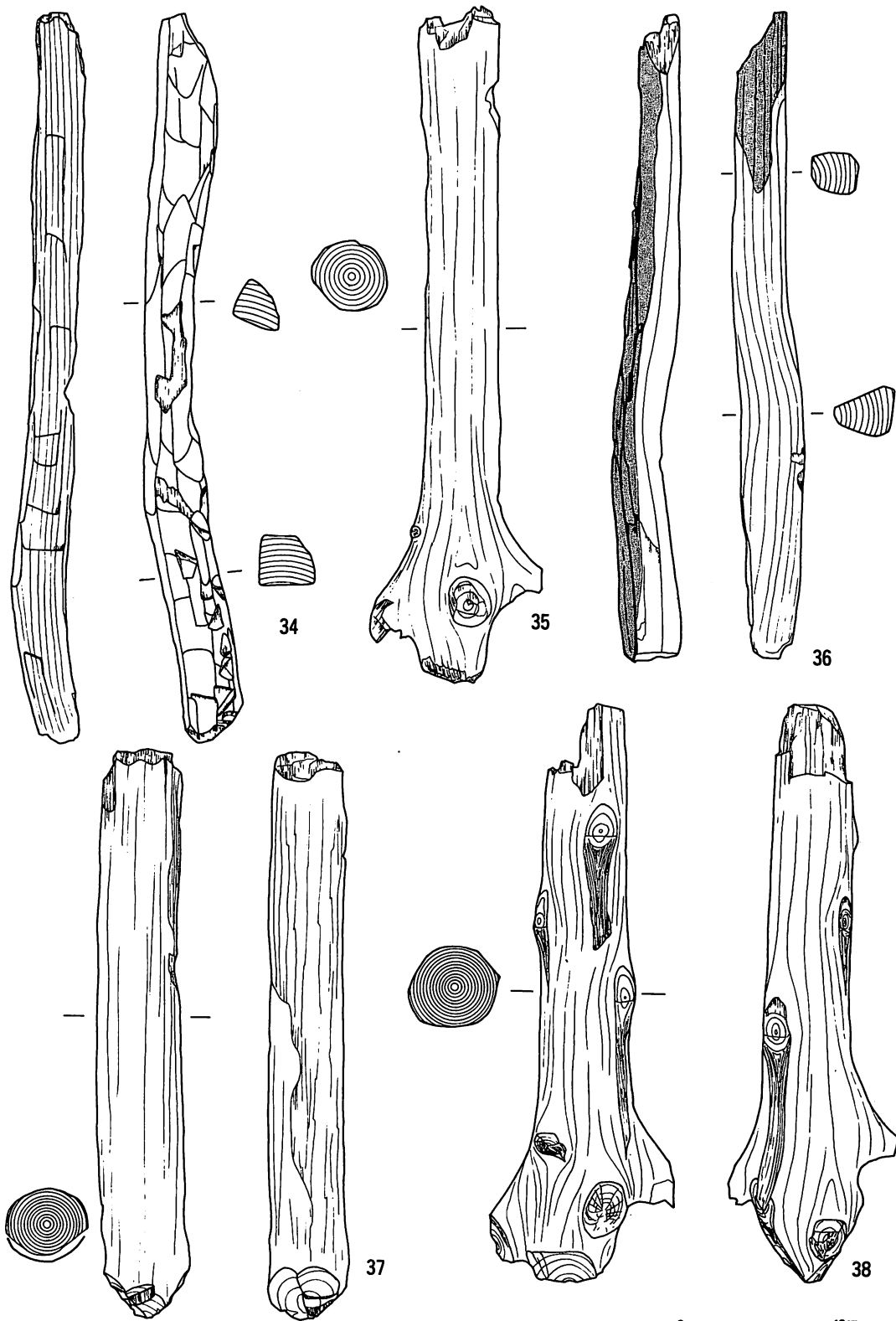
第40図 第3ピット群 (2)



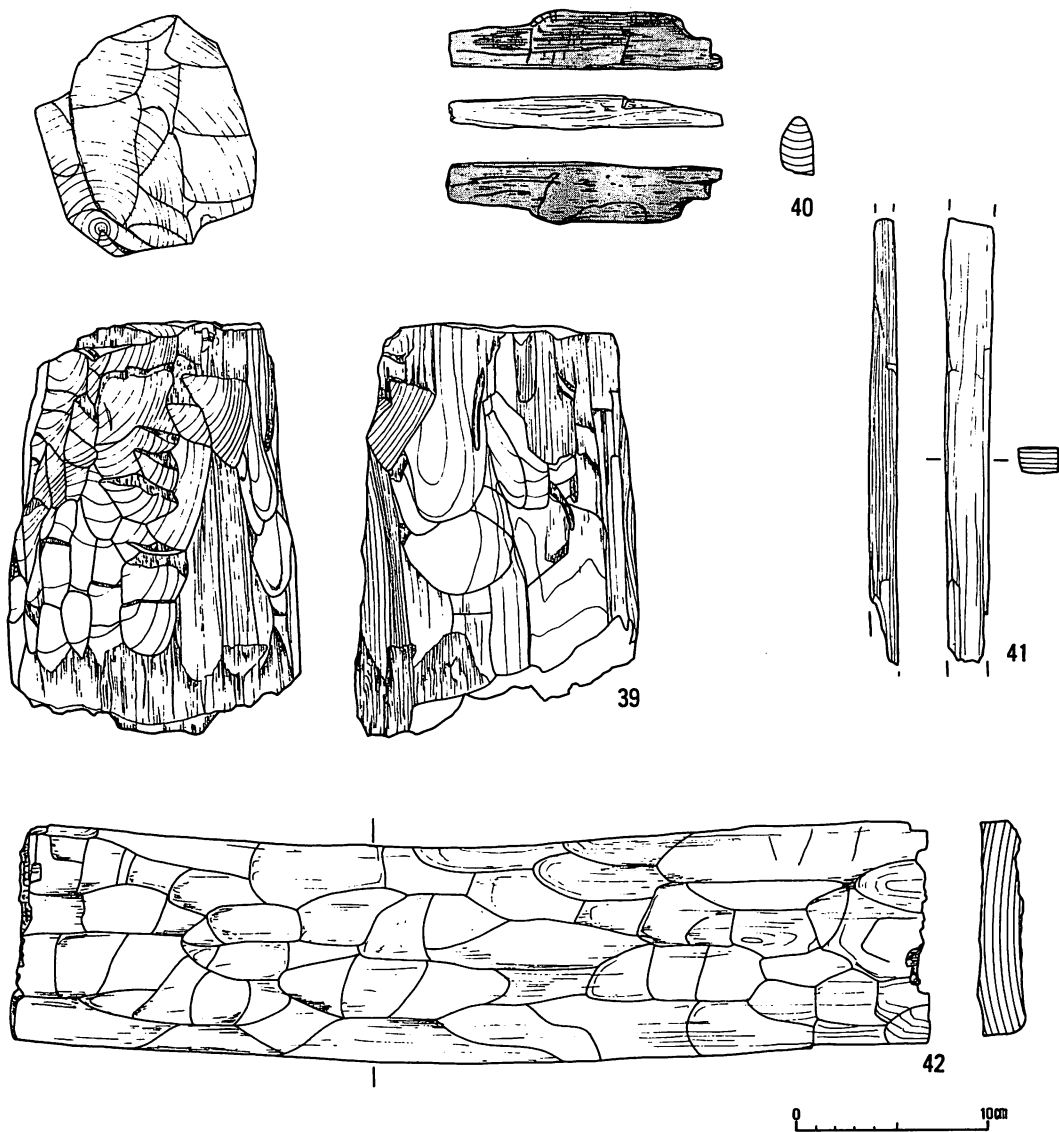
第41図 遺物出土ピット



第42図 ピット内出土土器



第43図 ピット内出土木材 (1)

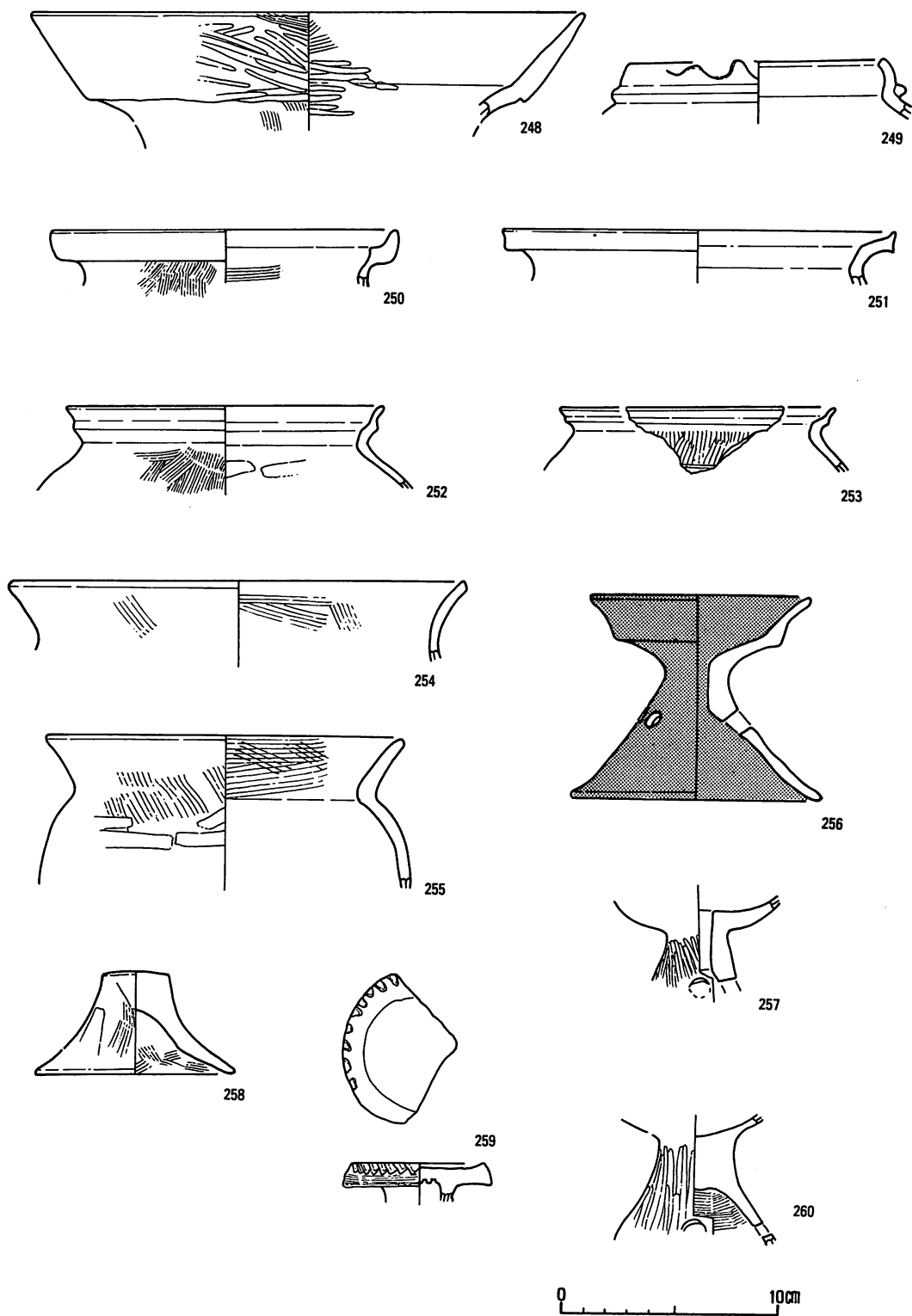


第44図 ピット内出土木材 (2)

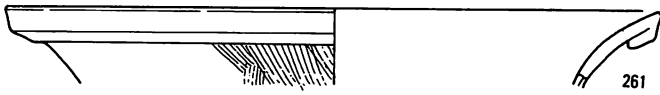
3 区遺構外出土土器 (第45図)

古墳時代前期の壺、甕、高坏、器台、蓋等が出土している。

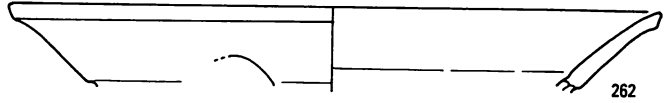
壺 248 は有段口縁を有する。249 は口縁部が波状に装飾され、口縁下に隆帯がめぐる。甕 は、単純口縁の甕 (254・255)、S字状口縁 (252・253)、受け口状の有段口縁 (250・251) などがみられ、S字状口縁は東海系、有段口縁 (251) は北陸系の甕と考えられる。器台 256・257 には脚部に円孔がみられ、256 には全面に赤彩が施される。259 は台部が皿状とならず平坦面をなし、脚を有するもので、県内に類例はない。



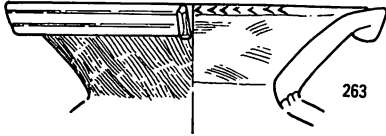
第45图 3区遺構外出土土器



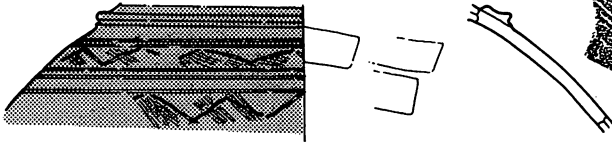
261



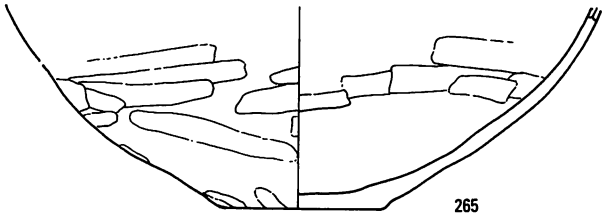
262



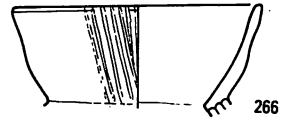
263



264



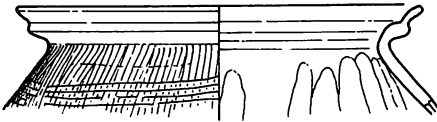
265



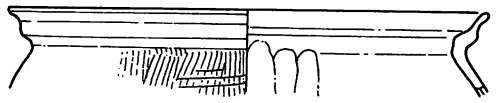
266



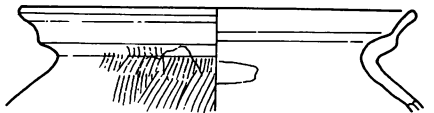
267



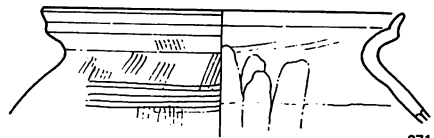
268



269



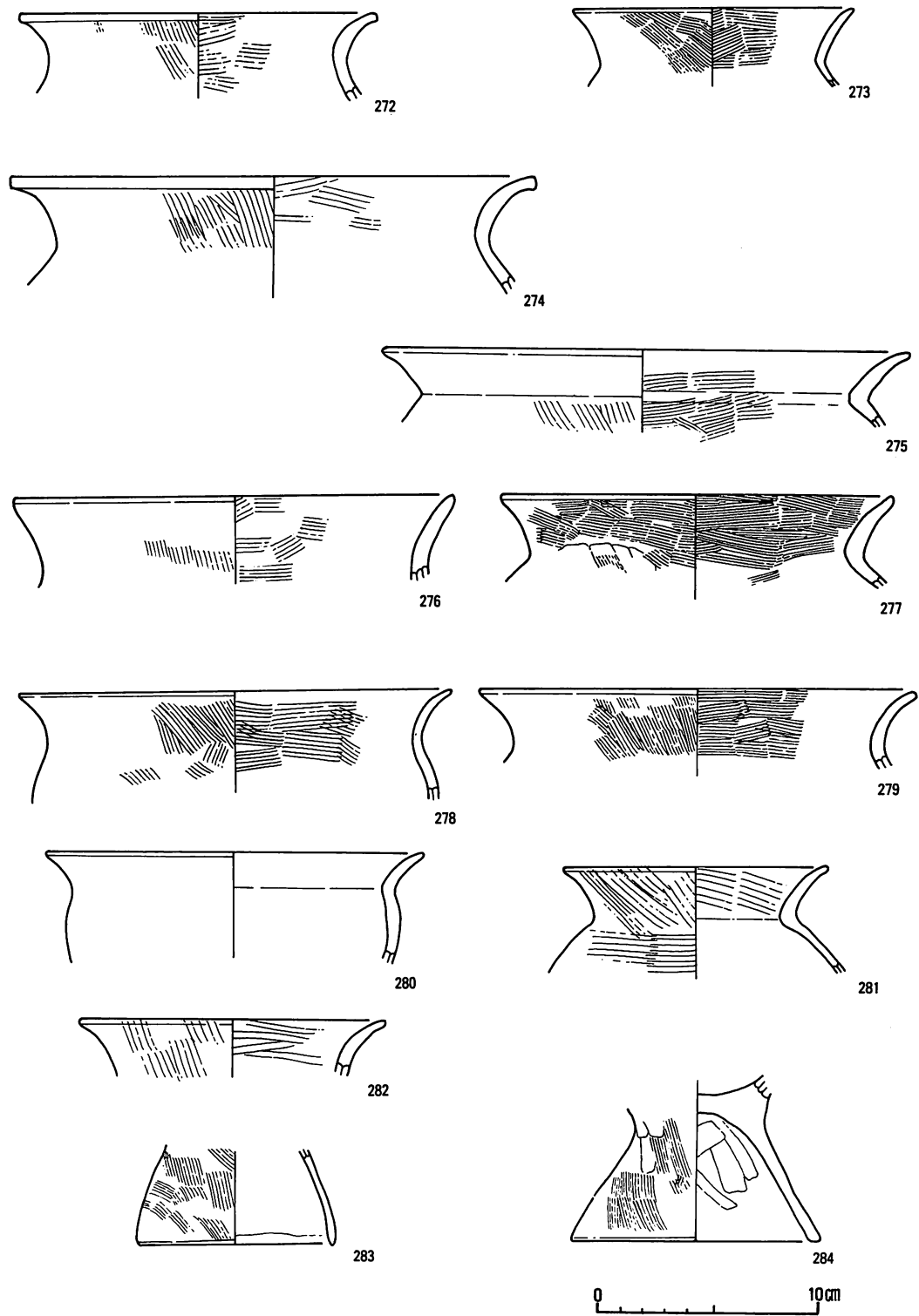
270



271



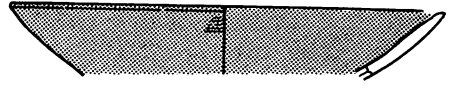
第46图 4区遺構外出土土器(1)



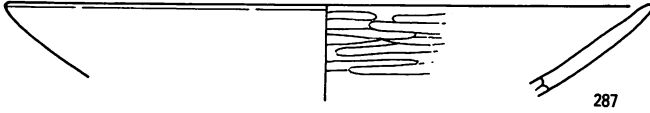
第47图 4区遺構外出土土器(2)



285



286



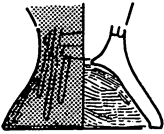
287



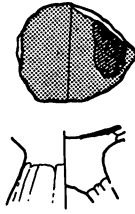
288



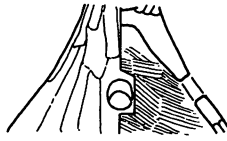
289



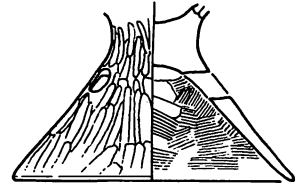
290



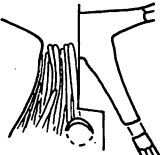
291



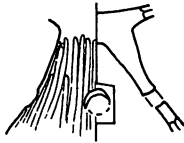
292



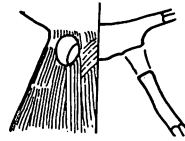
293



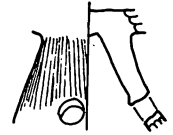
294



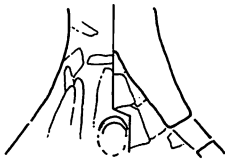
295



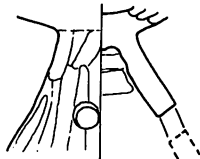
296



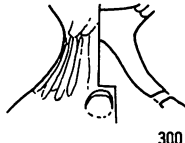
297



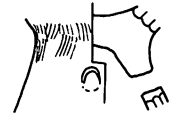
298



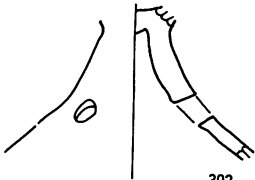
299



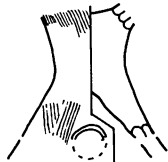
300



301



302



303



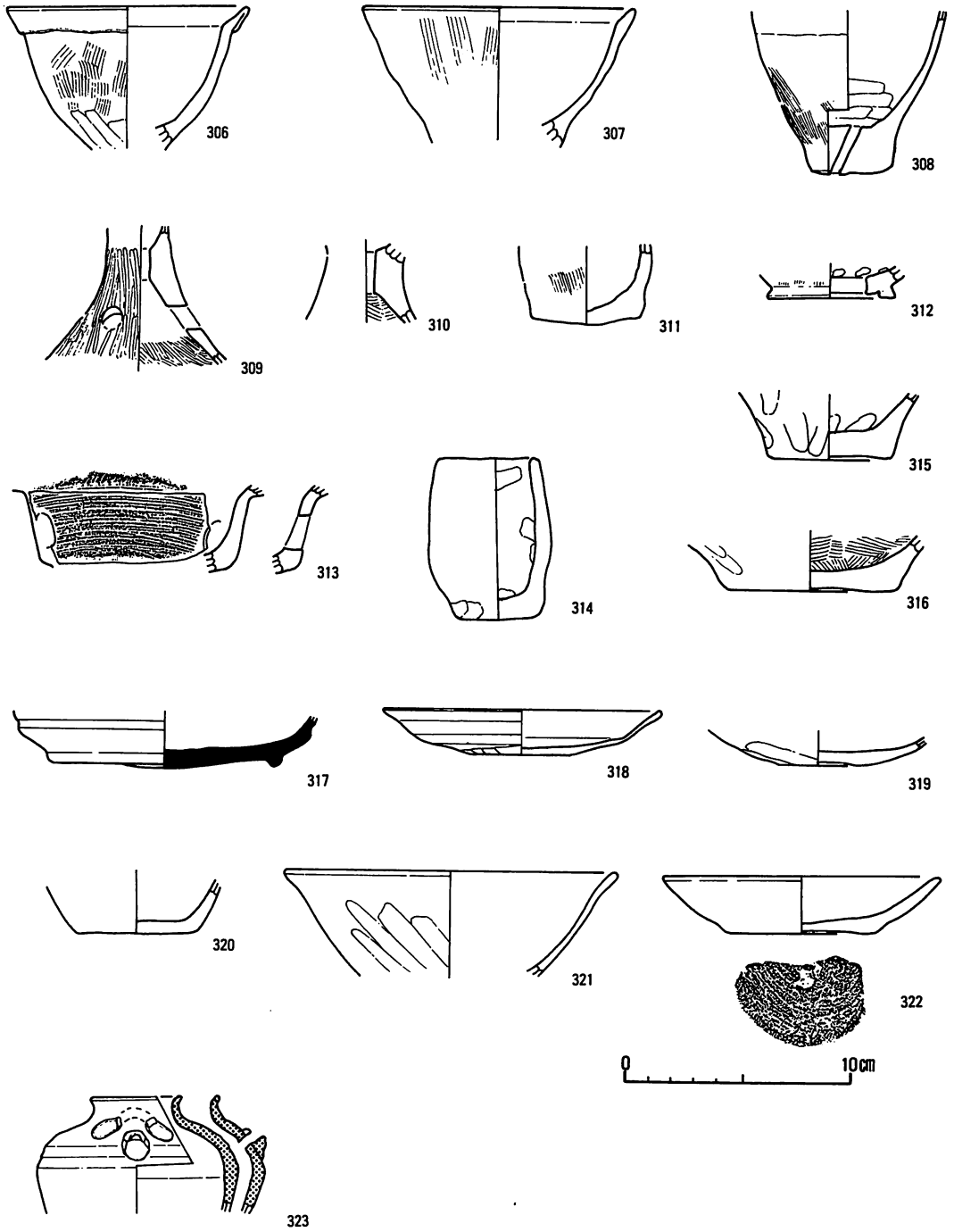
304



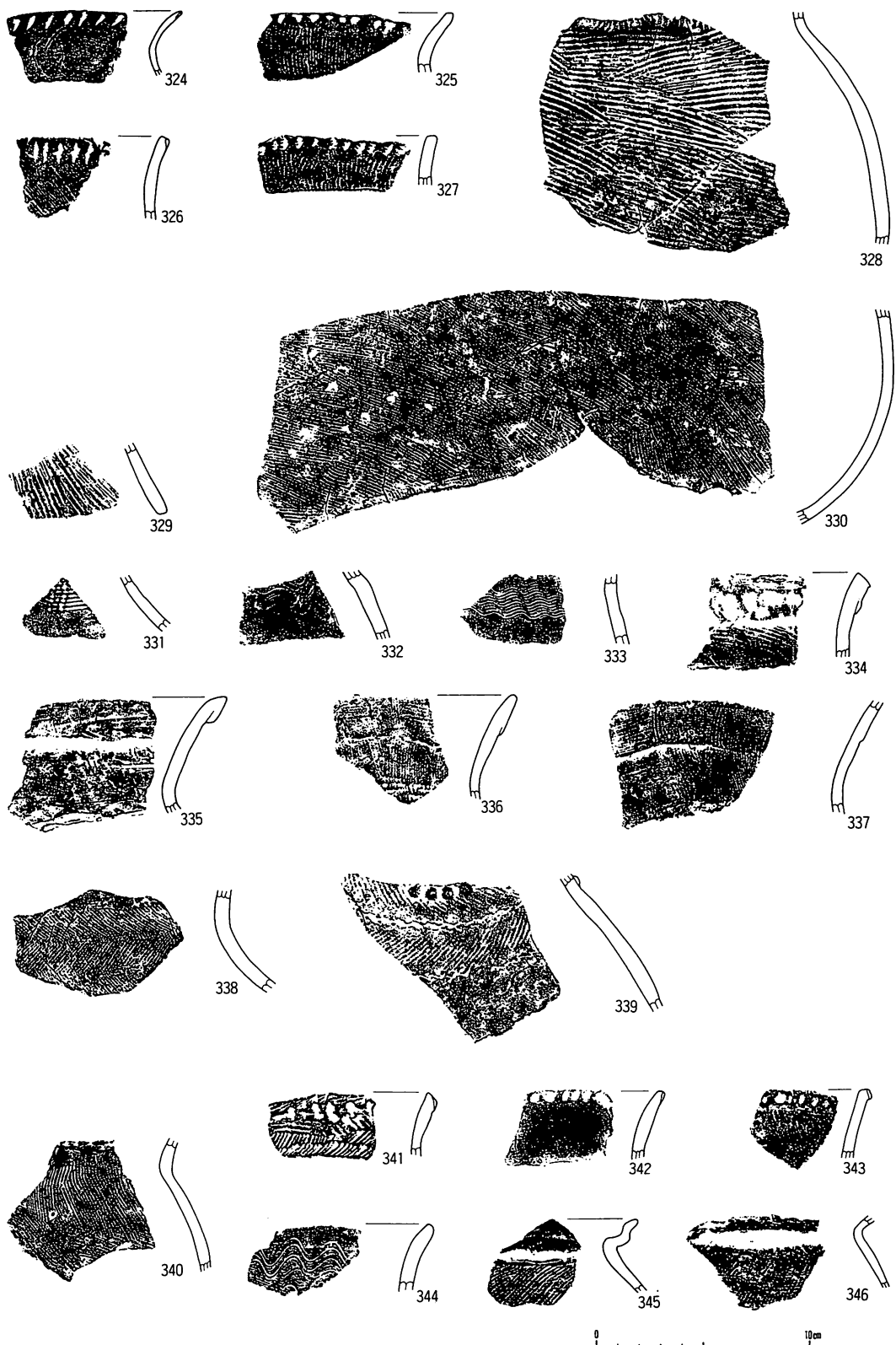
305



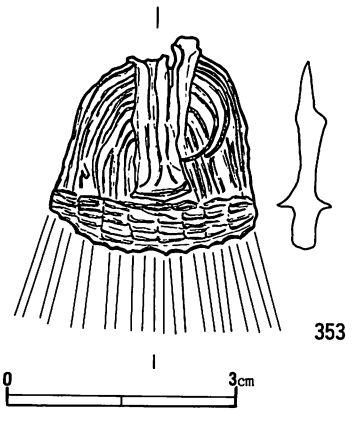
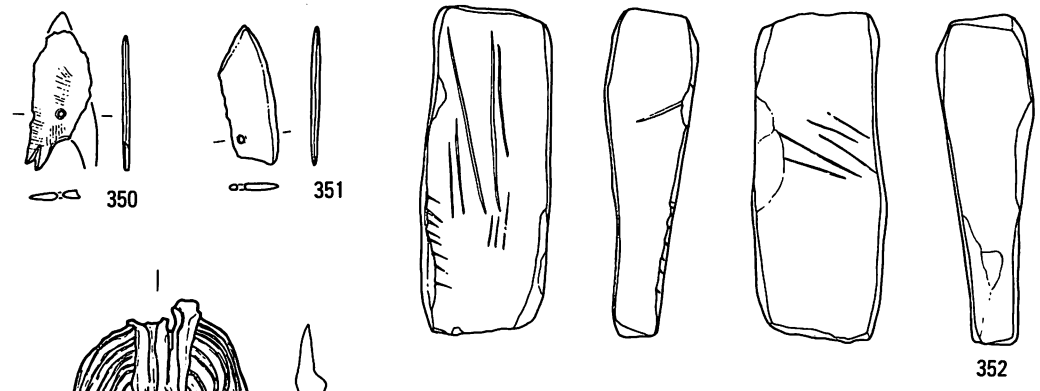
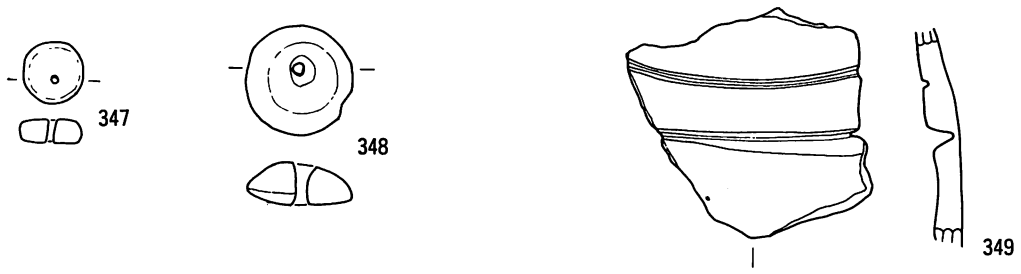
第48图 4区遺構外出土土器(3)



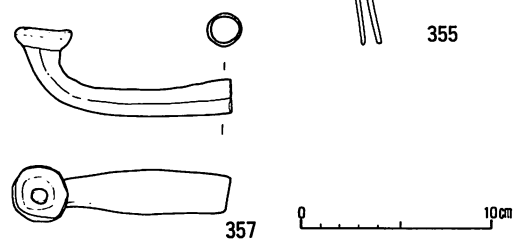
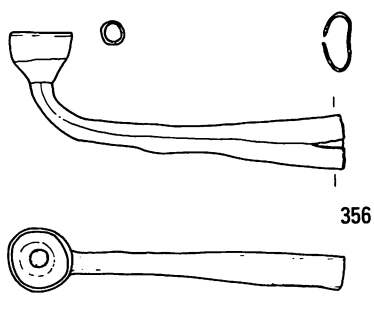
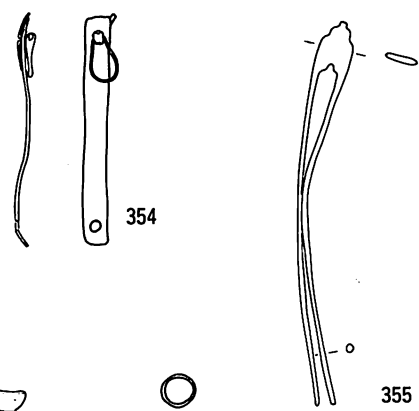
第49图 4区遺構外出土土器(4)



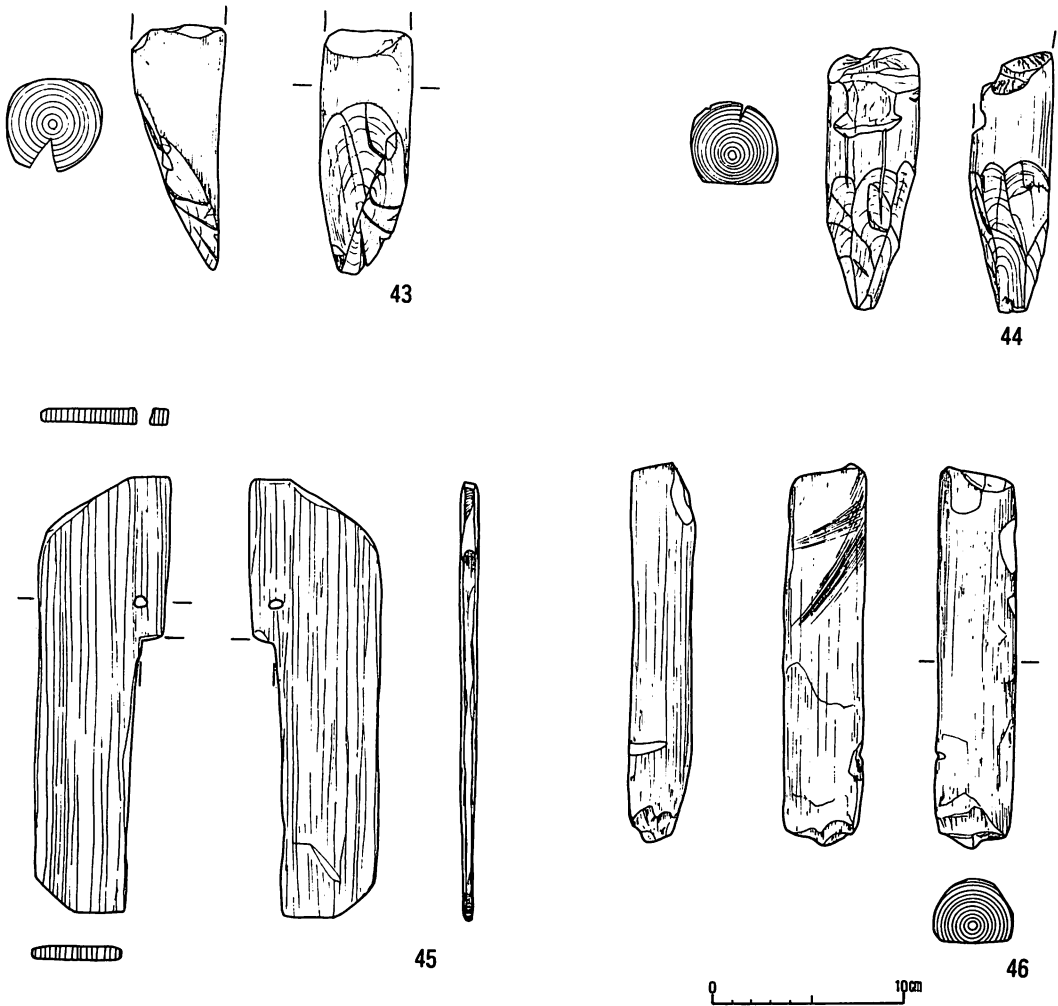
第50图 3·4区遺構外出土土器



2区第5ステージ出土櫛



第51図 土製品・石製品・金属製品・木製品



第52図 4区出土木器

4区遺構外出土土器

古墳時代前期の壺、甕、埴形土器、甗形土器が出土している。

壺で注目されるのは264の伊勢湾型の壺で、肩部に2本の隆帯が認められ、その下部に鋸歯状沈線文が2段にわたって施文される。東海地方の影響は、壺263やS字状口縁を有する甕についても認められる。透かしを有する装飾器台262・285は、北陸系土器の搬入と考えられ、該期の甲府盆地内への外来系土器の動態を知るうえで重要と考える。

第 V 章 近世の遺構と遺物

近世の遺構は調査区域の南側 4 区のみで検出された。いずれも水田址に伴うもので溜池状遺構 1 基、それに伴う水利施設、水田址 1 枚が発見されている。

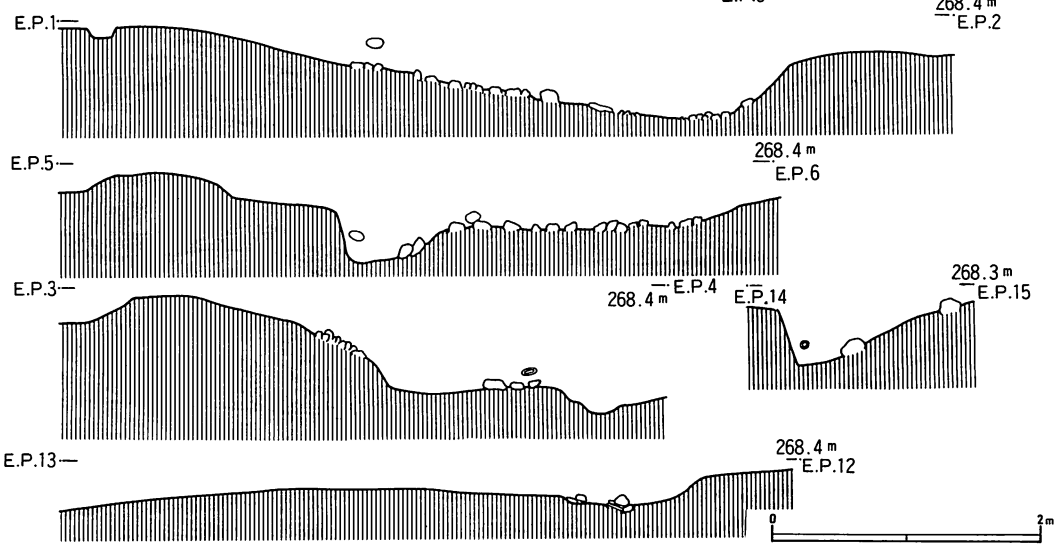
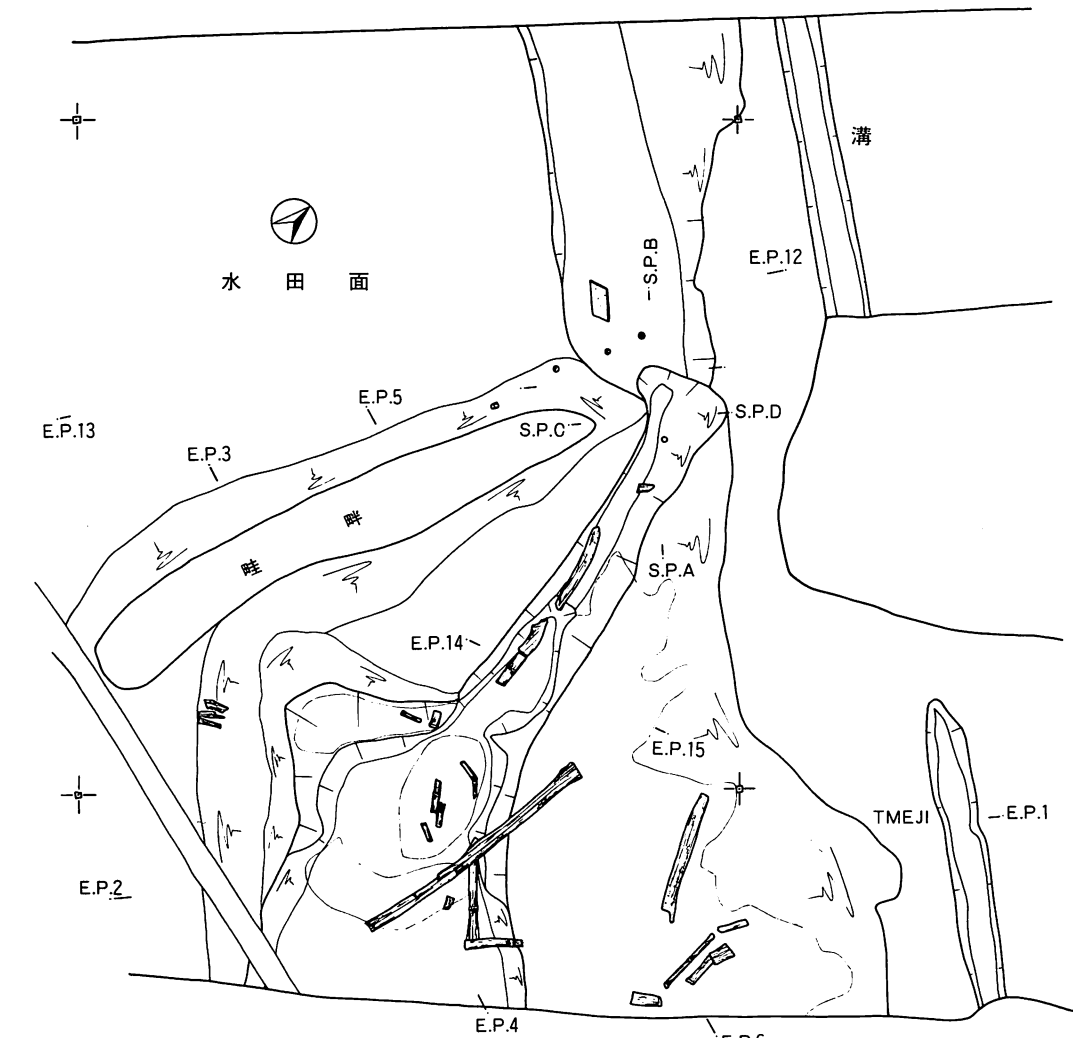
第 1 節 溜池状遺構と出土遺物 (第53・54図)

A、B-4、5 グリッドに位置する。古墳時代の堅穴状遺構や溝状遺構と重なるが、これらより約10cm程上層の面となる。溜池状遺構は東西で5.5 m、南北で4.5 mをはかり、やや角張った形を呈するが、南東側は調査区域外となるため全体の大きさ・形態は不明である。底面は皿状を呈し、北側では緩やかに、南側ではきつく立ち上がっていく。深さは40~50cmである。北側から中央に向かって南北方向に幅40~50cm、深さ約30cm程の溝が掘り込まれている。この溝の北端に排水施設がみられる。また中央部付近では幅約180 cm、一部調査区域外になるが250 cmの方形を呈する形で掘りこまれ、この北側で溝につながっていく。方形の掘り込みとテラス状に緩く立ち上がっていく底面には拳大の礫が一面に敷き詰められている。遺物は、覆土中より古墳時代初頭の土器とともに近世陶器や装飾品がわずかながらみられた。このためこの遺構を近世と位置付けたが湧水自体古墳時代から利用されていた可能性もある。そのほか竹や葦が束ねられた状態で検出された。竹の節は剥り抜かれてはいない。この溜池状遺構の底面には湧水点があり、調査中も多くの湧水がみられ一昼夜で、満水状態となる程であった。

水利施設は溜池状遺構の北側端にみられる。幅約100 cmで深さ45cmをはかり、断面はスリバチ状を呈する。覆土は3層に分層でき、自然堆積とおもわれる。溜池状遺構から続いてくる溝はこの部分で緩く立ち上がる。この水利施設の北側からは北西方向に浅い溝が延びていく。これは溜池状遺構の西側にある水田に水を掛け流すためのものとおもわれ、幅120~140 cm、深さ20cmを測り、そのまま調査区域外へと延びていく。この浅い溝が溜池状遺構と接する部分には、溝と直交する方向で、溝の中央から南側に向かって直線的に杭が4本打ち込まれている。溝の中に2本、外に2本、30cm、40cm、50cm間隔でみられる。溝の中の杭の周辺にはほぼ拳大の礫がまとまってみられ、また欠損しているが現存で長さ28cm、幅10cm、厚さ1.7 cmの長方形の板材が検出された。この施設は溜池状遺構に溜る湧水を水田に流すための排水施設と考えられる。

第 2 節 水田址 (第53図)

溜池状遺構の西側でB、C-3、4 グリッドに位置する。溜池状遺構との境を幅40~60cm、長さ230 cm、高さ12cm程の畦畔によって区切られている。この畦畔の立ち上がりは比較的なだらかで上面の幅は約20cm程である。水田の北側にも溝に挟まれるかたちで畦畔が検出された。畦畔の西側の溝は溜池状遺構から水を引き込むためのものであり、畦畔はこれに沿うように約5 cm程の高まりをもつ。畦畔の東側の溝は畦畔に沿うように溜池状遺構の北側まで延びていく。幅約16cm、深さ約5 cm程で、調査区域外に延びていく。南側では畦畔は検出できなかった。水

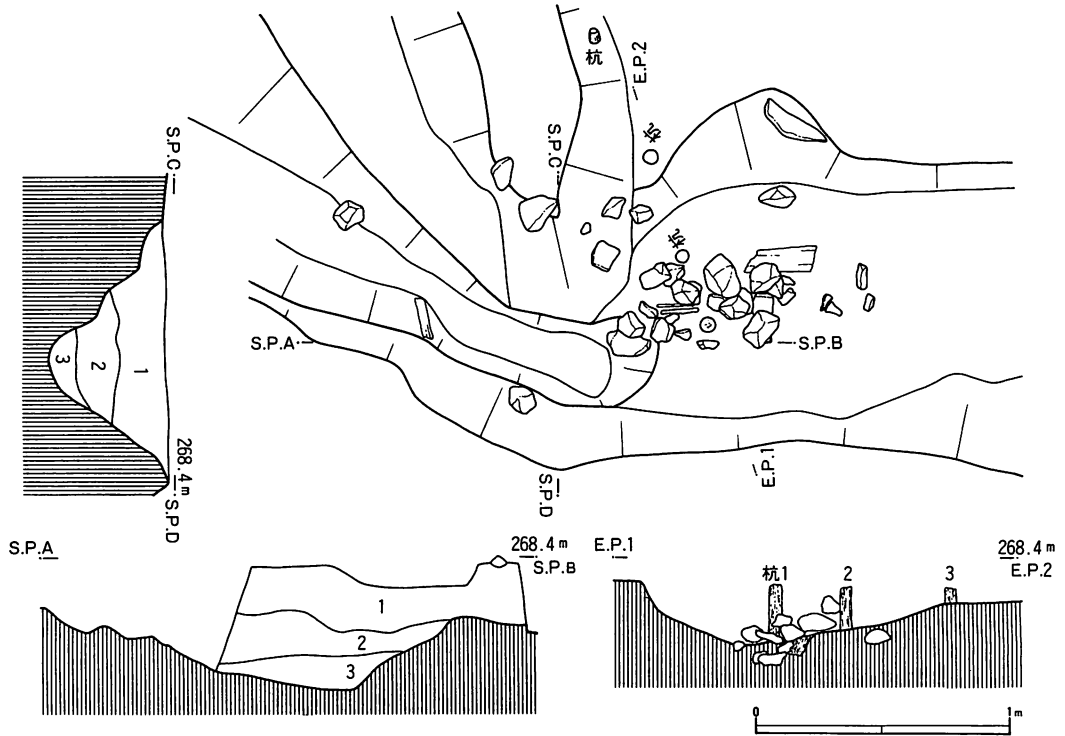


第53図 溜池状遺構

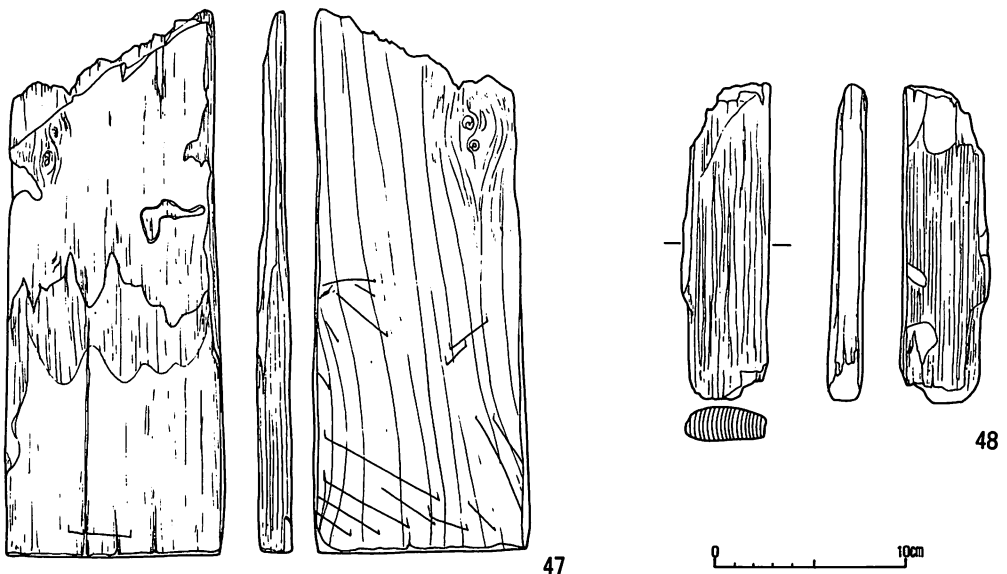
田の西側は調査区域外であるため水田の面積は不明である。

第3節 包含層出土遺物と自然遺物

近世の遺物としては、キセルの雁首が2点、かんざしが1点、用途不明の青銅製品が1点発見されている。



第54図 溜池状遺構・水利施設



第55図 溜池状遺構出土木器

第 VI 章 各 節

第 1 節 植物遺体

名古屋大学文学部

渡 辺 誠

(1) は じ め に

このたび山梨県埋文センターより調査の機会を与えられた、山梨県東八代郡八代町身洗沢遺跡の植物遺体は、住居址内と水田に利用された谷部から出土したものである。その時期は弥生時代後期に属す。

(2) 植物遺体の種名と有用性 (第 1・2 表、第 56 図、写真 1 参照)

検出された植物遺体の種名は次の 9 種であり、それらの生態や有用性は次のとおりである。

1. いちい科カヤ *Torreya nucifera* SIEB. et ZUCC.

宮城県以南から九州にかけての山林に散生する高木の針葉樹であり、材は碁盤や将棋盤に用いられ、種子は脂肪に富み食用・薬用とし、食用油もとれる。

2. いぬがや科イヌガヤ *Cephalotaxus Harringtonia* K. KOCH

岩手県以南から九州にかけて分布する針葉樹である。熟した外種皮を食べるが、胚乳からは油をとる。平安時代の『延喜式』にはヘビ油としてその名がみえる。イヌガヤの実他にはヘイビ・ヘビ・ヘイミ・ヒョービ・ヘボガヤの実などもよばれる。その長所はひどい寒中でも凍ることなく明るい光を放つことであり、冬の神事や灯台用として欠かせないものであったという (深津 1983)。

3. くるみ科オニグルミ *Juglans mandshurica* subsp. *Sieboldiana* MAXIM

北海道から九州にかけて、川沿いや適湿の地に生える落葉高木であり、材は狂いが少なく、家具、指者材に用いられる。種子は脂肪に富み美味で、油もとれる。

4. ぶな科クリ *Castanea crenata* SIEB. et ZUCC.

山野に普通にある落葉高木で、東北日本の落葉広葉樹林帯の代表的な樹木である。その種子は甘く美味であり、9～10月に熟す。材も有用である。

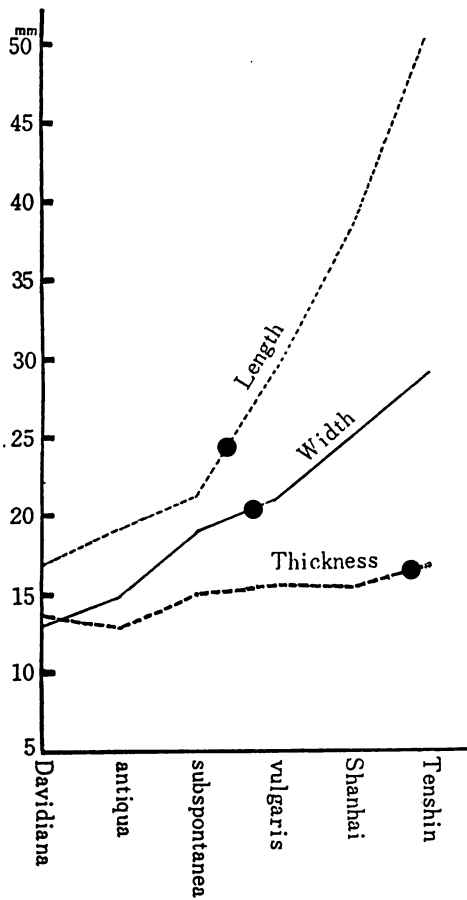
種皮と種子の破片が、ごく少量検出されている。

5. とちのき科トチノキ *Aesculus trubinata* BLUME

沢や川沿いに群生する落葉高木で、種子は9～10月に熟す。材も有用である。種子はアク抜きにより食用化できる。縄文時代中期以降現代に至るまで、程度の差こそあれ重要なデンプン源であった。山梨県下においても、トチモチにその名残りを留めている。

6. えごのき科エゴノキ *Styrax japonica* SIEB. et ZUCC.

山地や原野の小川のふちに普通に生える落葉樹で、種子は食用にはならない。しかしその果皮にはエゴサポニンを含み、洗濯や毒流し漁に用いられた。材は彫刻材・器具材になる。



第56図 桃核の大きさ比較
(●印は本遺跡)

ノモモ (Subspontanea)・モモ (Vulgaris) に相当するとみなされる (第56図)。なお計算に際しては完形品のみを使用した。

9. 禾本科イネ *Oryza Sativa japonica* L.

縄文時代晩期末に渡来した栽培植物であり、多言を要しないであろう。

(3) 植物遺体の量的構成

以上の9種のうち、9のイネのみが炭化米として住居址内より出土した以外は、すべて水田に利用された谷部から出土したものである。炭化米は水田に利用された谷部からは出土していない。

それらのうち1～6は野生植物であり、7～9は栽培植物である。特に8のモモ、9のイネは縄文時代晩期末～弥生時代に大陸より伝播したものであり、モモはもっとも数量が多い。炭化米は約10粒である。7のヒョウタン仲間は種子1粒のみで、食用の可否は不明である。

7. うり科ヒョウタン仲間

Lagenalia siceraria STANDL.

ヒョウタン仲間には、食用可能な種類 (カンピョウ) と不可能な種類 (千成ビョウタンなど) とがあるが、種子の形態は同じであり、その区別はできない。ただし食用以外にも容器などとして、その利用範囲は広い。

果皮1点が出土している。果皮は小型のヒョウタン仲間を示し、かなりよく残っているがへたに近い部分が欠けていて、全形は不明である。長さ9.0cm、直径6.3cmで、やや長目である。おそらくフラスコ形と推定されるが、食用の可否は不明である。また加工痕は認められなかった。

8. ばら科モモ *Prunus Persica* BATSCH

落葉性の小高木で、果実を食用とする。果実は7～8月に熟す。

数量が多く511点みられた。このうち完全な桃核は221点、半分になった桃核は274点で、齧歯類に噛れた痕のある桃核は16点である。これらの桃核の計測値は、長さは最小1.90、最大3.05cmで、平均2.46cm、幅は最小1.40、最大2.90cmで、平均2.07cm、厚さは最小1.25cmで、平均1.65cmである (第1・2表)。厚さにおいてやや問題があるが、そのサイズからみて小清水卓二氏 (小清水1959) のいう

1のカヤ、2のイヌガヤ、4のクリは少ない。5のトチノキは果皮1点のみであるが、弥生時代後期においても、甲府盆地のなかにトチノキが生えていたことを示唆していて、興味深い。トチの実の採集に当っては、この果皮はがさばるので必ずむいて捨てるものであり、遠方より運ばれる可能性はきわめて低い。

3のオニグルミ、6のエゴノキはやや多かった。オニグルミやトチノキは水分の多い沢に生える植物であり、集落と水田の間の斜面に生えていたことが推定される。

第1表 桃核数量表

出土地区	完形	噛じり痕有る完形	半割	計
1区2号水田	2	2	12	16
1区4号水田	46	3	35	84
1区谷	14	1	28	43
1区谷	24	1	53	78
2区ゴミ捨て場	135	2	139	276
3区B-11グリット	0	4	5	9
不明	0	3	2	5
計	221	16	274	511

(4) おわりに

水稻栽培段階に入っている弥生時代後期においても、縄文時代以来の食料であるオニグルミやトチノキの種子類が甲府盆地内の低地においてもみられるということは、時代の推移の実際の姿を示唆していて興味深い。類例の増加を待ってさらに問題を深めていきたいと考える。

参考文献

小清水卓二、1959：古代日本の住居跡から出土する桃核について。近畿古文化論攷。

559～568頁。東京。

深津 正、1983：燈用植物。ものと人間の文化史、50。法政出版・東京。

謝 辞

最後に、調査の機会を与えられ種々ご教示下さった山梨県埋文センターの中山誠二・長沢宏昌氏、資料整理に御協力下さった名古屋大学文学部学生の梶 昌樹・近藤高浩氏に対し、衷心より謝意を表する次第である。



写真1 身洗沢遺跡出土植物遺体

1：カヤ種子 2：イヌガヤ種子 3：オニグルミ核 4：トチノキ果皮
 5：エゴノキ種子 6：ヒョウタン果皮 7：モモ核 8：同齧歯類の噛り痕ある桃核。
 9：クリ 10：炭化米

(Scale 1~9=原寸、10=2倍)

第2表 桃核計測値一覧表 (単位cm)

出土地区	高さ	幅	厚さ	出土地区	高さ	幅	厚さ
1区2号水田	2.7	2.3	1.75		2.35	2.1	1.6
	2.0	1.5	1.5		2.7	2.0	1.7
1区4号水田	2.4	1.9	1.5	1区4号水田	2.3	2.0	1.6
	2.3	1.85	1.5		2.35	1.8	1.45
	2.5	2.1	1.55		2.55	2.2	1.6
	2.5	2.1	1.65		2.5	1.9	1.7
	2.4	1.8	1.5		2.2	2.0	1.7
	2.45	1.95	1.5		2.45	2.2	1.7
	2.7	2.0	1.7		2.3	1.9	1.5
	2.9	2.3	1.9		2.5	2.0	1.65
	2.7	2.2	1.8	2.7	1.95	1.5	
	2.5	1.9	1.6	1区 谷	3.0	2.2	1.8
	2.4	1.9	1.6		2.6	2.15	1.8
	2.65	2.0	1.6		2.75	2.3	1.95
	2.3	1.8	1.5		2.7	2.25	1.7
	2.4	2.0	1.7		2.35	2.15	1.8
	2.3	1.9	1.6		2.7	2.3	1.8
	2.4	2.3	1.8		2.55	2.3	1.7
	2.3	2.0	1.6		2.6	2.0	1.6
	2.75	1.9	1.8		2.65	2.1	1.85
	2.45	1.8	1.65		2.6	2.1	1.75
	2.3	2.1	1.6		2.2	1.95	1.65
	2.5	2.1	1.75		2.65	2.1	1.6
	3.05	2.4	1.9	2.4	2.1	1.55	
	2.5	2.35	1.9	2.6	2.9	1.4	
	2.5	1.9	1.6	1区 谷	2.65	2.5	2.25
	2.5	2.1	1.6		2.7	2.25	1.55
	2.6	2.05	1.4		2.5	2.25	1.6
	2.5	2.1	1.6		2.2	2.15	1.8
	2.5	2.1	1.55		2.5	2.1	1.8
2.4	1.9	1.6	2.55		2.25	2.15	
2.35	1.9	1.5	2.75		2.3	1.75	
2.3	2.0	1.6	2.5		1.95	1.5	
2.55	1.9	1.45	2.4		2.0	1.65	
2.5	1.9	1.6	2.4		2.0	1.6	
2.65	2.1	1.7	2.35		2.0	1.55	
2.65	2.0	1.75	2.4		2.05	1.6	

出土地区	高さ	幅	厚さ
1区 谷	2.4	2.1	1.7
	2.15	1.9	1.4
	2.4	2.0	1.7
	2.75	2.15	1.65
	2.35	2.2	1.7
	2.45	2.3	1.8
	2.65	2.1	1.65
	2.2	1.8	1.6
	2.3	2.2	1.8
	2.4	2.0	1.75
	2.55	2.1	1.6
	2.6	2.0	1.6
	2区ゴミ捨場	3.0	2.6
2.55		2.1	1.75
2.65		2.3	1.8
2.4		2.2	1.7
2.45		2.0	1.6
2.6		2.25	1.75
2.4		2.25	1.7
2.4		2.1	1.6
2.4		2.2	1.8
2.65		2.1	1.7
2.4		2.2	1.75
2.5		2.25	1.75
2.6		2.3	1.8
2.35		1.75	1.45
2.45		2.1	1.5
2.4		2.05	1.5
2.9		2.3	1.8
2.3		2.1	1.65
2.2		1.9	1.5
2.7		2.2	1.7
2.6		2.25	1.75
2.4		1.9	1.7
2.35		1.9	1.5
2.4		2.1	1.75
2.6		2.1	1.7
2.6		2.15	1.7

出土地区	高さ	幅	厚さ
2区ゴミ捨場	2.55	2.15	1.6
	2.65	2.2	1.7
	2.6	2.0	1.6
	2.3	2.0	1.65
	2.5	2.2	1.8
	2.75	2.3	2.0
	2.45	2.2	1.75
	2.4	2.2	1.8
	2.5	2.2	1.8
	2.6	2.3	1.65
	2.7	2.4	1.7
	2.3	1.4	1.6
	2.5	2.1	1.6
	2.3	2.0	1.6
	2.6	2.2	1.65
	2.05	1.8	1.5
	2.3	1.9	1.5
	2.55	2.2	1.6
	2.6	2.0	1.6
	2.15	1.8	1.5
	2.4	2.0	1.55
	2.2	1.85	1.5
	2.5	2.2	1.7
	2.4	2.1	1.7
	2.4	2.0	1.65
	2.6	1.8	1.7
	2.75	2.45	1.8
2.6	2.3	1.7	
2.45	2.1	1.6	
2.5	2.2	1.8	
2.5	2.1	1.7	
2.4	1.75	1.5	
2.8	2.1	1.7	
2.25	2.15	1.7	
2.35	2.1	1.7	
2.4	2.15	1.8	
2.25	1.8	1.5	
2.2	1.95	1.6	

出土地区	高さ	幅	厚さ
2区ゴミ捨場	2.6	2.2	1.65
	2.9	2.6	1.8
	2.6	2.15	1.6
	2.15	1.6	1.5
	2.6	2.4	1.6
	2.7	2.15	1.65
	2.4	1.9	1.6
	2.4	2.0	1.6
	2.3	1.8	1.4
	2.3	2.2	1.85
	2.3	2.1	1.7
	2.6	2.4	1.9
	2.8	2.55	1.6
	2.2	1.9	1.5
	2.5	2.0	1.55
	2.35	1.8	1.5
	2.5	2.25	1.85
	2.5	1.9	1.55
	2.25	1.7	1.45
	2.5	2.05	1.6
	2.3	2.0	1.6
	2.9	2.1	1.6
	2.7	2.0	1.6
	2.2	1.8	1.7
	2.6	2.1	1.85
	2.7	2.25	1.7
	2.4	1.9	1.6
	2.4	2.0	1.5
	2.2	2.0	1.6
	2.3	2.0	1.7
	2.15	2.8	1.25
	1.9	1.4	1.25
2.3	1.7	1.4	
2.1	1.6	1.5	
2.7	2.3	1.95	
2.2	2.15	1.7	
2.55	2.15	1.7	
2.5	2.0	1.5	

出土地区	高さ	幅	厚さ
2区ゴミ捨場	2.6	2.15	1.7
	2.35	2.0	1.6
	2.2	1.7	1.45
	2.5	1.85	1.6
	2.15	2.15	1.75
	2.6	2.4	1.9
	2.4	2.1	1.6
	2.6	2.3	1.75
	2.4	2.0	1.6
	2.4	2.05	1.5
	2.25	2.0	1.7
	2.6	2.3	1.95
	2.65	1.9	1.6
	2.35	2.0	1.7
	2.3	2.0	1.6
	2.2	1.7	1.3
	2.4	2.2	2.0
	2.2	1.9	1.55
	2.4	2.2	1.7
	2.2	2.05	1.6
	2.75	2.65	1.8
	2.05	1.9	1.6
	2.5	2.1	1.6
	2.25	2.0	1.4
	2.1	1.9	1.5
	2.25	2.05	1.75
	2.25	1.8	1.5
	2.2	1.9	1.55
	2.45	2.1	1.7
2.2	1.75	1.4	
2.25	1.95	1.5	
2.45	1.8	1.6	
2.35	2.05	1.6	
平 均 値	2.46	2.07	1.65

第2節 身洗沢遺跡におけるプラント・オパール分析

帝京大学山梨文化財研究所

外山秀一

1 はじめに

甲府盆地南東部の御坂山地の山麓沿いには、笛吹川支流の金川や天川、浅川などのつくる扇状地¹⁾が連続して分布する。御坂山地は、主に石英閃緑岩の分布地域であるが、風化しやすくそのため侵食も進み²⁾、斜面から涇流に流出した土砂は山麓部に堆積し扇状地を形成している。浅川と天川のつくるこうした扇状地の扇端部の標高270 m付近に、身洗沢遺跡は位置する。

この一帯は浅川・天川扇状地のスプリングラインといわれ、湧水量が豊富で、それらの下流域は湿田単作地帯となっている³⁾。またこうした地域には、断片的ではあるが、縦線が真北より約12°東偏する条里型土地割が残存している⁴⁾。

1988年度の試掘調査の際におこなったプラント・オパール分析の結果、弥生時代後期の遺物包含層ならびにそれより上位の地層からイネが検出され、当地域において稲作の営まれていた可能性が示唆された。

かかる事実を踏まえて、本稿では、3地点においてプラント・オパール分析を実施し、扇状地扇端部における土地条件の変化や稲作の問題などについて検討をおこなった。

2 地層の堆積状況と試料の採取

現地表面は、遺跡のほぼ南東から北西に向かって標高を減じる。また、当遺跡を南西から北東方向に切るトレンチ断面の観察では、埋没した中州や自然堤防状の微高地と溝状遺構や浅谷などの微凹地とが交互に確認され、起伏に富んだ地形となっている。微高地は砂礫層や砂層から構成され、また微凹地はそこに生育した植物の遺体と洪水砂によって充填されており、全般的に黒褐色や黒灰色を呈する。扇状地扇端部の断面の特徴を示しているといえよう。

ここでは、これらの微凹地の堆積物を対象とし、第1トレンチ(B地点・C地点)と第2トレンチ(A地点)の3地点(第II章第5図)において、プラント・オパール分析用の試料を採取した。試料は、基本的には、土壌層と考えられるa層については各層の上部より、b層については下部より、また層厚のある地層については上部と下部より採取した⁵⁾。

3 分析の方法

定量分析法による試料の処理は、藤原(1976)⁶⁾に基づき、絶対乾燥—重量測定・仮比重測定—ガラス・ビーズの混入—ホモジナイザーによる分散—ストークス法による細粒物質の除去—乾燥の順序でおこない、オイキット液によりプレパラートを作成した。プラント・オパールの分類学的検討は、400倍ないし600倍の偏光顕微鏡下で、主にイネ科の機動細胞プラント・オパールの形態分類に基づいておこなった。

そして、検出されたガラス・ビーズとプラント・オパールとの比率から、試料1gあたりの

プラント・オパールの数ならびに総数を求めた。さらに、イネ (*Oryza sativa*)、ヨシ属 (*Phragmites*)、ウシクサ族 (*Andropogoneae*) ならびにタケ亜科 (*Bambusoideae*) については、地上部全ての重さ (乾物重) を層厚 1 cm・面積 10 a あたりの検出量で示した。なお、タケ亜科の分類については、主に杉山・藤原 (1986)、杉山 (1987)⁷⁾ によった。

プラント・オパール分析の結果を、第57図の A (検出数) と B (検出量) に示す。

4 結 果

A 地 点

プラント・オパールの層位的産状に基づき、それらの群集帯を下位より a ~ c 帯に区分し、さらに a 帯を a₁ 帯と a₂ 帯、a₃ 帯、c 帯を c₁ 帯と c₂ 帯にそれぞれ細分した。

a 帯 (試料 8 ~ 12)

一般的にヨシ属の高出現に特徴づけられる。それは a₁ 帯 (試料 11・12) から a₂ 帯 (試料 10) にかけては減少傾向を示すが、a₃ 帯 (試料 8・9) になると増加する。

b 帯 (試料 5 ~ 7)

ヨシ属は減少するが、検出総数は上部の試料 5 と 6 で増加する。

c 帯 (試料 1 ~ 4)

c₁ 帯 (試料 4) でイネが検出され、c₂ 帯の試料 1 から 2 にかけて増加する。また、ヨシ属の増加にみられるように、その他のプラント・オパールも同様の傾向を示す。

B 地 点

プラント・オパール群集帯は下位より a 帯 ~ c 帯に分かれ、b 帯は b₁ 帯と b₂ 帯、c 帯は c₁ 帯と c₂ 帯に細分される。

a 帯 (試料 11)

一般的に検出量は少なく、ヨシ属が僅かに出現する。

b 帯 (試料 7 ~ 10)

b₁ 帯 (試料 9・10) ではヨシ属が増加し優占するが、b₂ 帯 (試料 7・8) になるとやや減少する。

c 帯 (試料 1 ~ 6)

c₁ 帯 (試料 4 ~ 6) ではヨシ属が再び増加傾向を示すとともに、検出総数も上部で増える。またイネが検出され、その後僅かに増加する。c₂ 帯 (試料 1 ~ 3) になるとヨシ属がやや減少する一方で、イネが増加傾向を示す。

C 地 点

プラント・オパール群集帯は下位より a 帯 ~ d 帯の 4 帯に区分され、さらに c 帯は c₁ 帯、c₂ 帯、c₃ 帯に細分される。

a 帯 (試料 14 ~ 16)

ヨシ属が優占するが、上部になるに従い減少傾向を示す。

b 帯 (試料 9 ~ 13)

仮比重は高い値を示すが、ヨシ属は減少し、またその他のプラント・オパールの検出数も少ない。

c 帯（試料 2～8）

ヨシ属が増加・急増し、再び優占する。すなわち、ヨシ属は c₁ 帯（試料 7・8）で増加し始め、c₂ 帯の試料 5 で急増する。また、ウシクサ族やタケ亜科が僅かながら増加傾向を示す。さらに、c₃ 帯の試料 3 ではこれらが一時的に減少するが、試料 2 で再び増加する。

d 帯（試料 1）

ヨシ属が急減し、イネが僅かながら検出される。

なお、棒状細胞の角状珪酸体は各地点ともにヨシ属のそれとほぼ同様の出現傾向を示すことから、それはヨシ属を始めとする湿地性の植物に起因するものと判断される。

5 考 察

3 地点の分析の結果は、前述した埋没微地形の分布や地層の堆積状況と密接な対応関係を示している。

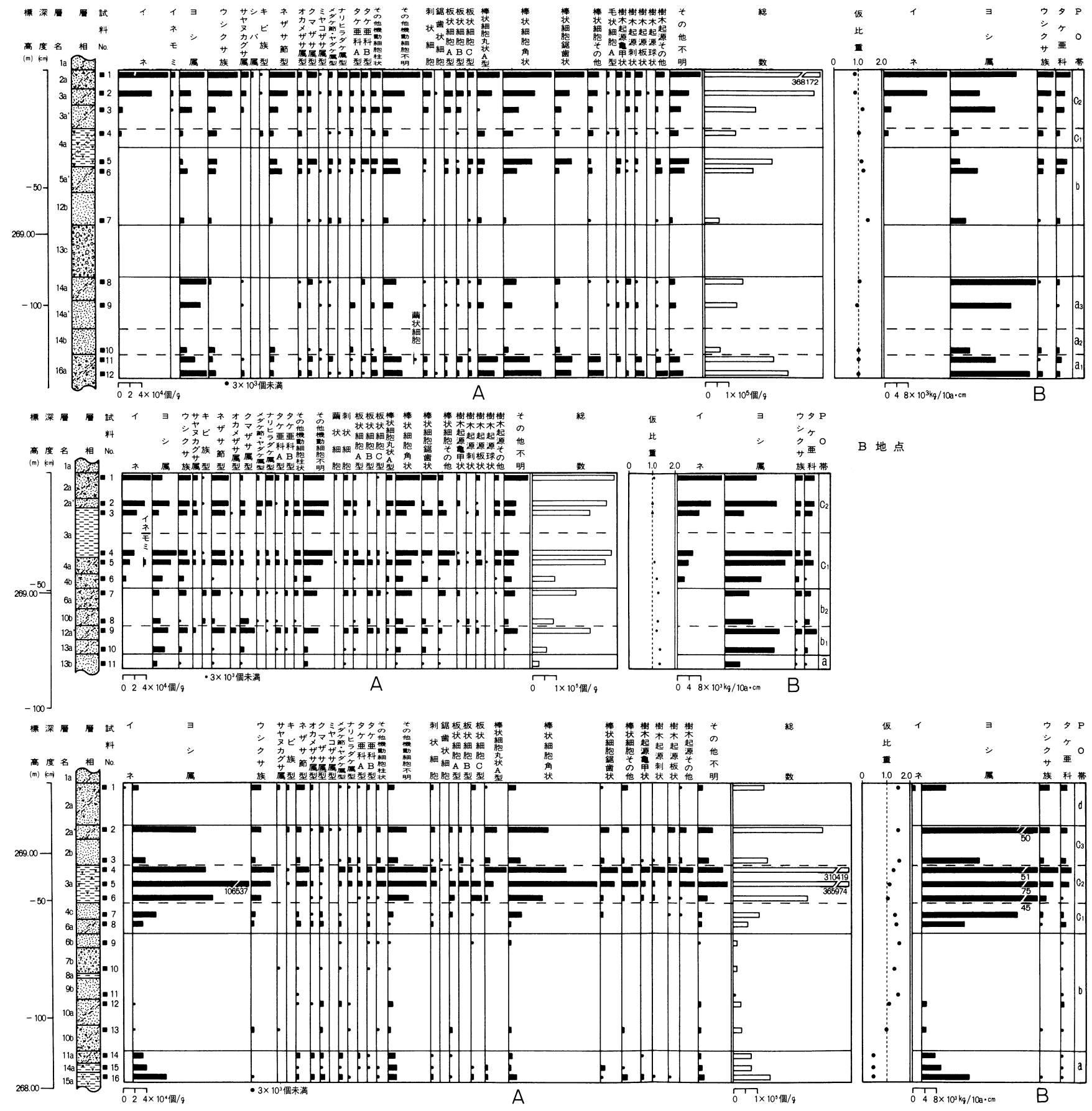
すなわち、微高地から北に緩く傾斜したところに位置する A 地点では、主に細砂と細礫や砂混じりのシルトで構成され、層相変化が著しい。また、12b 層と 13c 層、14b 層の堆積にみられるように、一時期不安定な状況のあったことが伺える。またプラント・オパール分析の結果も、ヨシ属の増減が示すように、層相変化に伴った出現傾向となっている。

B 地点は、その南と北に発達する微高地間の凹地を利用した溝状遺構にあたると考えられる。遺構は微高地を構成する砂層を掘り込んで形成されており、層相はシルトや細砂を主体とする。ヨシ属に代表されるように、B 地点付近では全層準を通して低湿な状況を推定することができる。また、上位の層準になるに従い検出総数が増加傾向を示すことから、比較的安定した環境のもとで遺構内は徐々に埋積されたようである。

A 地点と B 地点付近では、少なくとも 3 回の水田利用が確認されており、第 2・3 ステージの水田面からは人の足跡や土器片とともに、鍬や膝柄、エブリなどの農耕具の未製品や剣形の木製品などが出土している。なお、かかる土器片や近接する微高地上の住居址の時期から、第 2・3 ステージの水田址は弥生時代後期に比定されている。水田址は、微高地から続く緩傾斜地に営まれたものと考えられ、畦畔はその傾斜に対応して段差をもち、また溝状遺構にほぼ並行する。溝状遺構からはクルミやクリの殻、モモの種などが多量に出土する⁸⁾とともに、イネのプラント・オパールも多い。このことから、そこは食物や稲藁などの生活道具の残滓を廃棄するゴミ捨て場として利用された可能性が高い。

すなわち、当遺跡では、微高地上の住居址と溝状遺構内のゴミ捨て場、そして微高地から続く緩傾斜地に展開する水田址が近接して検出されたことになる。

C 地点は、微高地から谷への落ちかけの所と考えられ、堆積層は全体的にほぼ北に向かって深度を増す。a 帯層準は腐植土層で構成され、仮比重も 0.4 前後と低い。このことから、微凹地はヨシに代表される好湿性の植物が繁茂する安定した比較的低湿な環境にあったことが考えら



A 地点

B 地点

C 地点

第 57 図 プラント・オパール分析結果

れる。こうした腐植土層を覆って砂層が堆積し、仮比重の値は高くなるが、砂層中のプラント・オパールは極めて少ない。これは、かかる砂層が一時的に堆積して微高地を形成したことを示している。この砂層の上面を掘り込んで弥生時代後期の住居址が検出されていることから、その堆積時期は同期およびそれ以前とみなされる。その後、C地点は再びヨシ類の生育する低湿な環境となった。また、C地点におけるイネの検出は極めて少ない。こうした極端に低湿な環境は、イネの生育にとってはむしろ適していなかったといえよう。

6 おわりに —まとめにかえて—

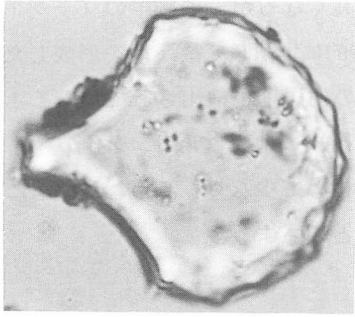
浅川・天川扇状地の扇端部に位値する身洗沢遺跡においておこなわれた地形と表層地質の観察では、中州や自然堤防状の微高地とそれらの間に分布する浅谷や溝状遺構などの微凹地が狭長に発達し、起伏に富んだ旧地形の存在が確認された。また、微凹地内の3地点の堆積物を対象としてプラント・オパール分析をおこなった結果、微凹地はヨシなどの繁茂する低湿な環境にありながらも、地層の堆積状況や人為的影響などにより、それぞれ異なった変化を示した。

また、発掘調査の結果、溝状遺構内からは多量の堅果類が出土し、かかる遺構をはさんで北には弥生時代後期の住居址が、南には同時期の水田址の存在が確認された。限られた発掘範囲にもかかわらず、当遺跡では北から居住域、生活物の廃棄場そして生産域が検出され、当時のムラの様子の一部とそこでの食生活の一端が浮き彫りにされた。当遺跡の成果は、扇状地扇端部における水稻農耕の開始期の実態と当時の土地利用の状況を探る指針となるであろう。

なお、紙面の都合により、本稿では当遺跡のプラント・オパール分析の結果についてその概要を述べるに留めた。当遺跡の立地環境については、稿を改めてさらに検討することにした。

註)

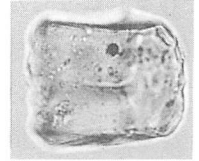
- 1) 中山・高木(1987)によると、こうした扇状地は周辺山地から本流河川に流入する支流沿いに発達し、山麓型扇状地とよばれる。京戸川扇状地の微地形分析から、当遺跡の位置する扇端部は下位扇状地に区分されている。中山正民・高木勇夫(1987)「微地形分析よりみた甲府盆地における扇状地の形成過程」東北地理39巻2号
- 2) 桂田 保(1975)「地形と地質」八代町誌編纂室『八代町誌 上巻』
- 3) 須田峯雄他(1975)「産業経済の変遷」前掲 2)
- 4) 須藤 賢・谷岡武雄(1951)「甲斐条里の諸問題—甲府盆地の歴史地理的研究(第1報)—」地理学評論 24巻4号
- 5) 地層の区分は、立命館大学の高橋 学氏による。
- 6) 藤原宏志(1976)「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—」考古学と自然科学 9号
- 7) 杉山真二・藤原宏志(1986)「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—」考古学と自然科学 19号
杉山真二(1987)「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」富士竹類植物園報告 31号
- 8) 山梨県埋蔵文化財センターの中山誠二氏と今福利恵氏のご教示による。



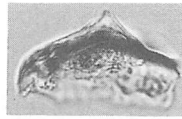
1



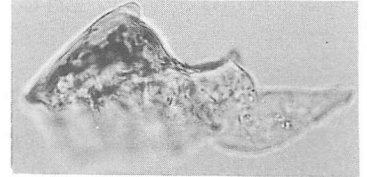
2



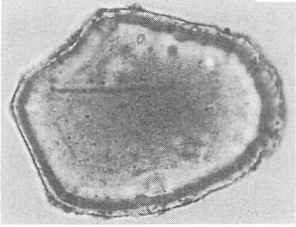
3



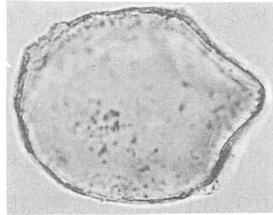
4



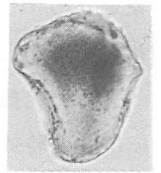
5



6



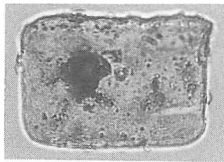
7



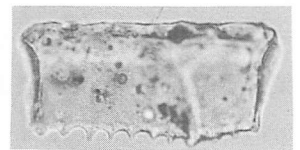
8



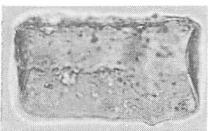
9



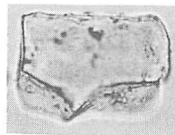
10



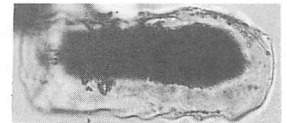
11



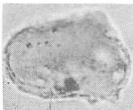
12



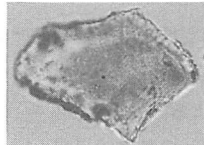
13



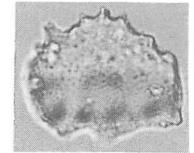
14



15



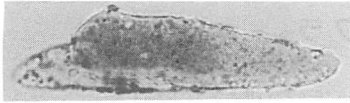
16



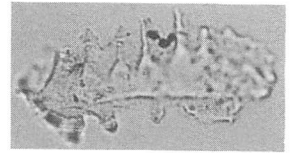
17

1. イネラ 2. イネシ 3. イネシ 4. モミガラ
 5. モミガラ 6. ヨシ 7. ヨシ 8. ウシクサ
 9. ウシクサ 10. キビ 11. キビ 12. キビ
 13. キビ 14. キビ 15. クマザサ 16. クマザサ
 17. 機動細胞不明 (1-600倍、その他200倍)

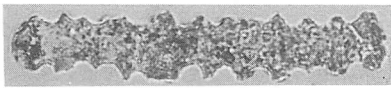
写真2 プラント・オパール



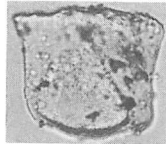
1



2



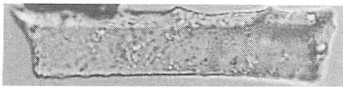
3



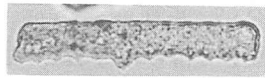
4



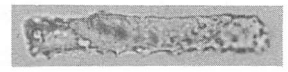
5



6



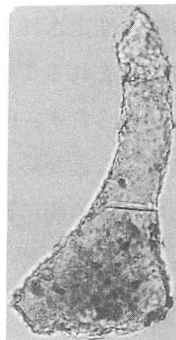
7



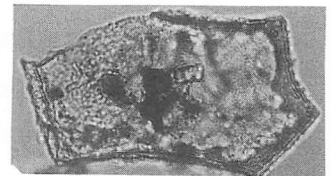
8



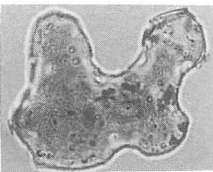
9



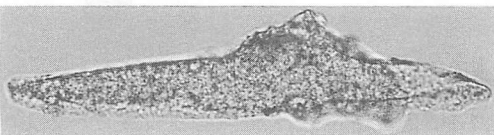
10



11



12



13



14

1. 刺状細胞 2. 鋸齒状細胞 3. 鋸齒状細胞 4. 板状細胞 A 型
 5. 棒状細胞丸状 A 型 6. 棒状細胞角状 7. 棒状細胞鋸齒状 8. 棒状細胞鋸齒状
 9. 棒状細胞その他 10. 毛状細胞 A 型 11. 樹木起源板状 12. 樹木起源その他
 13. その他不明 14. その他不明 (200倍)

写真3 プラント・オパール

第3節 身洗沢遺跡のテフラ

帝京大学山梨文化財研究所

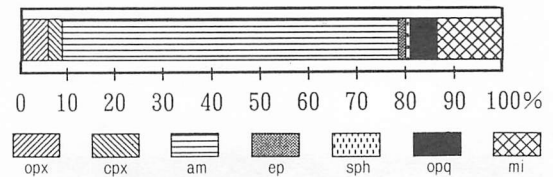
河 西 学

本遺跡1区東断面61層には赤色スコリア粒子の点在が上半部の約10cmの範囲に認められる。61層は、最下部の青灰色砂礫層の上に重なる約20cmの厚さの褐色砂質泥炭質粘土であり、弥生時代後期の遺物・遺構包含層よりも下位に位置する。

スコリアは、大部分が赤色スコリアから構成され、まれに赤紫色を呈するものも含まれる。また風化の著しいスコリアは黄褐色を呈する。ほとんどのスコリアはきわめてもろく、指で簡単につぶれるため外形をとどめて取り出せる粒子はまれである。粒径は2～5mmである。スコリアは、発泡やや良好～ふつう、柱状の斜長石を包有する。新鮮な割れ口では、スコリア壁の外側が赤色で内部は暗灰色を呈する。

スコリアの含まれる堆積物を水洗して得られた1/4～1/16mmの砂の重鉱物組成を第58図に示す。角閃石が70%と卓越し、雲母・不透明鉱物・斜方輝石・単斜輝石などがこれに続き、緑簾石・スフェーン・ジルコンなどが微量検出される。重鉱物以外では、長石・石英と花崗岩類岩片がきわめて多く含まれることから、角閃石をはじめほとんどの重鉱物は花崗岩類の碎屑物と考えられる。斜方輝石・単斜輝石はテフラ起源の粒子である可能性が考えられるが、壊れた結晶がほとんどであることから二次堆積物と推定される。

本スコリアは、この地域の沖積層中に含まれることから富士火山起源のテフラであると考えられる。しかし明確な堆積層としては認められず、61層上半部にまばらに点在し、赤色スコリア以外にテフラ起源の粒子が認められないことから、二次堆積テフラの疑いもある。だが、ある層準に濃集していることから降灰と堆積との間に極端な時間の開きはないものと推定される。詳細な対比については不明である。



第58図 スコリアを含む堆積物の重鉱物組成

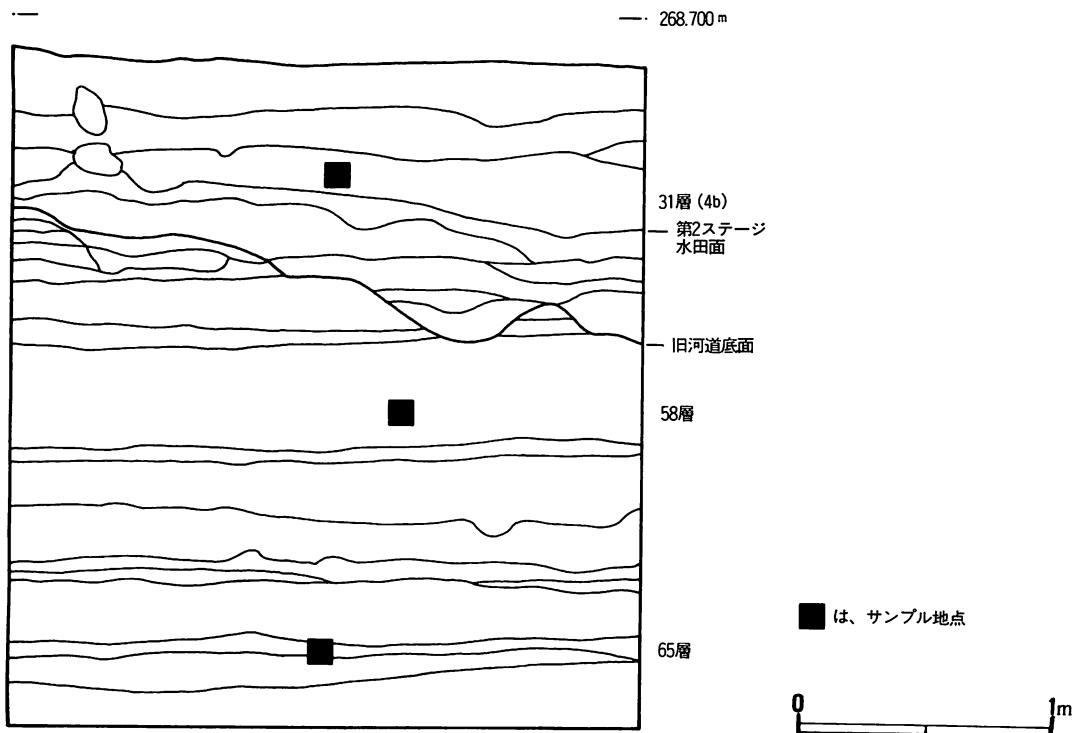
opx 斜方輝石 cpx 単斜輝石 am 角閃石 ep 緑簾石
sph スフェーン opq 不透明鉱物 mi 雲母

第4節 年代測定結果

身洗沢遺跡、1区谷および谷部の下層堆積土壌について、C-14年代測定を社団法人日本アイソトープ協会に依頼した。以下にその結果について報告する。

当方のコード (日本アイソトープ協会)	依頼者のコード	C-14年代
N-5693	1区谷No.467 第1ステージ 立木	3100 ± 80 y B. P. (3010 ± 80 y B. P.)
N-5694	1区谷No.464 第1ステージ (流木)	3550 ± 80 y B. P. (3440 ± 80 y B. P.)
N-5695	1区谷東壁セクション31層	2540 ± 80 y B. P. (2460 ± 75 y B. P.)
N-5696	1区谷東壁セクション65層	15800 ± 190 y B. P. (15400 ± 180 y B. P.)
N-5697	1区谷東壁セクション58層下	10900 ± 125 y B. P. (10600 ± 120 y B. P.)

年代は¹⁴Cの半減期5730年(カッコ内はLibbyの値5568年)にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数 (years B. P.) として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、¹⁴C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に広げますと確率は約95%となります。なお¹⁴C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。



第59図 1区東壁セクションとサンプル地点

第5節 身洗沢遺跡の地形環境

立命館大学 文学部

高橋 学

はじめに

甲府盆地における埋蔵文化財の調査が新しい段階を迎えつつある。今回報告する身洗沢遺跡の発掘調査によって、弥生時代に遡る水田遺跡が初めて確認されたのである。山梨県下においては、すでに中道遺跡出土の土器胎土をプラント・オパール分析した結果、弥生時代前期に稲作が行われていたことは確認されていたものの、水田址そのものの検出はできていなかった。

さて一般に、埋蔵文化財の調査は三つの段階を経て現在に至ったと考えられる。その第1は遺物のみが興味の対象になる段階、第2は現地表面で確認できる古墳や城址が調査される段階、そして第3に現地表面では容易に確認することの出来ない埋没遺構が検討される段階である。この第3段階は、さらに四つに細分できる。a) 個々の住居、墓などが注目され、その内部構造が検討される段階。b) 住居と住居の関係、墓と墓の関係などの構造が問題とされる段階。c) 居住域、墓域、生産域といった集落内構造が注目される段階。そしてd) 集落間関係が論及される段階。この様な観点に立つと、山梨県下の埋蔵文化財の調査は第3段階c)の状態が緒についたところと見ることができる。特に、遺物中心の段階では見過ごされがちな生産域が視角に入ってきたことは、埋蔵文化財調査の方法を大きく変えていく可能性がある。

ここで扱う地形環境分析は、第3段階c)、あるいはd)の調査を支援するために開発された分析方法である。地形環境分析は 10^5 年以上のタイムスケールから洪水や火山噴出物で地表面が埋没するたびごとといったレベルまでを対象にした環境復原の方法である。分析は5段階のサブシステムから構成されており、通常はより広い範囲を対象にした地形域分析から始め、より狭い範囲の細かな分析へと進められる。このうち地形帯分析までは、従来、地質学や地形学で行われてきた平野の調査法と大きな違いはない。この段階までで扱うことのできるのは、およそ 10^3 年スケールの現象であり、それより細かな現象を検討することは困難であった。すなわち、個々の発掘調査で考古学者から要求される期待に応えることはできないのである。この様な要望に応えるためには、さらに微地形環境や極微地形分析を実施することが必要なのである。微地形環境分析および極微地形分析の方法や祖点については、紙面の都合上、別稿を参考していただきたい(高橋学 1989a)。

笛吹川流域の地形域分析

身洗沢遺跡は甲府盆地の東南縁を流下する笛吹川の左岸に位置する(第60図参照)。身洗沢遺跡付近は、笛吹川の支流である浅川、金川の影響を直接受ける地域であるが、笛吹川の河況は、支流に大きな影響を持つと考えられることから、その流域を含めて検討を加えていきたい。

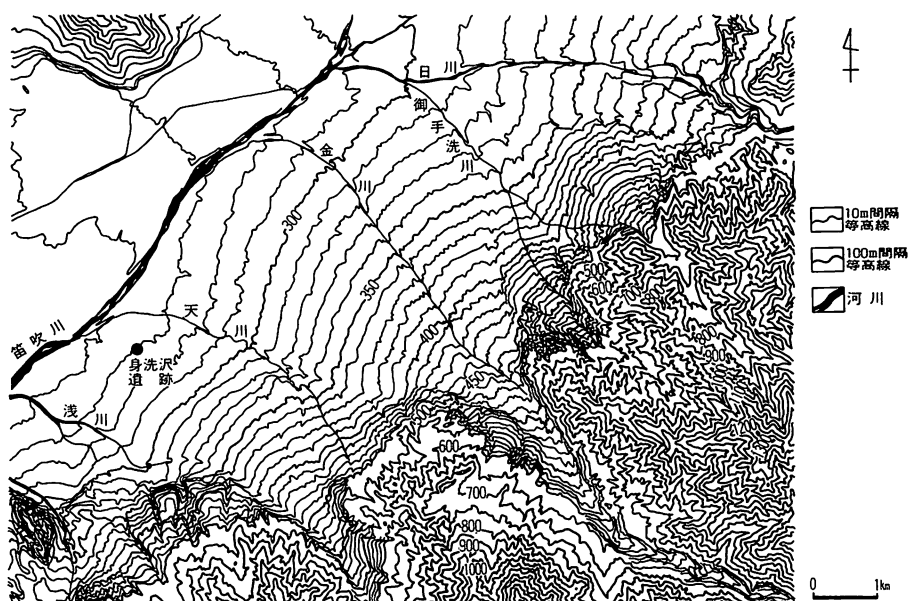
まず甲府盆地周辺を概観すると、この地域が極めて複雑な地質構造をしていることが指摘できる。すなわち、甲府盆地は、南に頂点を持つ逆三角形の概形をしているが、その西南縁は日

本列島最大の構造線であるフォッサマグナ（糸魚川—静岡構造線）にあたる。このため、南西にそびえる山々は西南日本内帯に属することになる。これに対し、北縁、東南縁は東北日本区に属し、全く地質が異なる。笛吹川は東北日本区の甲武信ヶ岳（標高2483m）と国師ヶ岳（標高2592m）に源を發し、南西に流下して、甲府盆地の南端で南東流してきた釜無川と合流し富士川となる。その長さは55 km、流域面積は1040 km²を測り、平均勾配はおよそ40/1000に達する。笛吹川は勾配の急な河川が多数を占めるわが国のなかでも、特に急流のカテゴリーに分類できる。

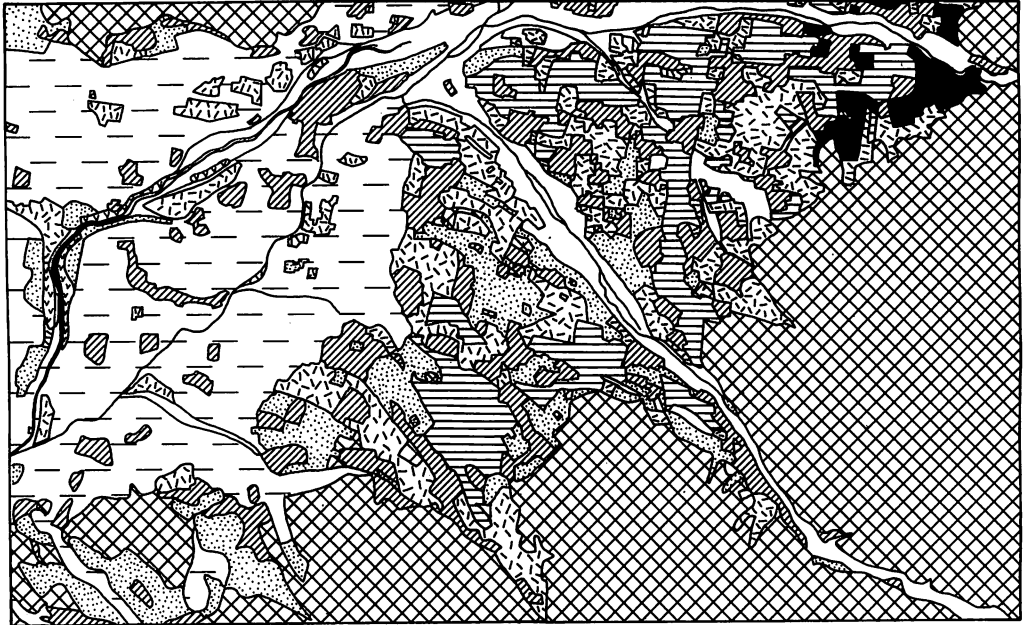
笛吹川左岸地域の地形面および地形帯環境分析

第60図は、笛吹川左岸の日川から曾根丘陵までの地域について、平野部10 m、山地部100 m間隔の等高線で起伏を示したものである。これによれば、笛吹川は支流の形成したより一層急な斜面の扇状地帯末端を南西流に流下している。しかし、笛吹川の現在の流路は、1907年にこの地域を襲った大洪水以前は、1 kmほど北西にある現在の平等川の流路となっていたのである。大洪水の後、笛吹川は洪水防止の目的で流路の変更が図られ、紆余曲折を経たのち、現在の位置（旧鶴飼川）に落ち着いたのである。現在の流路であれば、笛吹川の左岸には傾斜の急な支流性扇状地帯が迫っているため、河川は氾濫しにくく、洪水の恐れが高い右岸の堤防守ることに勢力が注げるわけである。

次に、支流性扇状地帯に注目すると、この地区の扇状地帯は、3つに大別できることに気付く。すなわち、京戸川や大石川などの形成した扇状地帯は、規模が小さく、傾斜が急である。これに対し、金川や浅川などが形成に関わった扇状地帯は、規模がやや大きく、傾斜も少し緩やかなのである。しかも、前者は河川が下刻し段丘化している。このため、堤防が必要ないのである。他方、後者は、現在でも洪水を起こし、土砂を堆積させる可能性があるため、人工的に堤防を造ることが必要な状態にある。また、これらの中間的な性格の地形が日川の流域に広



第60図 笛吹川右岸地域の等高線図



第61図 笛吹川左岸地域土地利用図 (明治20年代)

がっているのである。この地形は、段丘化しているものの、その規模は比較的大きく、傾斜も緩いのである。そこで、日川の流域の地形は、成因は金川等の扇状地帯と同じであるが、形成時期は京戸川や大石川の扇状地帯と同じと考えられる。ここでは、金川などの流域の地形を現氾濫原面・支流性扇状地帯、支流の金川は御坂峠（標高1596m）から流下し、身洗沢遺跡の北を流れる天川は、その旧流路のひとつと思われる。また、身洗沢遺跡の立地する扇状地帯の形成に直接関わった浅川は、御坂山地の釈迦ヶ岳（標高1474m）を源としている。金川の旧河道のひとつであった天川は、浅川の旧河道でもあった。

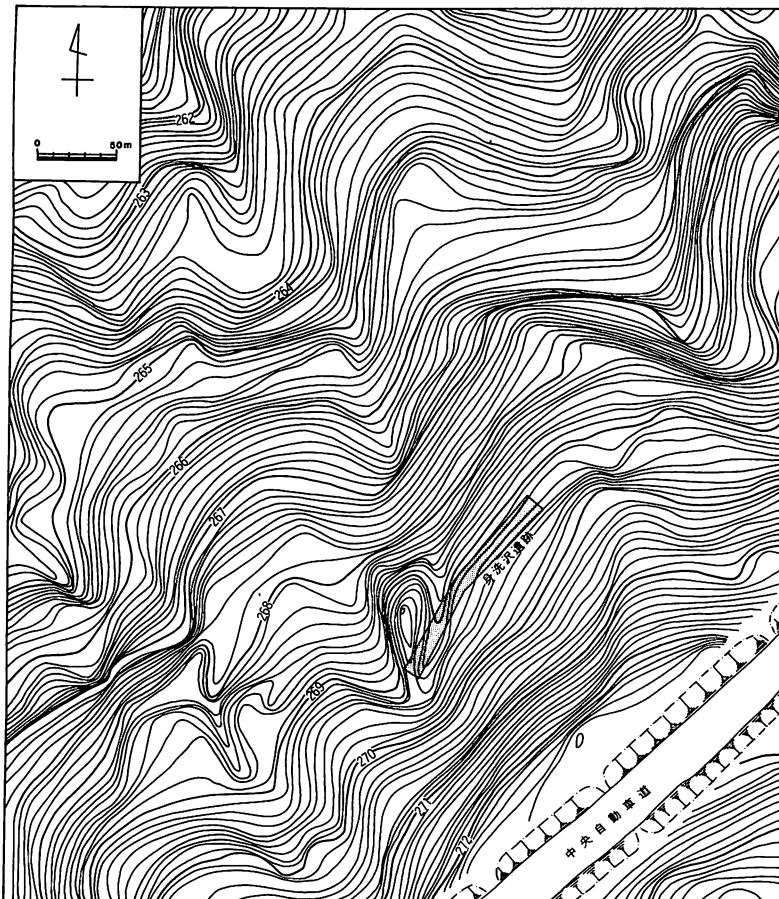
現在、この支流性扇状地帯の地域は、ほとんどがブドウ畠として土地利用されている。また、笛吹川の扇状地帯もブドウ畠として土地利用されているところが多い。しかし、このような状況になったのはさほど古いことではない。国土地理院発行のさまざまな時代の地形図を比較すると、土地利用が現在のような状況になったのは、1950年代後半から1960年代前半のことと思われる。それ以前、たとえば1894年頃には、笛吹川の形成した扇状地帯は、湿田が卓越している。（第61図）これに対して、金川、天川、浅川等の支流性扇状地帯においては、旧中洲などの微高地部分では、桑畠、普通畠が広い面積を占め、旧河道部分は乾田として土地利用されており、果樹園は極めて僅かな面積においてみとめられるに過ぎない。このような土地利用の差は、地形の様相を極めて良く反映していると言えよう。また、笛吹川本流および支流の形成した扇状地帯の末端付近は、条里型の水田区画が卓越しているが、標高300m付近より上流側は、地形の傾斜にあわせた土地区画となっている。扇状地帯の末端付近には自然湧水があり、これが条里型土地割の水田を潤している。この地域の条里型土地割については、須藤賢・谷岡武雄(1951)

や、高木勇夫（1985）の論考がある。しかし、これらはいずれも現存する条里型土地割に関するものであり、その起源を論じたり、現地表面下に埋没する水田址を検討することはなかった。

身洗沢遺跡周辺の微地形環境分析

次に、浅川の形成した扇状地帯のうち、身洗沢遺跡の位置する扇端付近の微地形環境について検討してみたい。扇状地帯は、微地形レベルで見ると、旧中洲と旧河道から形成されているのが一般的である。但し、河川の規模が小さい時には、このような構成をとらず、土石流に起因したローブ（舌状微高地）の集合帯であることもある。前者に属するものとしては、釜無川や笛吹川の形成した扇状地帯があげられる。他方、後者に属するものとして笛吹川の支流である京戸川の形成したものが知られている（高木勇夫、1985年）。ここでは、前者を扇状地帯、後者を土石流扇状地帯と呼ぶことにしたい。浅川の形成した扇状地帯の場合、中間的な性格を示すようである。すなわち、上流側は土石流扇状地帯の性格が強く、下流側では扇状地帯の様相が卓越するのである。

さて、第62図は、身洗沢遺跡周辺の微地形の状態を示すために作成した微地形図（10cm間隔等高線）である。微地形図には、土地利用、土地割、小字名や字界等に影響を与えている現地表面の微起伏の状況だけでなく、それらとほとんど関係のない埋没した微地形（以下埋没微地



第62図
身洗沢遺跡周辺微地形図
(10cm単位)

形と呼ぶ)も読み取ることができる。現地表面が低湿な水田になっているような場所であっても発掘調査を実施すると住居址や墓が検出されることがしばしばある。このような場合、住居址などは自然堤防や旧中洲といった微高地に立地していることがほとんどである。したがって、現在の微地形よりも埋没した微地形のほうが、遺跡の立地を考察するためには重要なことが多い。

第62図をみると、身洗沢遺跡の発掘地点は、中洲の南西斜面から旧河道にかけて行われたことが判る。中洲の規模は最大で、北西―南東方向およそ 500 m、北東―南西方向約 250 mを測る。そして、その中心は中央自動車道の敷地付近に位置している。集落立地の一般的傾向から判断すれば、今回の発掘調査した地点は、集落の北西端に近い所と言えよう。中洲の両側には旧河道が存在している。このうち中洲の南西側の旧河道は、さらに規模の小さな中洲を挟んでふたつに分れて流下していた。そして北側の流路が調査地点を横切っているのである。他方、中洲の北東側を流れていた旧河道は、規模が大きく、現在でもここには湧水が存在する。笛吹川左岸地域において、条里型の水田地割がみとめられる標高 300 m以下の範囲は傾斜が相対的に緩やかであるだけでなく、灌漑に必要な水が得やすいという点を見逃すわけにはいかない。

身洗沢遺跡の極微地形環境分析

次に、発掘調査域の地形環境と土地利用の関係について注目してみたい。

微地形環境分析によって調査区南西端の旧河道と推定されたところからは、近世に属すると考えられる溜池状遺構が検出された。また、その下層には古墳時代初頭の土器を敷き詰めた溝状の遺構(土器を芯にした畦畔の可能性が高い)が存在している。他方、その東に隣接した中洲状微高地部分には、同時期の小規模な建物(直径 3 m程)が焼失状態で発見された。中洲状微高地には、この建物以外にも多数の柱穴が検出されているが、上屋の構造を推定できるほど整然とした配置を見いだすことはできていない。この中洲状微高地の構成物を詳細に観察すると、成因の異なったふたつの単位に細分ができる。また、この単位は、中洲状微高地のわずかな起伏とも対応している。南西側の凸地部分は、シュートバー(chute bar)と呼ばれ、洪水の際に一気に形成される破堤地形が主体をなし、これを溢流堆積物で構成される自然堤防が薄く被覆していた。他方、北東側の凸地を構成するのは、(point bar)と分類されるもので、河川のカーブの内側に位置し、河川の増水ごとに成長する河床地形である。このポイントバーは、層相から北東に向かい徐々に成長したものと考えられる。このことから、ポイントバーの北東側には河川が流下しており、しかも徐々にカーブの曲率が増したことが判る。さて、前述した多数の柱穴に再度目を向けると、シュートバーとポイントバーの凸地に多く、その間の凹地部分には存在していないことに気づく。凹地部分には、水田耕土と判断される土壌層が分布しており、区画は明らかにできなかったものの水田として利用されていた可能性が高い。

また、ポイントバー構成物のうち、上層の一部を取り除いた段階で幅 4 m程の溝が検出された。この溝は、ポイントバーの最も高い凸地部分に掘削されており、灌漑機能を持っていたと推察される。溝を充填する堆積物中には、年代を示すような遺物は発見できなかったものの、多数の植物遺体を得ることができた。

ポイントバーを形成した河川の旧河道部分は、後背湿地化し有機物の集積が進むとともに水田として利用された。水田として認定したのは、人為的に攪拌された耕土、畦畔、水口、人の足跡、それに農具や土器が検出されていること、そしてプラント・オパール分析の結果による。地層の断面観察では水田は4面確認できたが、そのうち埋没深度の浅く調査区全面に広がる近世の水田面は、現地表面を工事用のトラック等が走行した際の轍で凸凹ができてしまい、検出は試みたものの、良好な成果をあげることができなかった。他方、埋没深度が深く、残存状態の良かった水田面は、旧河道部分のみに存在するもので、地形の起伏にあわせ小さく区画された「不定形小区画タイプ」に属する。水田が営まれていたのは、出土した遺物から弥生時代後期にあたる可能性が高い。また、前述したように、古墳時代においても、同様な水田が耕作されていた可能性が指摘できる。ただし、残念ながら、現在利用されている水路や道路部分の発掘が不可能であったため、条里型水田の起源について詳細に検討できるデータを得ることはできなかった。さて、調査区の北東端は砂礫で形成された中洲となっており、そこには弥生時代に属する2棟の竪穴住居址が確認された。微地形分析の結果からみると、この住居址群は集落の縁辺に位置すると判断され、その中心は中央高速道路の敷地付近に存在している可能性が高いと考えられる。すでに中央高速道路の敷地部分では、1980—81年に発掘調査が実施された俣ノ下遺跡があり、これと今回確認された竪穴住居址群との関係について今後検討を深めて行く必要がある。

おわりに

身洗沢遺跡の発掘調査の意義を地形環境分析の観点から位置付けると、次のようなことが指摘できよう。

- 1) 山梨県下で初めて水田遺跡の存在が確認されたこと。
- 2) 微地形と土地利用の間に密接な対応関係のあることが確かめられたこと。
- 3) 遅くとも弥生時代後期には、扇状地帯の旧河道部分に不定形小区画水田が営まれるようになったことが明らかにできたこと。
- 4) 古墳時代までは、比較的起伏に富んだ微地形をしていたが、その後、凹地部分の埋積が進んだことによって起伏の減少がみとめられたことが判明したこと。
- 5) 地質学的にみた東北日本の内陸盆地でありながら、西南日本の瀬戸内海沿岸の平野で確認されていた地形環境の変化モデル（高橋 1989）と良く適合すること。

なお、今後、山梨県下では平野部における発掘調査が急速に増加することが予想され、身洗沢遺跡の調査経験を活かして、より詳細な分析が各地域で進展することを期待したい。

註

- 1) 谷の中の湧水であるため、下流側の地域を潤すことしかできない。また、湧水は水温が低いためそのまま灌漑用水として用いるわけにはいかない。いわゆる「ぬるめ」が必要なのである。このふたつの理由により、灌漑できる範囲が限定される。

参 考 文 献

- 須藤 賢・谷岡武雄（1951）甲斐国条里の諸問題 地理学評論24—4
- 高木勇夫（1985）「条里地域の自然環境」古今書院
- 高橋 学（1989 a）埋没水田遺構の地形環境分析 第四紀研究27—4
- 高橋 学（1989 b）播磨灘沿岸地域の地形環境と土地開発 「播磨考古論叢」今里幾次先生 古稀記念論集編集委員会

表3 木器観察表

番号	名称	出土場所	長×幅×厚(cm)	形態・加工	時代
1	柱材	1号住居址	25.1×φ6.0、φ8.8	上半腐蝕。丸木を削り、根部を太くする。	弥生後期
2	柱材	2号住居址	73.6×17.5×4.7	上半腐蝕。板材を加工。全面にはつりが残る。	弥生後期
3	エブリ	水田址	46.4×17.5×4.3	未製品。全面に加工痕。中央上部厚い。	弥生後期
4	クワ	水田址	80.6×16.0×1.2	未製品。加工痕不明瞭。	弥生後期
5	膝柄	水田址	136.0×φ2.8	くわ装着部は平坦。付根に縛るためのえぐり。	弥生後期
6	又くわ	水田址	28.7×2.6×1.4~1.7	歯の部分のみ、他欠損。	弥生後期
7	剣	水田址	38.0×3.1×0.6~1.5	把手の一部欠損。断面はレンズ状。	弥生後期
8	又くわ	水田址	19.4×7.5×3.4	4本歯で1本欠損。全面的加工痕は不明瞭。	弥生後期
9	皮綴部材	水田址	23.0×3.0×1.3	赤彩。桜皮綴。ほぞ穴で組まれ、めくぎ止め。	弥生後期
10	部材	水田址	74.7×4.1×3.7	一端欠損。先端に溝。加工痕は先端部に顕著。	弥生後期
11	部材	水田址	12.8×3.4×2.3	先端にV字形の刻み。一端は焼かれて炭化。	弥生後期
12	部材	水田址	6.8×3.3×2.7	先端のみ他欠損。溝が掘られ、以下くびれる。	弥生後期
13	部材	水田址	18.4×4.6×4.8	側縁に圧迫されたへこみ、皮の緊縛痕。	弥生後期
14	加工材	水田址	6.8×2.8×2.1	一端欠損。角材で、先端を両面より加工。	弥生後期
15	加工材	水田址	16.3×4.2×1.6-2.5	一端欠損。角材で、先端を両面から斜めに加工。	弥生後期
16	加工材	水田址	6.5×7.2×3.6	一端欠損。先端は片面より加工。加工前に焼き。	弥生後期
17	加工材	水田址	26.2×2.6×1.7	一端欠損。先端はくびれ、柄頭状となる。	弥生後期
18	加工材	水田址	37.1×2.9×1.0	表面、両側面に加工痕、裏面にはない。	弥生後期
19	加工材	水田址	7.6×φ2.2~3.6	中心くり抜かれソケット状。両端炭化。	弥生後期
20	加工材	水田址	20.1×8.9×2.3	一部欠損。中央部に斜めのえぐり。	弥生後期
21	板目板	水田址	4.7×6.7×1.1	上半腐蝕。焼かれている可能性あり。	弥生後期
22	杭	水田址	22.8×φ3.5	一端腐蝕。先端は両面より加工。	弥生後期
23	加工材	水田址	14.6×1.9×2.7	上面は両端に向って細くなるよう加工。	弥生後期
24	加工材	水田址	10.8×φ3.1	杭？。両端は直交するよう両面より加工。	弥生後期
25	割材	水田址	35.1×15.4×1.5	明瞭な工具痕はみられない。	弥生後期
26	割材	水田址	35.8×5.5×1.8	先端部炭化。	弥生後期
27	割材	水田址	55.4×1.5×0.8	断面はヒョウタン形に近い。成形痕なし。	弥生後期
28	割材	水田址	16.8×8.7×5.5	先端部炭化。	弥生後期
29	丸木材	水田址	36.3×φ3.5	両端欠損。表面にわずかの平坦面。	弥生後期
30	丸木材	水田址	30.5×φ2.8	一端炭化。枝の部分を切り落としている。	弥生後期
31	割材	水田址	58.4×4.5×4.0	工具痕はみられない。	弥生後期
32	割材	水田址	20.6×1.7×1.3	腐蝕著しい。工具痕はみられない。	弥生後期
33	割材	水田址	20.5×1.9×1.4	工具痕はみられない。	弥生後期
34	割材	33号ピット	40.2×3.5×3.5	上面、両側面に加工痕。裏面に僅かな工具痕。	古墳初頭
35	柱材	40号ピット	41.7×φ4.5	杭？。枝を切り落している。腐蝕顕著。	古墳初頭
36	割材	34号ピット	40.1×3.3×3.9	側面炭化。工具痕なし。	古墳初頭
37	柱材	63号ピット	35.5×φ5.2	杭？。一端欠損。先端両面より加工。	古墳初頭
38	柱材	67号ピット	36.1×φ5.2	杭？。一端欠損。枝を切り落とし。先端両面加工。	古墳初頭
39	割材	65号ピット	14.4×3.1×1.7	両側面の表面炭化。	古墳初頭
40	加工材	65号ピット	21.2×15.3×14.8	上半腐蝕。全面にはつり。	古墳初頭
41	加工材	65号ピット	23.1×2.3×1.3	両端欠損。三面のみ整形。裏面は割ったまま。	古墳初頭
42	板目板	65号ピット	48.0×11.6×2.5	表面にはつり。側面整形。裏面は割ったまま。	古墳初頭
43	杭	B-6グリッド	12.7×φ4.8	上半腐蝕。先端は片側より加工。	古墳初頭？
44	杭	B-6グリッド	13.6×φ4.7	上半腐蝕。先端は周囲より加工。	古墳初頭？
45	不明木製品	B-2グリッド	22.6×6.8×0.5~0.9	半分欠損。中央に円形と長方形の透孔。	古墳初頭？
46	加工材	B-3グリッド	19.6×4.1×3.1	両端欠損。丸木材で平坦面に擦痕。	古墳初頭？
47	板目板	溜池状遺構	28.4×10.8×1.7	上半欠損。全面整形。斜方向の工具痕。	近世
48	柱目板	溜池状遺構	16.6×4.6×1.6	両端、一側縁欠損。表面整形、裏面腐蝕。	近世

表4 身洗沢出土土器観察表

1号住 (第10・11図)

番号	器形	法量 (cm)			調整	文様	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
11	甕	—	—	8.8	ハケ後 ヘラケズリ	櫛描波状	長石・石英 雲母	良	暗褐	
12	甕	—	8.0	—	ハケ		長石・石英 雲母	良	茶褐	
18	甕				内面ハケ		長石 石英	良	暗褐	
19	甕				ハケ		長石	良	暗褐	
20	甕				ハケ		長石	良	暗褐	
21	甕				ハケ	櫛描波状文	長石	良	淡褐	
22	甕				ハケ	廉状文	石英	良	淡褐	
23	甕					櫛描波状文	長石 雲母	良	淡褐	
24	甕					櫛描波状文	長石 雲母	良	淡褐	
25	甕					櫛描波状文	長石 雲母	良	淡褐	
26	甕					櫛描波状文	長石 雲母	良	淡褐	

2号住 (第11図)

番号	器形	法量 (cm)			調整	文様	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
27	甕				口唇 刻目 ハケ		長石	良	灰褐	
28	甕				ハケ		長石	良	黒褐	

竪穴状遺構 (第10・11図)

番号	器形	法量 (cm)			調整	文様	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
13	甕	16.4	—	—	ハケ 内面指ナデ		長石・石英 雲母	良		S字状口縁
14	壺	—	6	(12.5)	ハケ+ヘラケズリ (内) ハケ		長石	良	淡褐	
15	甕	20.0	—	—	ハケ		石英 長石	良	茶褐	S字状口縁
16	壺	—	7	—	ハケ		長石	良	灰褐	
17	台付甕	—	9.4	—	ハケ		長石	良	灰褐	
29	壺					口縁クシ刺突	長石	良	淡褐	折り返し口縁
30	甕				ハケ		雲母	良	淡褐	S字状口縁

1区 谷部 (第16~21図)

番号	器形	法量 (cm)			調整	文様	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
39	甕	17.5	—	(19.0)	口唇 刻目 ハケ		石英 長石	良	暗灰褐	谷部
40	甕	12.0	—	(6.0)	口唇 刻目 ハケ		雲母 長石	良	茶 褐	谷部第2ステージ
41	甕	14.0	—	(7.0)	口唇 刻目 ハケ		石英 長石	良	茶 褐	谷部
42	甕	14.4	—	(4.0)	ハケ		長石 雲母	良	黒 褐	谷部第2ステージ
43	甕	12.6	—	(4.0)			長石	良	黒 褐	谷部
44	甕	20.4	—	(5.0)	ハケ		石英 長石	良	淡 褐	谷部第2ステージ
45	甕	14.6	—	(7.4)		櫛描波状文	長石	良	暗 褐	谷部
46	甕	19.0	—	(6.0)	ハケ		石英	良	淡 褐	谷部第2ステージ
47	台付甕脚				ハケ		長石 石英	良	灰 褐	谷部第2ステージ
48	甕	24.2	—	(5.4)			長石	良	灰 褐	谷部
49	台付甕脚				ハケ		長石	良	灰 褐	谷部第2ステージ
50	台付甕脚				ハケ		長石	良	灰 褐	谷部第2ステージ
51	台付甕脚				ヘラケズリ		長石	良	黒 褐	谷部第2ステージ
52	台付甕脚				ハケ		長石	良	淡 褐	谷部第2ステージ
53	台付甕脚	—	8.0	—	ヘラケズリ + ハケ		長石	良	暗 褐	谷部
54	台付甕脚	—	8.0	—	ハケ		長石 雲母	良	暗 褐	谷部
55	台付甕脚	—	8.6	—	ヘラケズリ		石英 長石	良	淡 褐	谷部第2ステージ
56	壺	8.2	—	(6.2)	ヘラケズリ		長石	良	茶 褐	谷部
57	壺	9.0	—	(6.8)	ハケ ヘラケズリ		長石	良	淡 褐	谷部
58	壺	—	—	(14.0)	ハケ ヘラケズリ	赤 彩		良	淡 褐	谷部第2ステージ
59	甕	10.2	—	—			長石	良	黒 褐	谷部
60	壺	18.6	—	—	折り返し口縁 ヘラケズリ		長石	良	灰 褐	谷部
61	壺	19.0	—	—	2重口縁	棒状浮文	長石 石英	良	灰 色	谷部
62	壺	17.0	—	—	折り返し口縁 ヘラケズリ		長石 石英	良	灰 褐	谷部
63	壺	18.0	—	—	折り返し口縁 ヘラケズリ		長石 石英	良	灰 褐	谷部第2ステージ

番号	器形	法 量 (cm)			調 整	文 様	胎土	焼成	色調	備 考
		口径	底径	高さ						
64	壺	19.0	—	—	折り返し口縁 ヘラケズリ		長石 石英	良	灰 褐	谷部第2ステージ
65	壺					ボタン状貼付 羽状クシ齒	雲母 長石	良	灰 褐	微高地上 3号溝
66	壺	—	6.3	—	(内) ハケ		長石	良	灰 褐	谷部
67	壺	—	7.5	—	ハケ		長石	良	黒 褐	谷部
68	壺	—	7.0	—	ハケ ヘラケズリ		石英	良	灰 褐	谷部
69	壺	—	10.6	—	ヘラケズリ (内) ハケ、ヘラ		長石 赤色粒子	良	淡 褐	微高地上 3号溝
70	鉢	9.9	4.0	5.5	ハケ		長石	良	暗 褐	谷部第2ステージ
71	鉢	9.4	5.5	5.0	ハケ		長石	良	暗 褐	谷部第2ステージ
72	高坏					赤彩	長石	良	赤 褐	谷部
73	高坏				ミガキ	赤彩	石英 長石	良	赤 褐	谷部
74	甕 or 壺	—	7.0	11.5	指頭による調整 (内) ヘラ		長石	良	灰 褐	谷部
75	甕	—	5.5	—			長石	良	灰 褐	谷部
76	甕 or 壺	—	5.5	—			長石 雲母	良	暗 褐	谷部第2ステージ
77	甕	—	6.1	—	ハケ		長石	良	暗 褐	
78	蓋	17	—	8.2			長石	良	黒 褐	内面スス付着 谷部第2ステージ
79	高坏	21.5	—	5	ミガキ		長石 石英	良	淡 褐	
80	壺	—	5.5	—	ハケ (内) ヘラケズリ		長石 石英	良	暗 褐	
81	高坏				ヘラケズリ		長石 石英	良	淡 褐	微高地上
82	甕				口縁部ナデ	櫛描波状文	長石	良	淡 褐	
83	甕					櫛描波状文		良	淡 褐	
84	甕					櫛描波状文	長石 雲母	良	暗 褐	
85	甕					櫛描波状文	長石	良	暗 褐	微高地上 B-26G
86	甕				口縁部ナデ	櫛描波状文	長石	良	暗 褐	谷部
87	甕				ハケ	櫛描波状文	長石	良	茶 褐	2区谷部
88	甕				口縁部ナデ	櫛描波状文	長石 石英	良	淡 褐	谷部第2ステージ
89	甕					櫛描波状文	長石	良	暗 褐	2区 B-20G

番号	器形	法量 (cm)			調整	文様	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
90	甕					櫛描波状文	長石	良	淡 褐	谷部
91	甕					櫛描波状文	石英	良	淡 褐	谷部
92	甕					櫛描波状文	石英	良	暗 褐	
93	甕				(内) ハケ	櫛描波状文	石英	良	暗 褐	谷部第2ステージ
94	甕				口縁部ナデ	櫛描波状文	長石	良	暗 褐	谷部
95	甕				口縁部ナデ	櫛描波状文	長石	良	暗 褐	谷部第2ステージ
96	甕					櫛描波状文 廉 状 文	長石	良	暗 褐	谷部
97	甕					櫛描波状文 廉 状 文	長石	良	灰 褐	谷部
98	甕					櫛描波状文 廉 状 文	石英 雲母	良	淡 褐	谷部第2ステージ
99	甕					櫛描波状文	長石	良	茶 褐	谷部
100	甕					櫛描波状文	長石	良	淡 褐	微高地上
101	甕					櫛描波状文	石英	良	淡 褐	微高地上
102	甕					櫛描波状文	長石	良	淡 褐	微高地上
103	甕					櫛描波状文	長石	良	淡 褐	
104	甕					櫛描波状文	長石	良	茶 褐	
105	甕					櫛描波状文		良	暗 褐	
106	甕					櫛描波状文	赤色粒子 雲母	良	淡茶褐	
107	甕					櫛描波状文	石英	良	黒 色	
108	甕					櫛描波状文	石英 長石	良	灰 色	谷部
109	甕					櫛描波状文		良	黒褐色	谷部第2ステージ
110	甕					櫛描波状文	長石	良	暗 褐	谷部
111	甕				(内) ハケ	櫛描波状文	長石 石英	良	暗 褐	
112	甕					櫛描波状文	長石	良	黒 褐	谷部
113	甕					櫛描波状文	長石	良	黒 褐	谷部第2ステージ
114	甕					櫛描波状文	長石	良	黒 褐	谷部第2ステージ
115	甕					櫛描波状文	長石	良	黒 褐	微高地上 B-26G

番号	器形	法 量 (cm)			調 整	文 様	胎土	焼成	色調	備 考
		口径	底径	高さ						
116	甕					櫛描波状文	長石	良	暗 褐	微高地上 B-26G
117	甕					櫛描波状文	石英 長石	良	暗 褐	谷部第2ステージ
118	甕					櫛描波状文	石英 長石	良	暗 褐	谷部第2ステージ
119	甕					櫛描波状文	石英 長石	良	暗 褐	谷部
120	甕					櫛描波状文		良		谷部
121	甕					櫛描波状文	長石	良	淡 褐	微高地上 3号溝
122	壺					赤 彩 櫛描波状文	長石	良	淡 褐	
123	甕					櫛描波状文	長石	良	暗 褐	谷部第2ステージ
124	甕					櫛描波状文		良	暗 褐	谷部
125	甕					櫛描波状文	長石	良	暗 褐	谷部
126	甕					櫛描波状文	石英 長石	良	茶 褐	谷部
127	壺					赤 彩 櫛描波状文	長石 石英	良	淡 褐	谷部
128	壺				(内) ハケ	櫛描波状文		良	暗 褐	谷部第2ステージ
129	壺				(内) ハケ	櫛描波状文	長石	良	暗 褐	谷部第2ステージ
130	壺					櫛描波状文	長石	良	暗 褐	2区谷部
131	壺				ハケ	櫛描波状文	長石	良	灰 褐	2区谷部
132	壺				ハケ	縦列沈線	長石	良	淡茶褐	
133	壺					クシによる 羽 状 文	石英	良	淡 褐	谷部第2ステージ
134	壺					クシによる 羽 状 文	石英	良	淡 褐	谷部
135	壺					R L 縄文	長石 石英	良	淡 褐	谷部
136	壺					L R 縄文	長石	良	淡 褐	谷部
137	壺					L R 縄文	長石 石英	良	淡 褐	谷部第2ステージ
138	壺					縄 文	長石	良	暗褐 ~黒褐	谷部
139	壺				ハケ	ボタン状貼付	長石	良	淡 褐	
140	壺				ハケ	ボタン状貼付	石英 雲母	良	暗 褐	微高地上
141	壺					ボタン状貼付 擬似縄文	雲母	良	淡 褐	微高地上

番号	器形	法量 (cm)			調整	文様	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
142	壺				ミガキ		長石	良	茶 褐	微高地上 3号溝
143	甕				ハケ		長石	良	暗 褐	微高地上
144	甕				ハケ		長石	良	淡 褐	谷部
145	甕				口縁刻目 (内)ハケ		長石	良	暗 褐	谷部
146	甕				口縁刻目 (内)ハケ		長石	良	茶 褐	谷部第2ステージ
147	甕				口縁刻目 (内)ハケ		長石	良	暗 褐	谷部
148	甕				口縁刻目 (内)ハケ		長石	良	黒 褐	谷部第2ステージ
149	甕				口縁刻目		石英	良	茶 褐	微高地上 B-26G
150	甕				口縁刻目 ナデ		長石	良	暗 褐	谷部
151	甕				口縁刻目 ハケ			良	黒 灰	谷部
152	甕				口縁刻目 ハケ		長石	良	暗 褐	微高地上 B-26G
153	甕				ハケ		長石	良	暗 褐	微高地上 B-26G
154	甕				ハケ		長石	良	黒 褐	微高地上 B-26G
155	甕				ハケ		長石	良	淡 褐	谷部
156	甕				ハケ			良	淡 褐	谷部

2区 (第22・23図)

番号	器形	法量 (cm)			調整	文様	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
157	壺	27.2	—	—		赤彩	長石	良	赤褐色	谷部
158	壺	23.0	—	—	ハケ ヘラケズリ		長石	良	淡褐色	谷部第5ステージ
159	壺	—	5.5	(11.0)	ハケ ヘラケズリ		長石	良	淡褐色	谷部
160	壺	—	5.5	—	ヘラケズリ		石英	良	茶 褐	谷部
161	壺						長石	良	淡 褐	谷部第5ステージ
162	甕	20.7	—	(12.5)	ハケ (内)ヘラケズリ		長石	良	淡 褐	谷部第5ステージ
163	甕	22.5	—	—	口縁刻目 ハケ		長石	良	暗 褐	谷部第5ステージ
164	甕	13.2	6.0	10.8	口縁刻目 ハケ		長石	良	暗 褐	谷部第5ステージ
165	甕	11.0	—	—	口縁刻目 ハケ		長石	良	暗 褐	谷部第5ステージ

番号	器形	法 量 (cm)			調 整	文 様	胎土	焼成	色調	備 考
		口径	底径	高さ						
166	甕	14.8	—	—	S字状口縁 ハケ		長石	良	暗 褐	谷部第5ステージ
167	甕	13.2	5	10.5	ハケ ヘラケズリ		赤色粒子 石英	良	淡 褐	谷部第5ステージ 北 陸 系
168	高坏	11.6	—	(4.4)	ハケ ミガキ	赤彩	長石 石英	良	赤 褐	谷部第5ステージ
169	高坏	18	—	—	ミガキ		長石	良	茶 褐	谷部第5ステージ
170	器台				ミガキ (内)ハケ		長石	良	暗 褐	谷部第5ステージ
171	高坏	—	10	—	(内)ハケ		長石	良	暗 褐	谷部第5ステージ
172	高坏				ヘラケズリ		石英 長石	良	茶 褐	谷部第5ステージ
173	高坏						石英 長石	良	淡 褐	谷部
174	高坏				ヘラケズリ					谷部
175	壺or甕		7.7	—	ハケ		長石 石英	良	暗 褐	谷部第5ステージ
176	壺or甕	—	5.7	—	ハケ		長石 石英	良	暗 褐	谷部
177	小型壺	—	4.7	—	ハケ		長石 石英	良	暗 褐	谷部第5ステージ
178	台付甕脚	—	7.5	—	ハケ ヘラケズリ		長石 雲母	良	暗 褐	B-20 Gr
179	台付甕脚	—	9.0	—	ハケ ヘラケズリ		長石	良	茶 褐	谷部
180	台付甕脚	—	11.7	—	ハケ		長石	良	暗 褐	谷部
181	甌	—	5.0	—	ハケ		長石	良	淡 褐	谷部
182	甌	—	5.5	—				良	暗 褐	谷部

4 区 溝状遺構 (第32~35図)

番号	器形	法 量 (cm)			調 整	文 様	胎土	焼成	色調	備 考
		口径	底径	高さ						
183	甕	(18.5)	—	—	ナデ		長石	良	淡 褐	単純口縁
184	甕	(18.4)	—	—	ハケ			良	暗 褐	単純口縁
185	甕	(19.9)	—	—	ナデ ハケ		長石 石英	良	淡 褐	単純口縁
186	甕	(13.5)	—	—	ハケ			良		単純口縁
187	甕	(11.0)	—	—	ハケ		長石	良	淡 褐	単純口縁
188	甕	(18.0)	—	—	口縁刻目 ハケ		長石	良	淡 褐	
189	甕	(10.0)	—	—	ハケ					単純口縁

番号	器形	法 量 (cm)			調 整	文 様	胎土	焼成	色調	備 考
		口径	底径	高さ						
190	甕	(14.2)	—	—	ハケ		長石	良	黒 褐	単純口縁
191	甕	(11.6)	—	—	ナデ ハケ		石英	良	黒 褐	単純口縁
192	甕	(20.0)	—	—	ハケ		長石 石英	良	黒 褐	有段口縁
193	甕	(8.0)	—	—	ハケ			良	暗 褐	単純口縁
194	甕	(7.6)	—	—	ハケ			良	灰 褐	S字状口縁
195	甕	(10.1)	—	—	ハケ		石英 雲母	良	暗 褐	S字状口縁
196	甕	(9.2)	—	—	ハケ			良	暗 褐	S字状口縁
197	甕	(10.1)	—	—	ハケ		石英	良	暗 褐	S字状口縁
198	甕	(15.3)	—	—	ハケ		石英	良	淡 褐	S字状口縁
199	甕	(15.4)	—	—	ハケ		長石 石英	良	暗 褐	北陸系 (?)
200	甕	(15.6)	—	—	ナデ ハケ		長石 石英	良	茶 褐	北陸系
201	甕	(15.0)	—	—			石英 雲母	良	暗 褐	S字状口縁
202	台付甕	(17.2)	—	—	ナデ ハケ		石英	良	淡 褐	
203	台付甕	—	7.7	—	ハケ		長石	良	暗 褐	
204	台付甕				ハケ		長石	良	暗 褐	
205	台付甕				ハケ ヘラケズリ		石英	良	暗 褐	
206	台付甕				ハケ		長石	良	茶 褐	
207	台付甕	—	7.7	—	ハケ		長石 石英	良	暗 褐	
208	器台	—	7.6	—	ミガキ	赤彩	長石	良	赤 褐	
209	器台	—	9.1	—		赤彩	長石	良	赤 褐	
210	器台	—	8.8	—	ミガキ		石英	良	淡 褐	
211	器台				ハケ		長石	良	淡 褐	脚部有孔
212	器台				ヘラケズリ		長石 石英	良	茶 褐	脚部有孔
213	器台				ミガキ		長石	良	茶 褐	
214	器台				ヘラケズリ		石英	良	灰 褐	
215	罎	14.6	—	(8.6)	ハケ ヘラケズリ		長石 石英	良	暗 褐	

番号	器形	法 量 (cm)			調 整	文 様	胎土	焼成	色調	備 考
		口径	底径	高さ						
216	壺	14.0	—	—	口縁ナデ ヘラケズリ		長石 石英	良	灰	
217	壺	11.6	—	—	ハケ ミガキ		長石 石英	良	灰	
218	甕	16.8	—	—	ハケ ミガキ		長石	良	茶 褐	
219	甕	16.6	—	—	ナデ		長石	良	灰	
220	甕	14.5	—	—		赤彩	石英	良	暗 褐	
221	甕	11.0	—	—	ナデ ハケ		長石	良	暗 褐	
222	罎	10.5	—	—	ミガキ	赤彩	長石	良	赤 褐	
223	壺	12.0	—	—	ハケ	(内) 結束 LR 縄文	長石	良	灰	折り返し口縁
224	甕	(15.0)	—	—	ハケ		長石	良	暗 褐	口縁刻
225	壺	—	5.0	—	ヘラケズリ		長石	良	暗 褐	
226	壺	—	10.0	—	ハケ		長石	良	暗 褐	
227	壺	—	5.5	—	ヘラケズリ ハケ		長石	良	茶 褐	
228	高坏	17.0	—	—	ナデ	赤彩	長石	良	赤 褐	
229	高坏	(10.2)	—	—	ナデ		長石	良	黒 褐	
230	高坏	(12.6)	—	—	ナデ		長石	良	暗 褐	
231	高坏	(11.5)	—	—	ミガキ		石英	良	暗 褐	
232	高坏	—	13.2	—	ミガキ		長石	良	茶 褐	脚部有孔
233	高坏				ハケ	赤彩		良	暗 褐	脚部有孔
234	高坏				ハケ ヘラケズリ	赤彩	長石	良	赤 褐	
235	高坏	—	14.2	—	ミガキ ハケ	赤彩	長石	良	淡 褐	脚部有孔
236	高坏				ミガキ ハケ		長石	良	淡 褐	脚部有孔
237	高坏				ミガキ ハケ		長石	良	淡 褐	
238	鉢	9.3	4.5	4.0	ヘラケズリ		石英	良	暗 褐	
239	高坏	—	16.0	—	ミガキ		長石	良	茶 褐	

3区 ピット内出土土器 (第11・42図)

番号	器形	法量 (cm)			調整	文様	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
31	甕				ハケ		長石	良	暗褐	Pit 20
32	壺					赤彩 櫛描波状	長石	良	淡褐	Pit 14
33	甕					櫛描波状	長石	良	淡褐	Pit 36
34	甕				ナデ		長石	良	淡褐	Pit 36
35	甕				ハケ		長石	良	暗褐	Pit 37
36	甕				ハケ		長石	良	暗褐	Pit 37
37	甕				ハケ		長石	良	淡茶褐	Pit 39
38	甕				口縁刻目 ハケ		長石	良	暗褐	Pit 46
240	高坏	12.0	—	—	ミガキ		長石	良	淡褐	Pit 44
241	台付甕						長石	良	淡褐	Pit 63
242	台付甕	—	10.0	—	ハケ、ケズリ		長石	良	淡褐	Pit 59
243	甕				ハケ		石英	良	茶褐	Pit 64
244	甕	—	8.0	—	ハケ		長石 石英	良	暗褐	Pit 64 木葉痕
245	手捏ね	5.5	4.5	4.5				良	黒褐	Pit 65
246	甕	—	8.0	—	ハケ		長石 石英	良	暗褐	Pit 65
247	壺	—	9.2	—	ハケ		長石 石英	良	暗褐	Pit 65

3区 遺構外出土土器 (第45図)

番号	器形	法量 (cm)			調整	文様	胎土	焼成	色調	備考
		口径	底径	高さ						
248	壺	25.6	—	—	ハケ ヘラケズリ		長石	良	暗褐	有段口縁
249	壺(?)	11.7	—	—		口縁装飾	長石	良	淡褐	
250	甕	16.0	—	—	ハケ		長石	良	暗褐	
251	甕	(18.2)	—	—	ナデ		長石	良	暗褐	北陸系
252	甕	14.6	—	—	ハケ		長石	良	茶褐	S字状口縁
253	甕	12.6	—	—	ハケ		長石 雲母	良	黒褐	S字状口縁
254	甕	(21.3)	—	—	ハケ		長石	良	暗褐	

番号	器形	法 量 (cm)			調 整	文 様	胎土	焼成	色調	備 考
		口径	底径	高さ						
255	甕	16.5	—	—	ハケ		石英 長石	良	淡 褐	
256	器台	10.1	11.7	9.4	ミガキ	赤彩	石英 長石	良	赤 褐	
257	器台				ミガキ		石英 長石	良	暗 褐	脚部有孔
258	蓋				ミガキ		石英 長石	良	茶 褐	
259	器台				ハケ		石英 長石	良	茶 褐	
260	高坏				ミガキ		長石	良	淡 褐	脚部有孔

4 区 遺構外出土土器 (第46~50図)

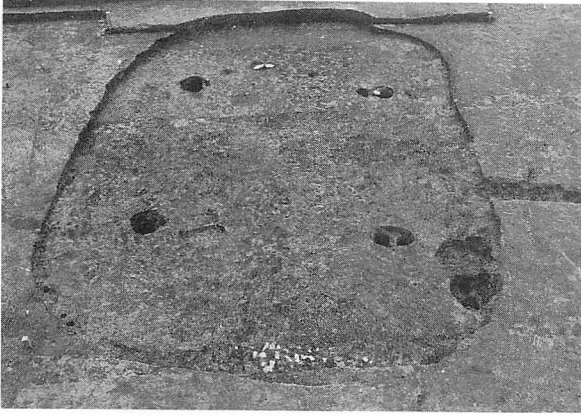
番号	器形	法 量 (cm)			調 整	文 様	胎土	焼成	色調	備 考
		口径	底径	高さ						
261	壺	26.0	—	—	ハケ		長石	良	暗 褐	折り返し口縁
262	裝飾器台	26.0	—	—	ナデ		長石 石英	良	暗 褐	北陸系
263	壺	15.0	—	—	ハケ	(内) 羽状文	長石 石英	良	淡 褐	折り返し口縁
264	壺				ハケ	鋸齒状文 肩部降帯		良	赤 褐	伊勢湾系
265	壺	—	6.5	—	ヘラケズリ					
266	埴	9.8	—	—	ミガキ			良		
267	甕	12.0	—	—	ハケ		長石	良	暗 褐	S字状口縁
268	甕	16.0	—	—	ハケ		石英	良	暗 褐	S字状口縁
269	甕	19.0	—	—	ハケ		長石	良	暗 褐	S字状口縁
270	甕	15.8	—	—	ハケ		石英 長石	良	黒 褐	S字状口縁
271	甕	14.4	—	—	ハケ		石英 長石	良	暗 褐	S字状口縁
272	甕	16.4	—	—	ハケ			良		単純口縁
273	甕	12.6	—	—	ハケ		長石	良	黒 褐	単純口縁
274	甕	24.0	—	—	ハケ		石英	良	暗 褐	単純口縁
275	甕	24.3	—	—	ハケ		長石	良	暗 褐	単純口縁
276	甕	20.2	—	—	ナデ ハケ		長石	良	暗 褐	単純口縁
277	甕	18.0	—	—	ハケ			良	暗 褐	単純口縁
278	甕	19.7	—	—	ナデ ハケ		石英 長石	良	淡 褐	単純口縁

番号	器形	法 量 (cm)			調 整	文 様	胎土	焼成	色調	備 考
		口径	底径	高さ						
279	甕	20.0	—	—	ハケ		長石	良	暗 褐	単純口縁
280	甕	17.2	—	—			長石 石英	良	暗 褐	単純口縁
281	甕	12.0	—	—	ハケ		長石 石英	良	暗 褐	
282	甕	14.0	—	—	ハケ		長石 石英	良	暗 褐	
283	甕	9.0	—	—	ハケ			良	暗 褐	
284	甕	—	11.3	—	ヘラケズリ ハケ		石英 長石	良	茶 褐	
285	装飾器台	16.0	—	—	ミガキ	赤彩 スカシ	石英 長石	良	赤 褐	
286	高坏	17.0	—	—	ミガキ ハケ	赤彩		良	赤 褐	
287	高坏	25.6	—	—	ミガキ		長石	良	茶 褐	
288	高坏				ミガキ	赤彩	長石	良	赤 褐	
289	高坏						長石	良	淡 褐	
290	器台	—	6.4	—	ハケ ミガキ	赤彩	長石	良	暗 褐	
291	高坏					赤彩	長石	良	灰 褐	
292	高坏				ヘラケズリ ハケ		長石	良	暗 褐	脚部有孔
293	高坏	—	11.0	—			石英 長石	良	暗 灰	脚部有孔
294	高坏				ミガキ		石英 長石	良	淡 褐	脚部有孔
295	高坏							良		脚部有孔
296	高坏				ハケ		長石	良	暗 褐	脚部有孔
297	高坏				ミガキ		長石	良	暗 褐	脚部有孔
298	高坏				ヘラケズリ		石英	良	暗 褐	脚部有孔
299	高坏				ヘラケズリ		石英	良	暗 褐	脚部有孔
300	高坏				ヘラケズリ		長石	良	暗 褐	脚部有孔
301	高坏				ハケ		長石 石英	良	暗 褐	脚部有孔
302	高坏				ヘラケズリ		長石	良	暗 褐	脚部有孔
303	高坏				ハケ		長石	良	淡灰褐	脚部有孔
304	高坏						石英 長石	良	茶 褐	脚部有孔

番号	器形	法 量 (cm)			調 整	文 様	胎土	焼成	色調	備 考
		口径	底径	高さ						
305	高坏				ケズリ		長石	良	茶 褐	脚部有孔
306	甌(?)	10.7	—	—	ハケ ヘラケズリ		長石	良	灰 褐	折り返し口縁
307	甌(?)	12.3	—	—	ハケ		長石	良	暗 褐	
308	甌	—	3.5	—	ヘラケズリ ハケ		長石	良	暗 褐	
309	高坏				ミガキ		長石	良	淡 褐	脚部有孔
310	器台				ハケ		長石	良	茶 褐	
311	ミニチュア				ハケ		長石	良	暗 褐	
312	?	—	5.5	—	ハケ		長石	良	灰	焼成前 底部穿孔
313	裝飾器台				ハケ		石英 長石	良	茶 褐	スカシ孔
314	手捏ね	4.5	3.5	7.0			石英 長石	良	暗 褐	
315	壺	—	5.5	—			石英 長石	良	茶 褐	底部初痕
316	壺	—	7.5	—			石英 長石	良	淡 褐	
324	甕				口縁刻目 ナデ		石英 雲母	良	茶 褐	
325	甕				口縁刻目 ハケ		石英	良	暗 褐	
326	甕				口縁刻目 ハケ		石英 雲母	良	暗 褐	
327	甕				口縁刻目 ハケ		長石 石英	良	暗 褐	
328	甕				ハケ		長石 石英	良	黒 褐	
329	甕				ハケ		長石	良	黒 褐	
330	甕				ハケ		石英	良	暗 褐	
331	壺					赤彩 廉状文	長石	良	淡 褐	
332	壺					櫛描波状	石英	良	淡 褐	
333	壺					櫛描波状		良		
334	壺				ハケ		長石	良	淡 褐	折り返し口縁
335	壺				ハケ		長石	良	暗 褐	折り返し口縁
336	壺				ハケ		長石	良	淡 褐	折り返し口縁
337	壺				ハケ		長石	良	淡 褐	

番号	器形	法 量 (cm)			調 整	文 様	胎土	焼成	色調	備 考
		口径	底径	高さ						
338	壺					羽状縄文	長石	良	暗 褐	
339	壺					羽状縄文 ボタン状貼付	石英 雲母	良	淡 褐	
340	甕				ハケ			良	淡 褐	
341	甕				ハケ		長石	良	淡 褐	
342	甕				ナデ		長石	良	淡 褐	
343	甕				ハケ		長石	良	淡 褐	
344	甕					櫛描波状	石英 長石	良	灰 褐	
345	甕				ハケ		石英 雲母	良	茶 褐	S字状口縁
346	甕				ハケ		石英 雲母	良	茶 褐	S字状口縁

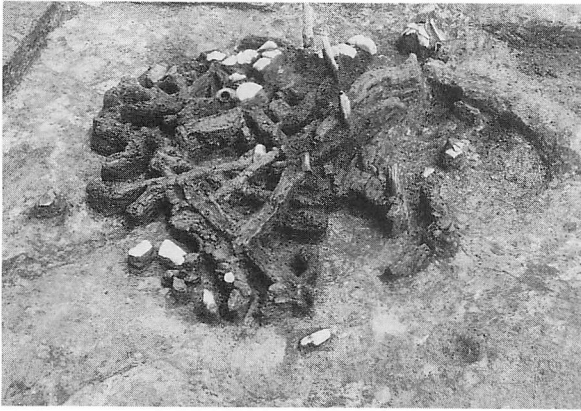
番号	名 称	長×幅×厚(cm)、重(g)	出土場所	時 代	備 考
347	紡 錘 車	φ 1.8×0.8 3.3 g	C-23	弥生後期	
348	紡 錘 車	φ 3.2×1.1 9.9 g	E-8	古墳初頭	
349	土 器 片	溝深0.7~0.2	1号溜池	古墳初頭	砥石として使用 壺胴部
350	磨製石鏃	4.1×1.7×0.2 1.8 g	B-10	古墳初頭	
351	磨製石鏃	4.2×?×0.2 2.0 g	4区溝状遺構	古墳初頭	
352	砥 石		A-23	弥生後期?	
353	漆 塗 櫛	2.6×2.7×0.4	2区ゴミ捨場	古墳初頭	細竹を束ねて折り 曲げる
354	青銅製金具	5.8×0.6	C-4	近 世	割ピンによる細工
355	かんざし	11.4×0.9×0.1	B-3	近 世	材質不詳
356	キセル雁首	8.6×? 7.1 g	A-22	近 世	しんちゅう製
357	キセル雁首	5.6×φ 0.9 8.9 g	B-4	近 世	しんちゅう製



1号住居址



2号住居址



竪穴状遺構



第1ピット群



第2ピット群

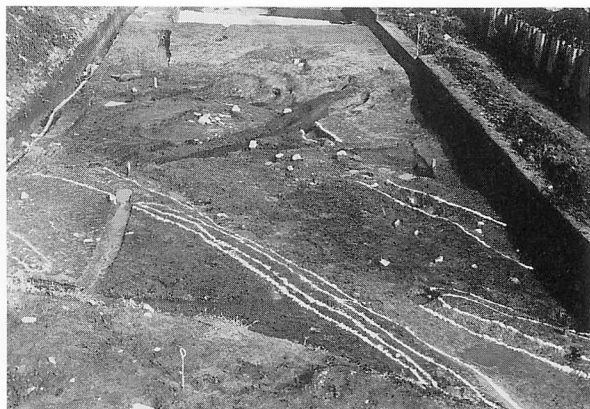


第3ピット群

図版2



1区 作業風景



1区 第2ステージ水田面・畦畔



1区 第2ステージ水田面 遺物出土状況



1区 第3ステージ 水田面足跡



4区 溜池状遺構



4号溝と竖穴状遺構



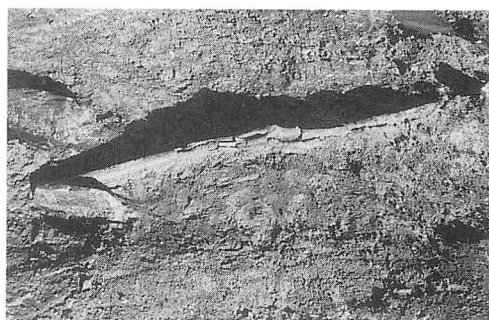
1号住 ピット 4内柱痕



2号住 柱 痕



ピット 65 木材出土状況



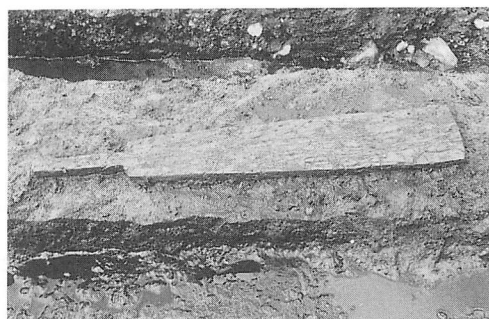
1区 水田 クワ柄出土状況



1区 水田 剣形木製品出土状況

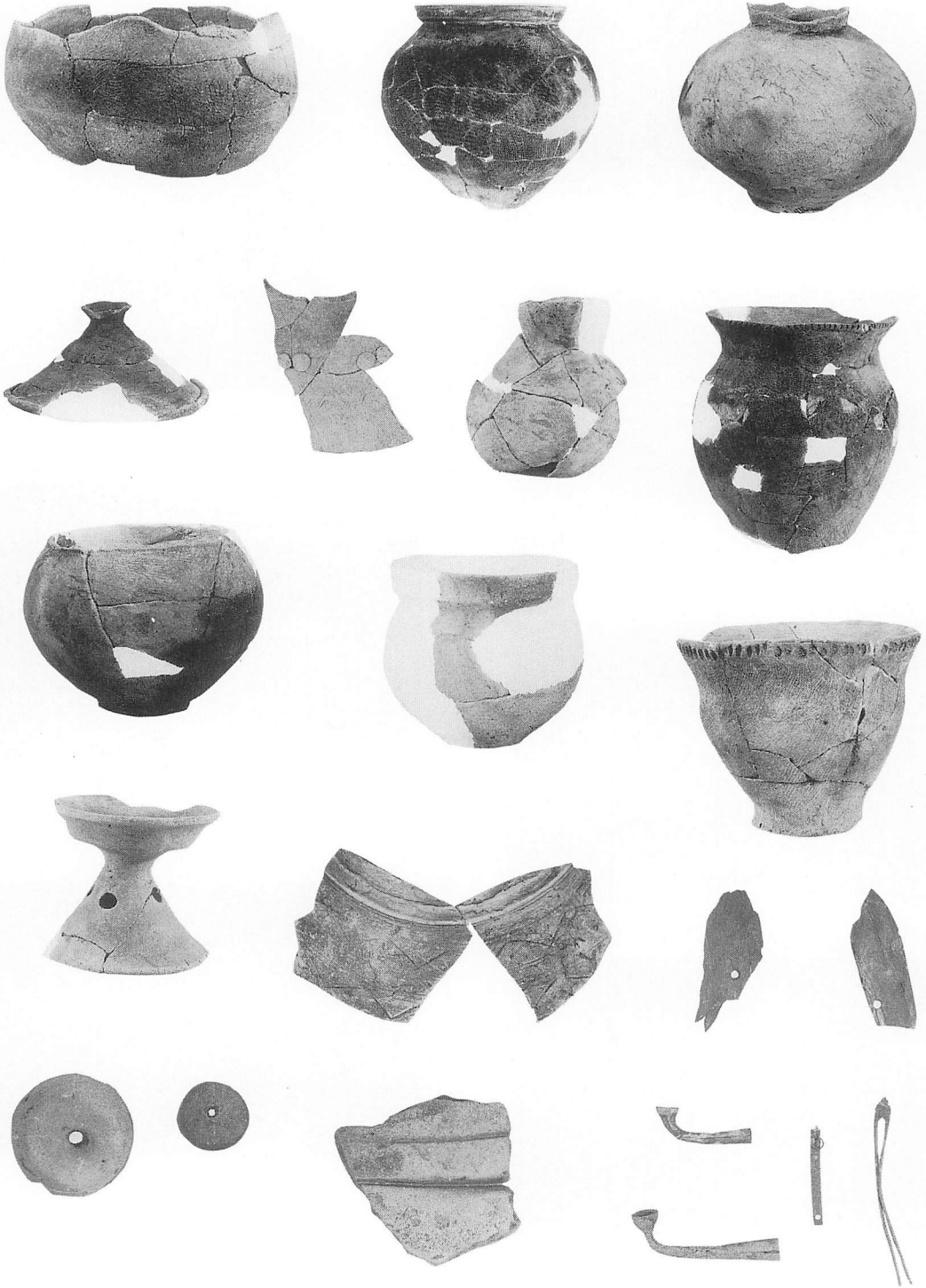


1区 水田 又クワ出土状況

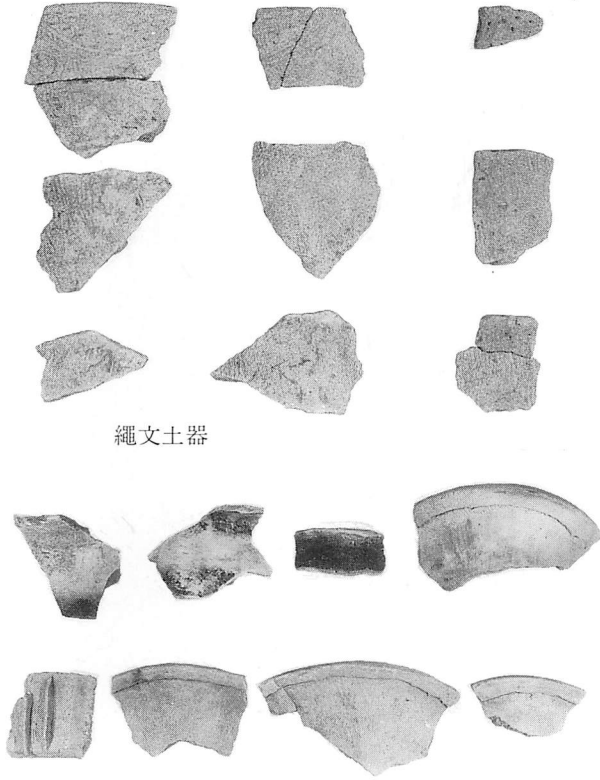


1区 水田 組み合せクワ出土状況

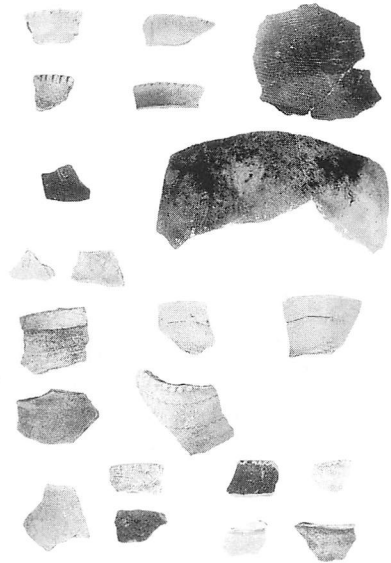
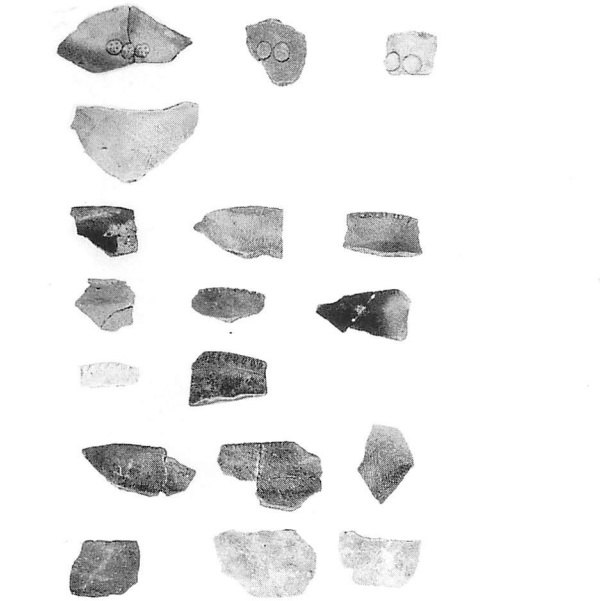
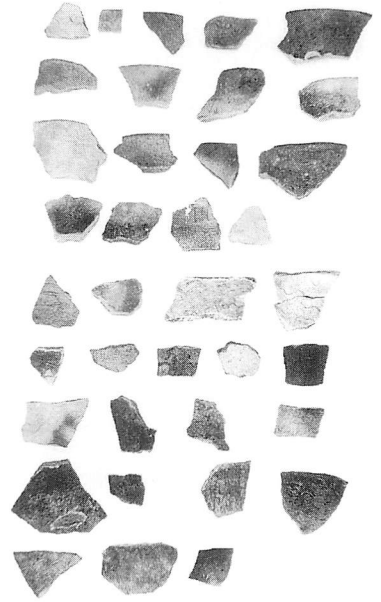
图版 4



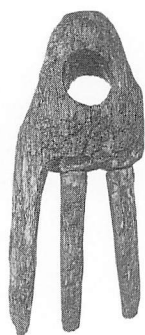
出土遺物（土器・石器・土製品・金属製品）



縄文土器

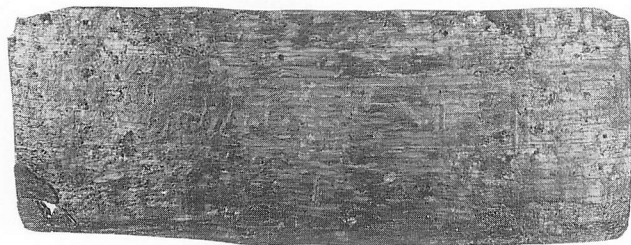
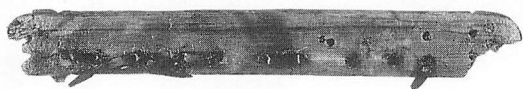


出土土器



(表)

(裏)



出土木製品

一町五反遺跡

目 次

例言

I 発掘の原因と経過	113
II 遺跡の位置と環境	114
III 層 序	115
IV 遺構と遺物	116
V 結 び	118

例 言

1. 遺跡名は、発掘通知では「蔵福遺跡」としたが、八代町教育委員会で平成元年度に発行した「遺跡詳細分布調査報告書」では当該地を「一町五反遺跡」としたので、これにしたがって変更した。
2. 発掘調査・整理作業・報告書作成は山梨県埋蔵文化財センターが行なった。発掘担当、報告書の執筆・編集は同センター主幹・調査研究課長森和敏があたった。
3. 発掘参加者と整理参加者は次のとおりである。
宮沢まさみ、渡辺征子、保坂幸子、長井よしえ、中村あつ子、長坂俊江、長坂素代子、齋間千津子、齋藤英子、小林秀樹、森秀明。

II 遺跡の位置と環境

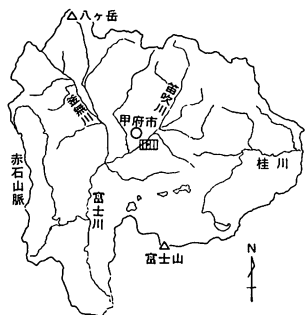
位置

発掘地は東八代郡八代町増利字蔵福 431 番地である。ここは甲府盆地南東、御坂山麓に広がる浅川扇状地の末端にあり、増利集落の上（東）部に位置する。発掘面積は約40㎡である。

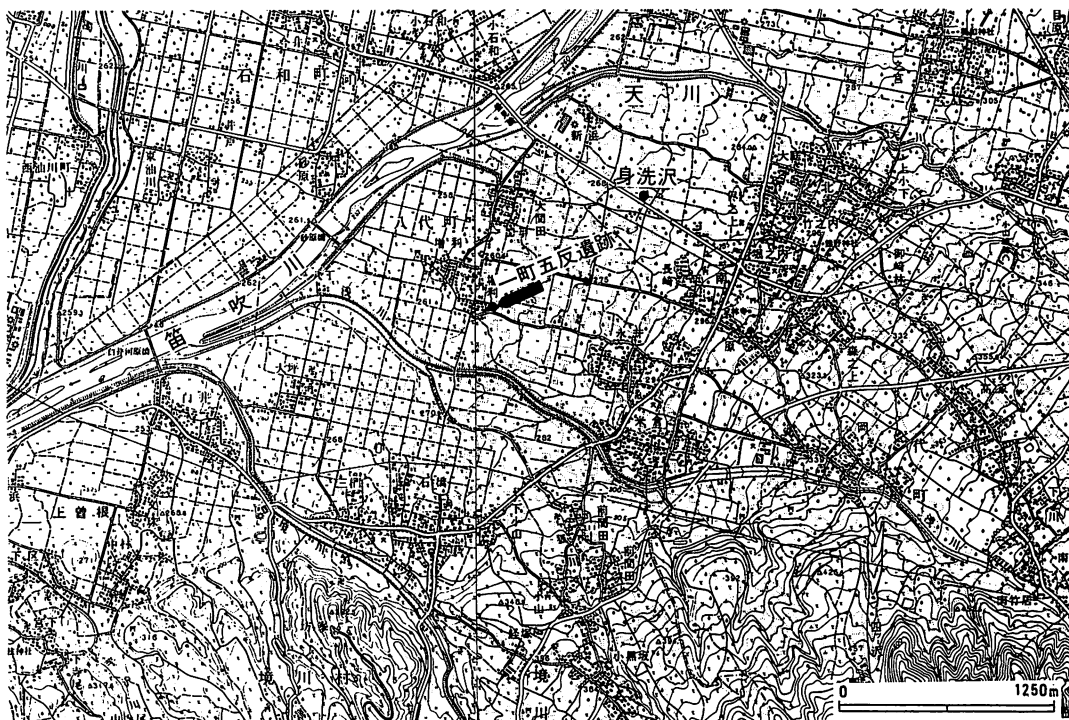
環境

遺跡は南側が 1.5 m くらい、北側がわずかに低くなっている巾約 100 m の西に傾斜する自然堤防状の地形の上に所在する。遺跡とその南約 300 m を西に流れる浅川との間は礫層や砂礫層が重なる氾濫層があり、北側は粘質腐食土層のある谷になっている。西 900 m には南に流れる笛吹川があり、その付近から西は盆地床となる。

東 200 m に中央自動車道があり、この建設時に発掘した増福遺跡では弥生・古墳時代の遺構や遺物は検出されなかったが、道路を挟んで西側では弥生時代末頃の土器が多量に出土しており（八代町誌・昭50）、さらに西に続く増利集落内でも土器が発見されている。また北西 100 m 地点には、前期古墳と考えられる八幡さん古墳があり（山梨の考古資料集・拙著・昭59）、この遺跡との関連が考えられる。この他浅川扇状地には扇央から扇端にかけて身洗沢遺跡などいくつかのこの時期の遺跡がある。



第 2 図 一町五反遺跡位置図



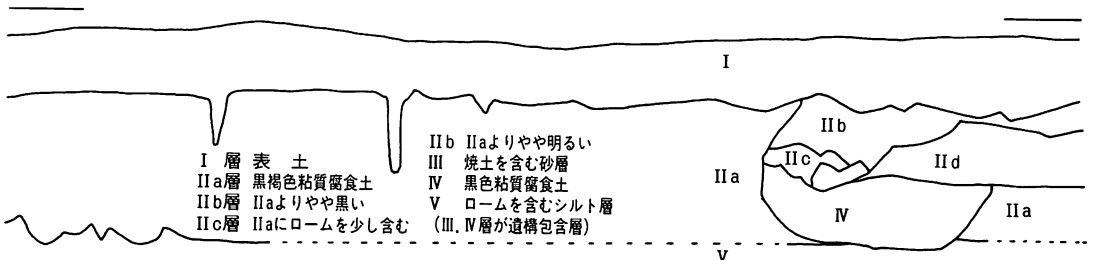
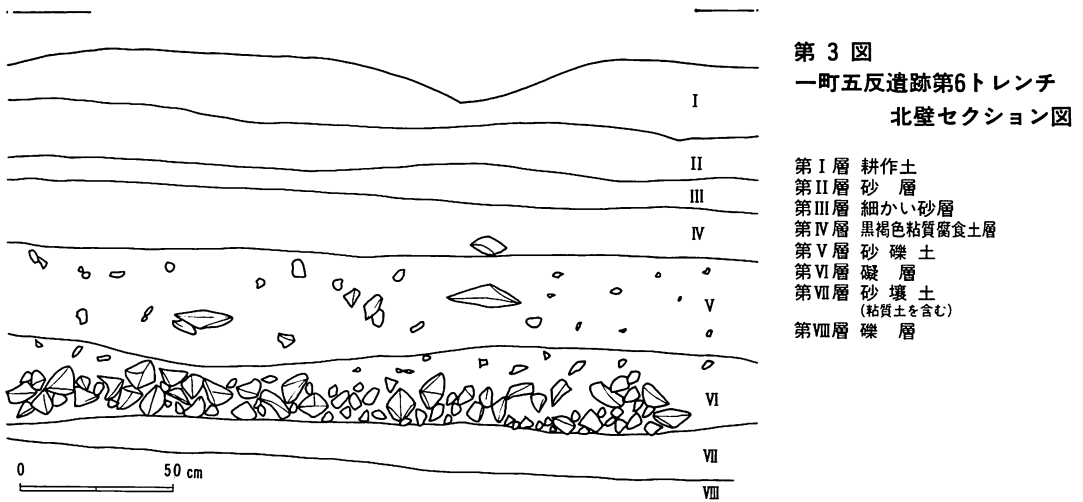
第 2 図 一町五反遺跡位置図

Ⅲ 層 序

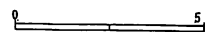
遺構を検出したNo.3 TとNo.4 Tの間の東側壁およびここより約30m南側の低い所に掘ったNo.6 Tのセクションについて説明する。

先ず前者は基本層序は、第Ⅰ層粘質腐食土の表土、第Ⅱ層黒褐色粘質腐食土と第Ⅴ層ロームを含むシルト層から成る。第Ⅴ層の下層はローム層である。遺構は第Ⅱ層中にあり、最初に検出した焼土第Ⅲ層はこの中間にあり、掘立柱建物址はこの下部に位置する。現地表面から30cmから50cmの間にある。後者は基本層序として表土（耕作土、水田）、砂層、黒褐色粘質腐食土、砂を含む礫層から成る。砂層、（砂）礫層は浅川の氾濫層である。第Ⅳ層の黒褐色粘質腐食土層と第Ⅶ層砂壤土は古い水田だった可能性もあり、蔵福遺跡と同時期の水田層がこの付近にあるかもしれない。

なお、この遺跡の付近の地層は次のようである。南30mの地点では、前述したNo.6 Tのように砂層、礫層、黒色粘質腐食土層の互層があり、東200mの地点では、蔵福遺跡の発掘調査報告書に載せられているように、2m以上の粘質腐食土層や砂層の場所がある。また北150mの地点では、石橋一石和線の工事中観察したところ、2m以上の粘質黒色腐食土層があり、西30mの地点では、耕作中の深掘りによると、1.5m以上の粘質黒色腐食土層があり、この中の80cm～100cmの層に遺物包含層があるという。このようにこの付近は扇状地末端特有の地層状態である。



第 4 図 一町五反遺跡No4T付近東壁セクション図 (S=1/200)



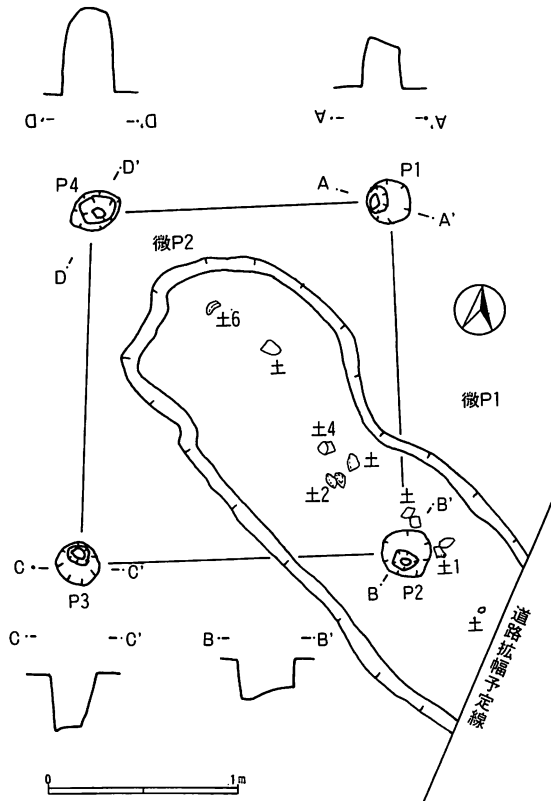
IV 遺構と遺物

遺 構

重複して、1 焼土と集石、2 溝状遺構、3 掘立柱建物址の順序で検出された。

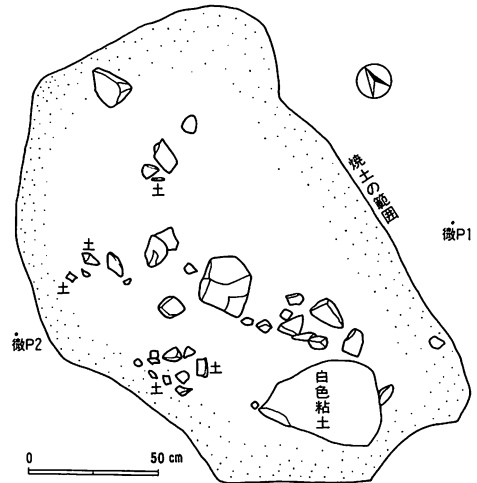
1の焼土の範囲はほぼ2m×1.3mと広く、この中に不規則に自然石と土器片が散布している。2は1と重なっていて、東は道路拡幅予定範囲の外まで続いていて、深さは10cmから20cmである。3は柱穴を4本検出したが、北東側と南西側の発掘範囲内に柱穴がないので、4本柱の建物とみてよいであろう。このプランは約6.2㎡、不整形で柱穴も粗末な感じがする。溝状遺構の下層に床面と思われる堅い面が柱穴の内外に広がっていたので高床の倉庫跡であろうと考えられる。

柱 間	芯々間距離	柱穴番号	深さ	柱穴の大きさ
P 1—P 2	185 cm	1	27cm	24 × 23
P 2—P 3	174	2	20	26 × 25
P 3—P 4	185	3	29	24 × 23
P 4—P 1	158	4	45	29 × 21
		平均	30	



第 5 図 一町五反遺跡遺構図 (S=1/40)

掘立柱建物計測表

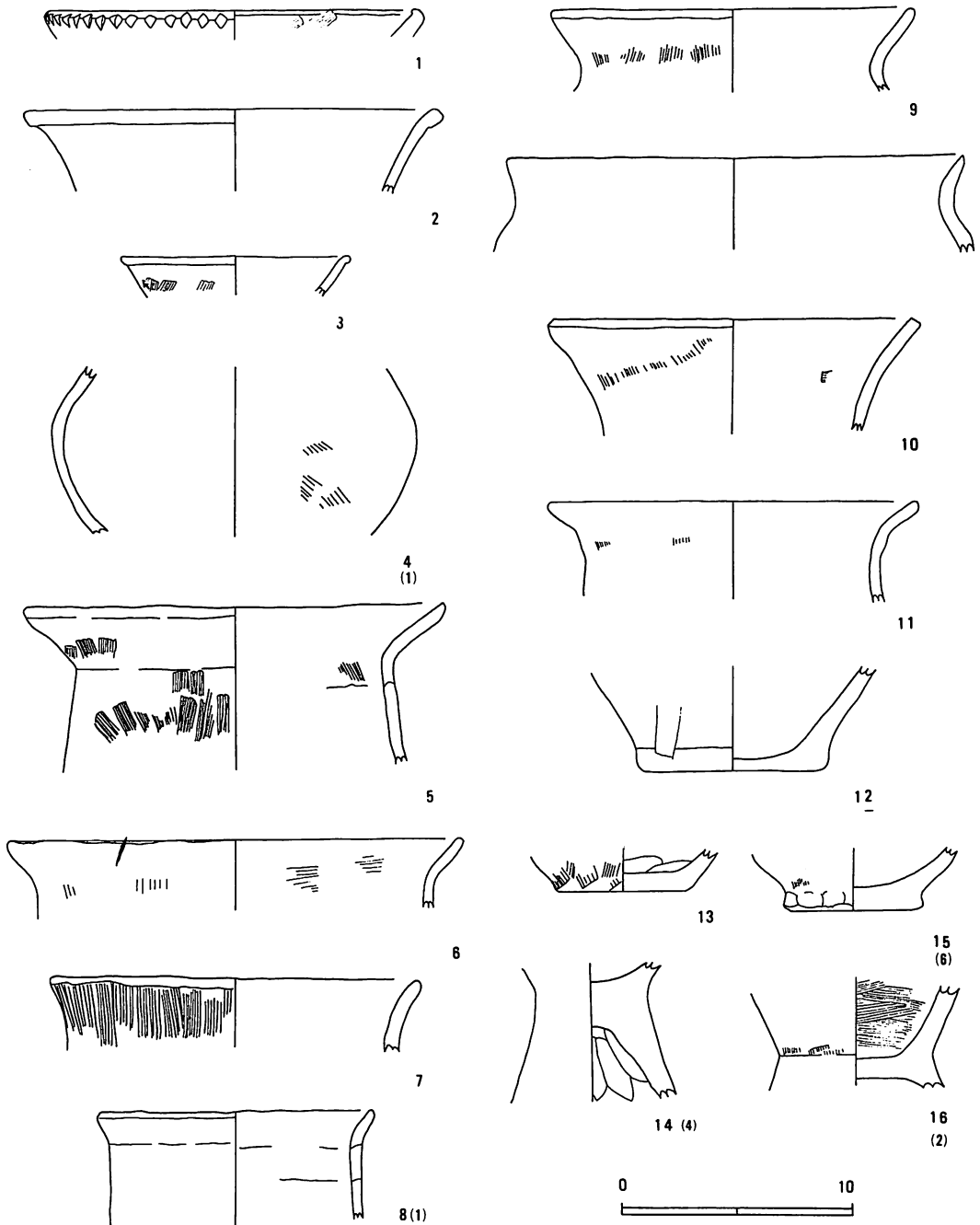


第 6 図 一町五反遺跡集石図

遺物

前述した焼土と溝状遺構の中および掘立柱建物の床面付近から弥生時代終末の土器片が出土した。

第7図の1は口唇部に刻目とはげ目痕がある甕の口縁部、2は折り返し口縁の壺、10は口唇

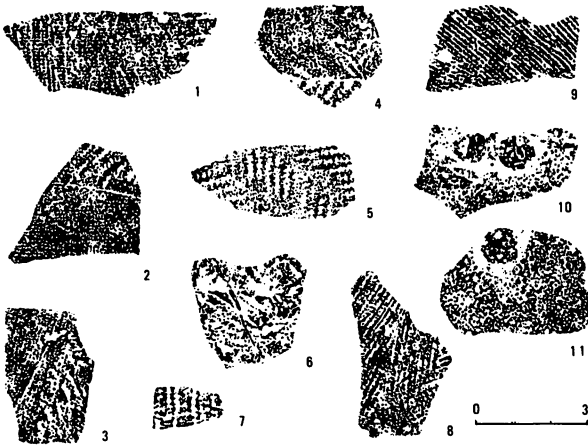


() 内は第5図の遺物No.

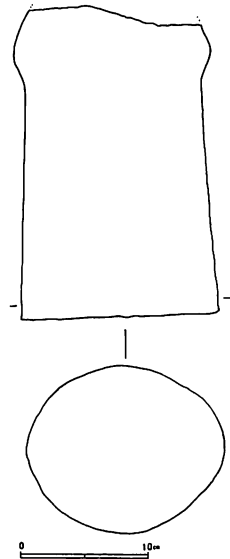
第7図 一町五反遺跡出土土器実測図 (S=1/3)

部が平らな壺、4は壺の胴部でこの時期の特徴を表わしている。またその他は甕、壺、高坏等ではけ目痕をヘラ調整しているものが多い。

第8図の1～5、8、11は細縄文を施文し、この中4と5は羽状で、10と11はボタン状浮文をつけ、9は非常に端正なけ目痕を有する。一町五反遺跡で出土した土器は全て、弥生時代末葉の前野町式土器に並行しているものと考えられ、一城林遺跡（昭55・山梨県教育委員会）や岩清水遺跡試掘調査報告書（昭54・山梨県教育委員会）に掲載されている時期のものと同じである。第8図の9はやや下る古墳時代初頭の五領I式期にあてられることもできないではないが、総体的には弥生時代終末期の遺物とみてよいであろう。



第8図 一町五反遺跡出土土器拓影 (S=1/2)



第9図 参考資料(石棒)
(増利の道祖神小屋に安置、堆石岩)

V 結 び

第1地点は弥生時代終末期の遺跡と考えられる。前述したように近くで該期の遺物が出土しているが、周辺で遺物の分布調査をしてもほとんどその散布はない。これは遺構の包含層が深いためであろうと思われる。増利集落内では磨製石斧（八代町誌）や土器が数ヶ所で出土したという話を聞いており、また本遺跡の200 m北にある共同墓地でも該期の土器が出土しており（八代郷土館所蔵）、石器も出土している。^(註1) さらに100 m北西には前期古墳と考えられる八幡さん古墳もあるので、増利集落が形成されたのはこの頃と考えられ、その後開発が進んで古代には条里型地割^(註2)も行なわれ、中世、近世もこの集落は存続し、現在に至っていると考えられる。

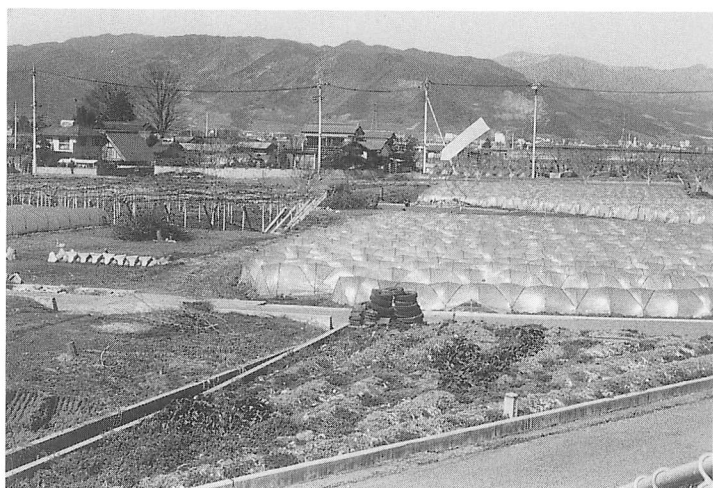
註1 『甲府盆地沖積層の縄文時代遺跡』「山梨の考古資料集」拙著 昭和59年 で縄文時代の遺跡として取扱ったが弥生時代の可能性もある。

註2 「石稿条里制遺構 蔵福遺跡 俣ノ下遺跡」山梨県教育委員会 森和敏 昭和59年

一町五反遺跡
遠景



一町五反遺跡
近景



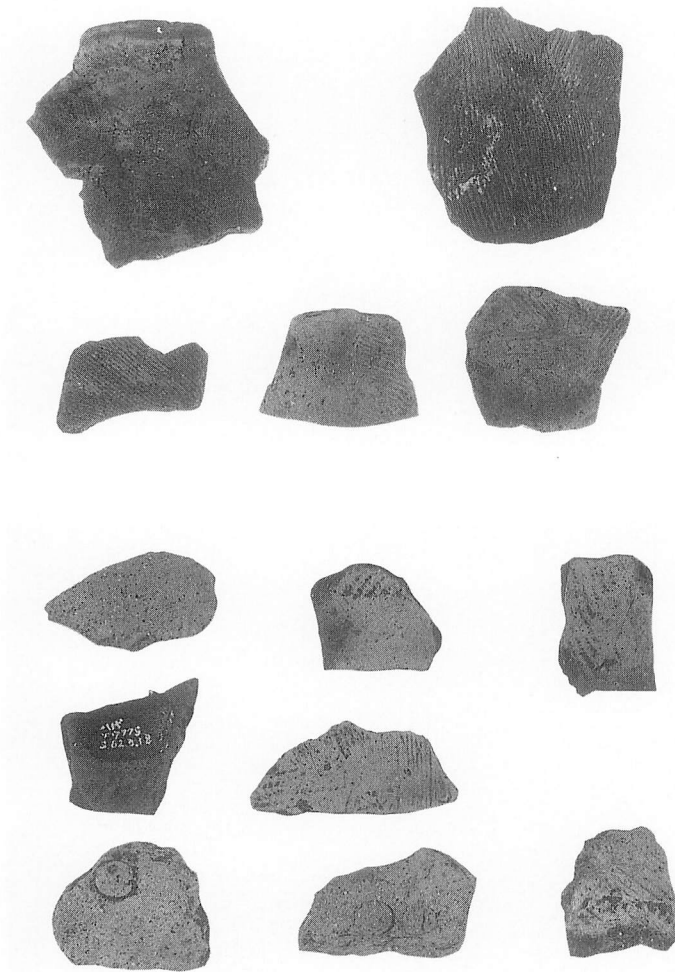
一町五反遺跡
掘立柱建物址



図版 1 一町五反遺跡 遠景・近景・検出遺構



一町五反遺跡
集石、焼土、遺物検出状態



一町五反遺跡
出土遺物 1

一町五反遺跡
出土遺物 2

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第55集

みらいざわ いっちょうごたん
身洗沢遺跡・一町五反遺跡

印刷 平成2年3月25日

発行 平成2年3月31日

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曾根 923
TEL 0552-66-3881

発行 山梨県教育委員会
印刷 (有) 新星堂印刷

